



始



勝探外郊
り 歸 日 の そ
正 訂 補 増

大 落
正 合
三 浪
年 雄
版 著

大正
3. 6. 17
内交

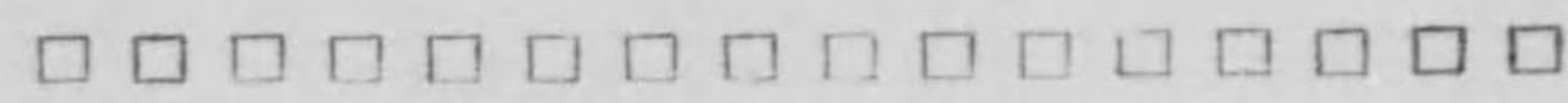
行發房書堂文有

□□□□□□□□□□□□□□□□

小序

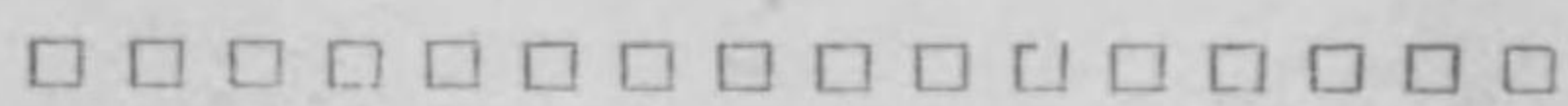
樂は十分ならざるを佳とす況して旅の樂は餘
 りに食らざるを專一とす海水浴湯治時を費し
 金を費す事多きに從つて樂みの減殺され行く
 事は何人も知る處長逗留に將基も基も退屈を
 凌ぐに足らで里心の付くに至るは大串の食べ
 飽をして茶漬の味を優れりとする者と選まず
 茲に『七日の旅』に續いて『その日歸りの旅』を梓に

□□□□□□□□□□□□□□□□



のは上すものは忙中に閑を求め用事も缺かず莫大
 の散財もせず外見を張らず氣を悠然として一
 週日の内に唯一日なる日曜日を利用し山を樂
 み水を樂み潮風に煤烟に汚れし袂を拂ひ松籟
 に砂塵に塗みれし耳を洗はん事を凡ゆる天下
 の樂の爲めに生き樂の爲めに生きんとする人
 人に勧めんとてなり

落合浪雄述



再版序

酒を飲むも趣味なり芝居を見るも趣味なり然れども
 趣味の最も高尚なるは自然を愛するの樂みに若くも
 のなし三尺の庭に稗藓壹盆を飾るも是なり床上一輪
 の花を挿すも是なり然れども自然を愛するの極致は
 大なる風光に接するに若くものなし春夏秋冬風雨晴
 曇孰か大自然の色彩形容ならざる可き旅行は自然を



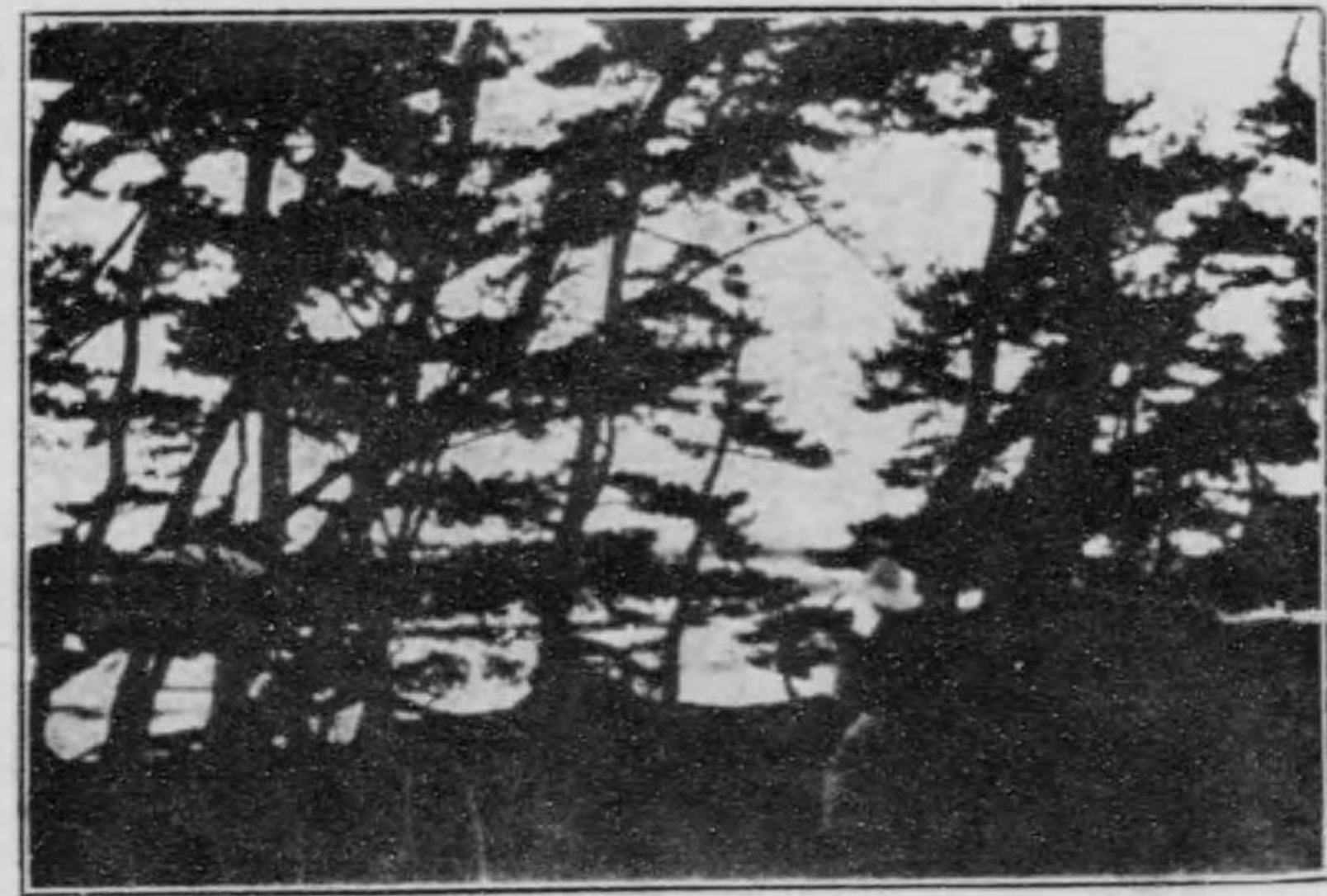
寺天祐黒目



園庭院光大田太

愛し時に自ら自然と同化し時に自ら自然と對峙し修
 養に質し養氣に値し更に肉體的健康を増進する所以
 なり、旅行の樂みを樂むを得ざる忙しき歴訪の人の爲
 めに作れる旅行案内名けて「その日歸り」と云ふ日曜の
 一日此の一冊を手に入れば自然を樂むの上に名所舊
 蹟神社佛閣觀風學修の利ある可し

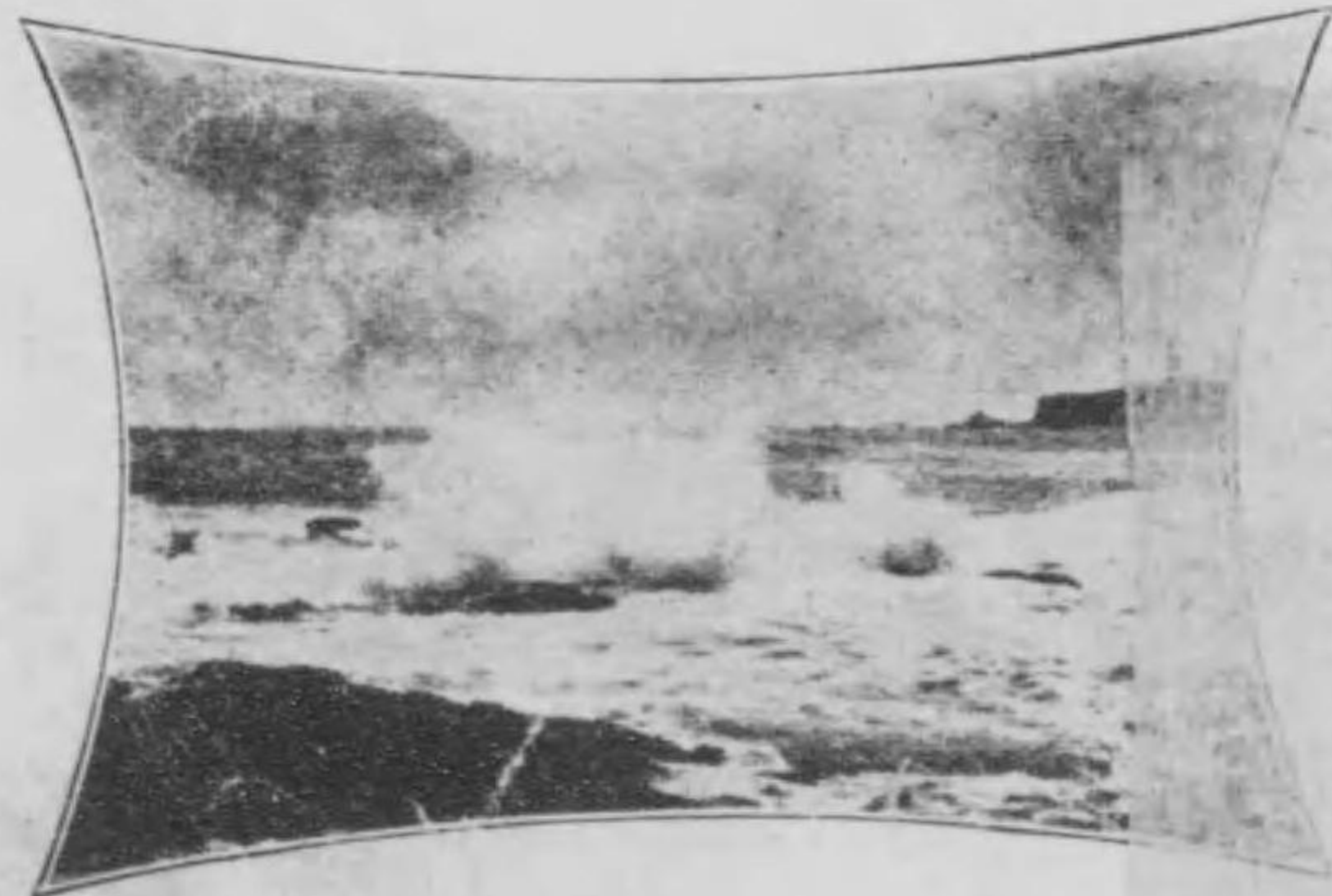
著者識



浦ヶ袖りよ山松毛稻



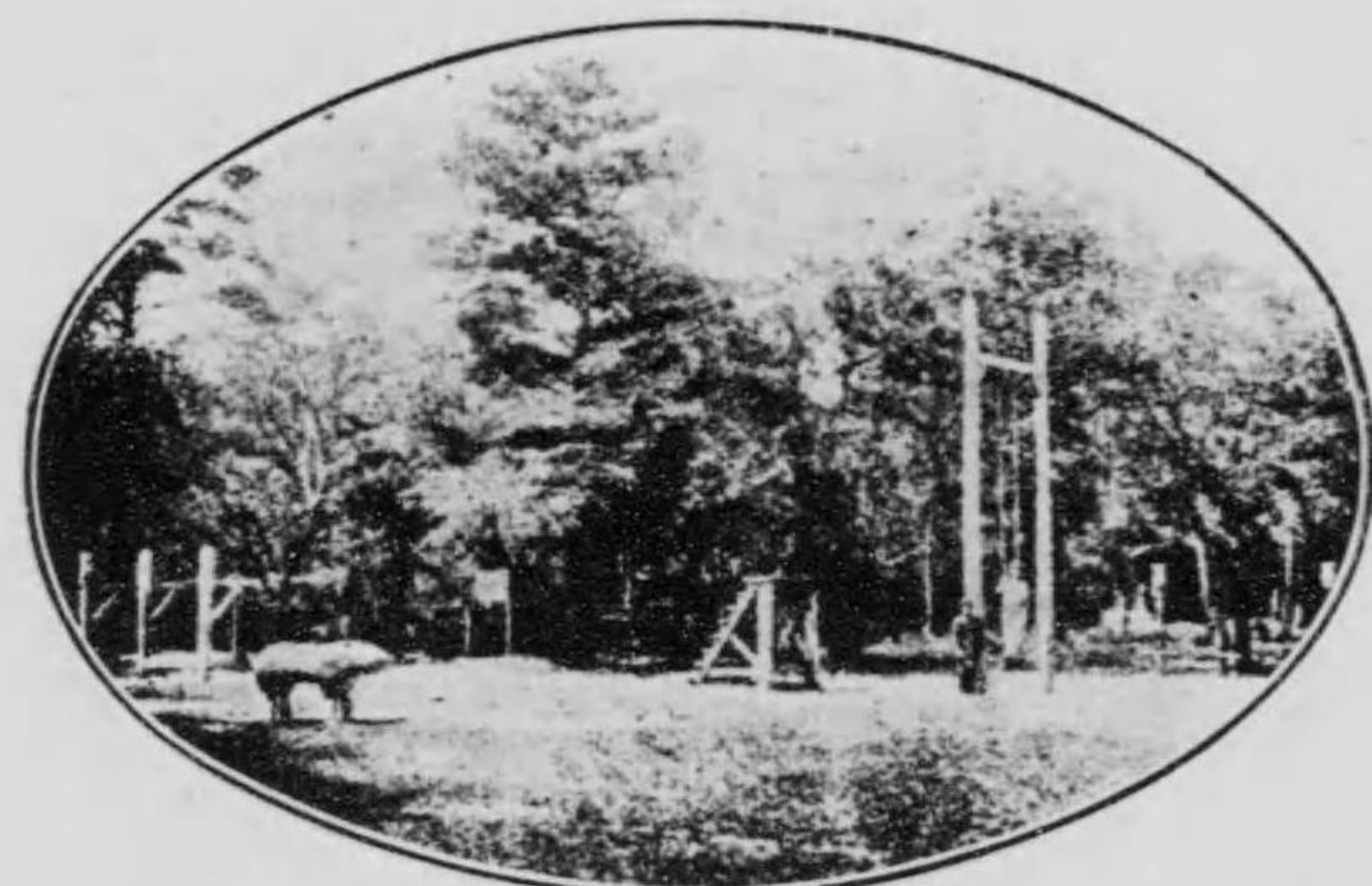
山 間 浅



臺 燈 の 子 鏡



む望を島の江りよ濱ヶ里七



水川公園園



助川海岸岸



向島竹屋の渡



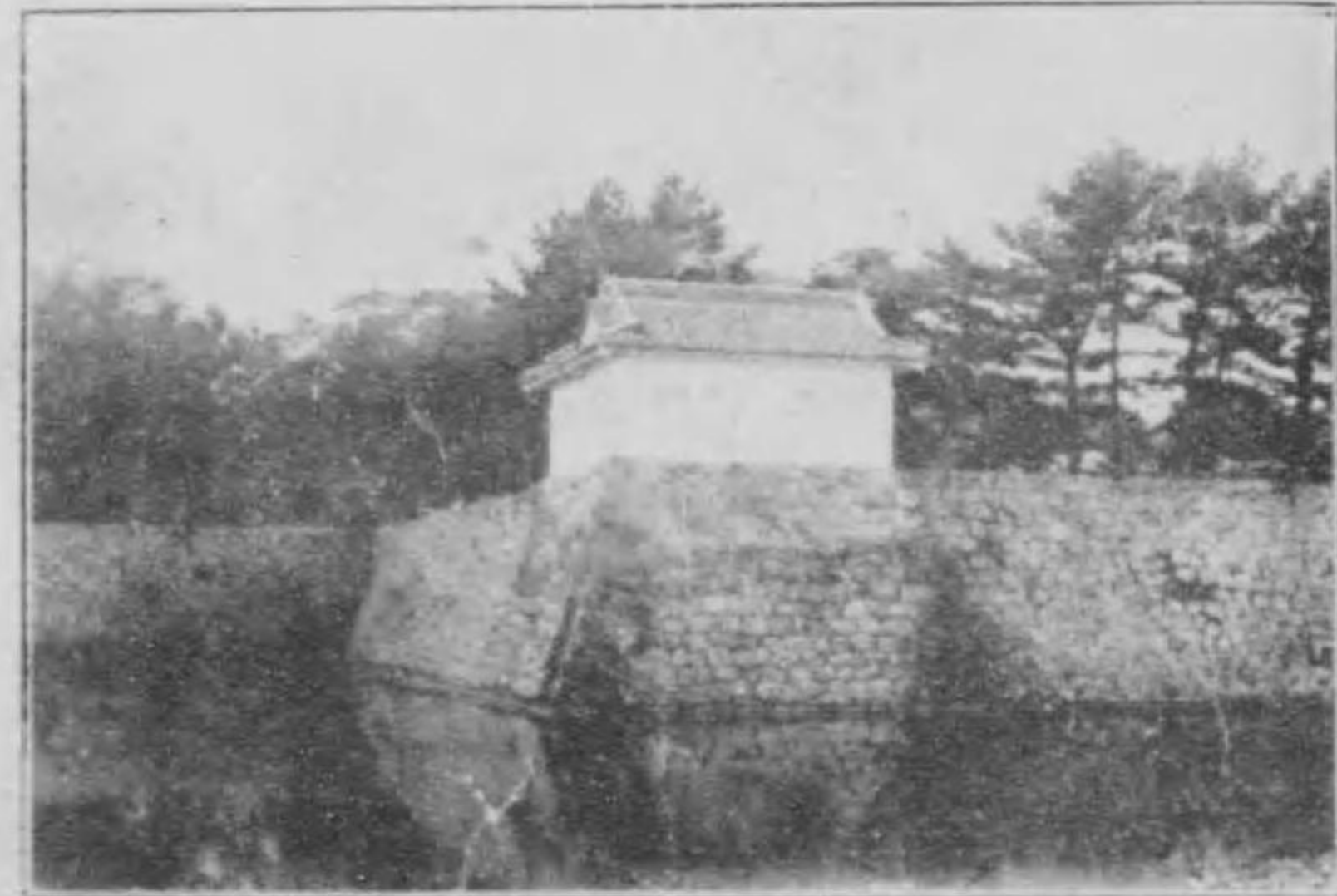
堀の内五重塔



森ヶ崎鑛泉



水戸常盤公園傘松



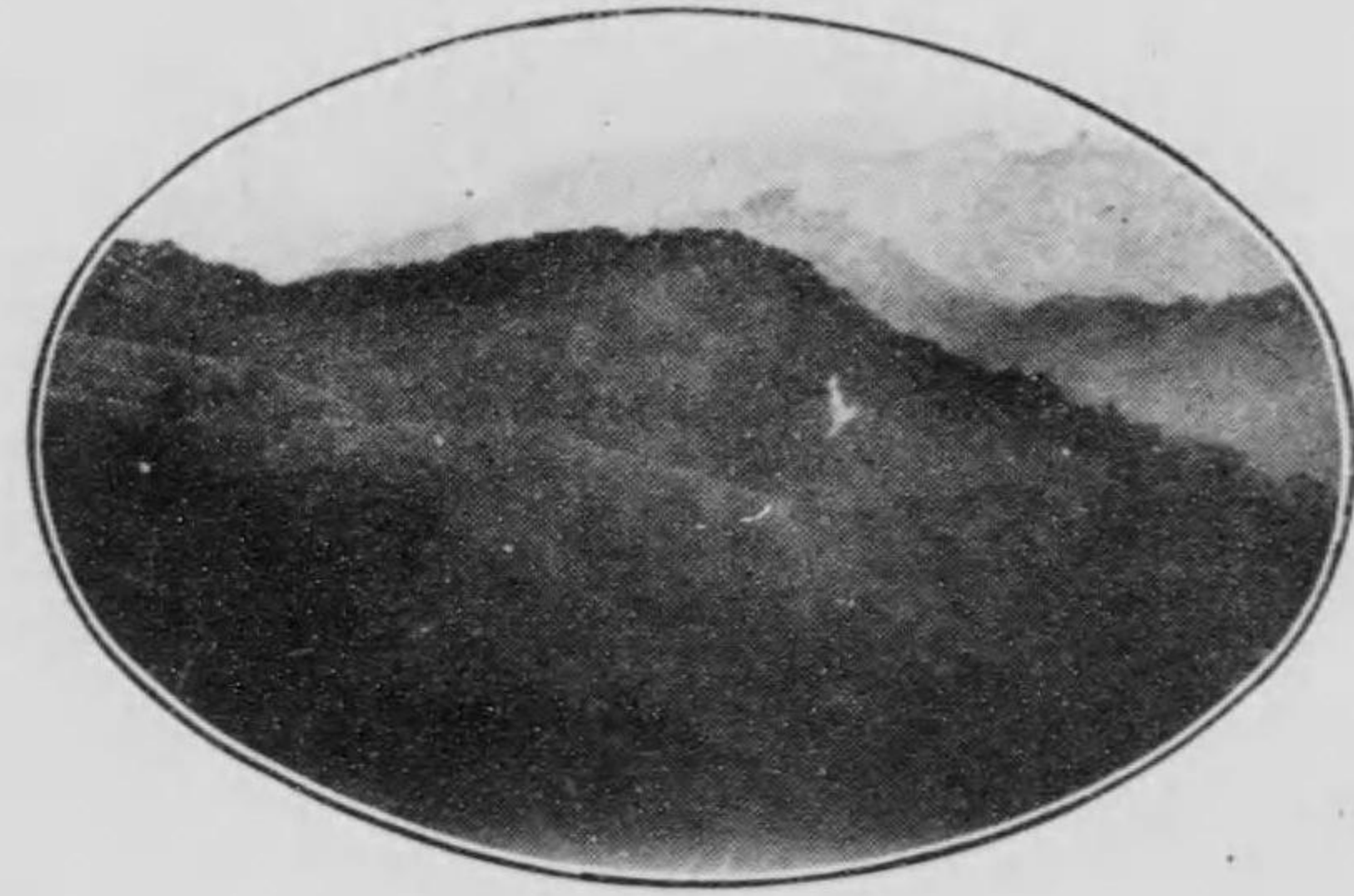
小田原古城



子神と手賀沼



橋月渡島松



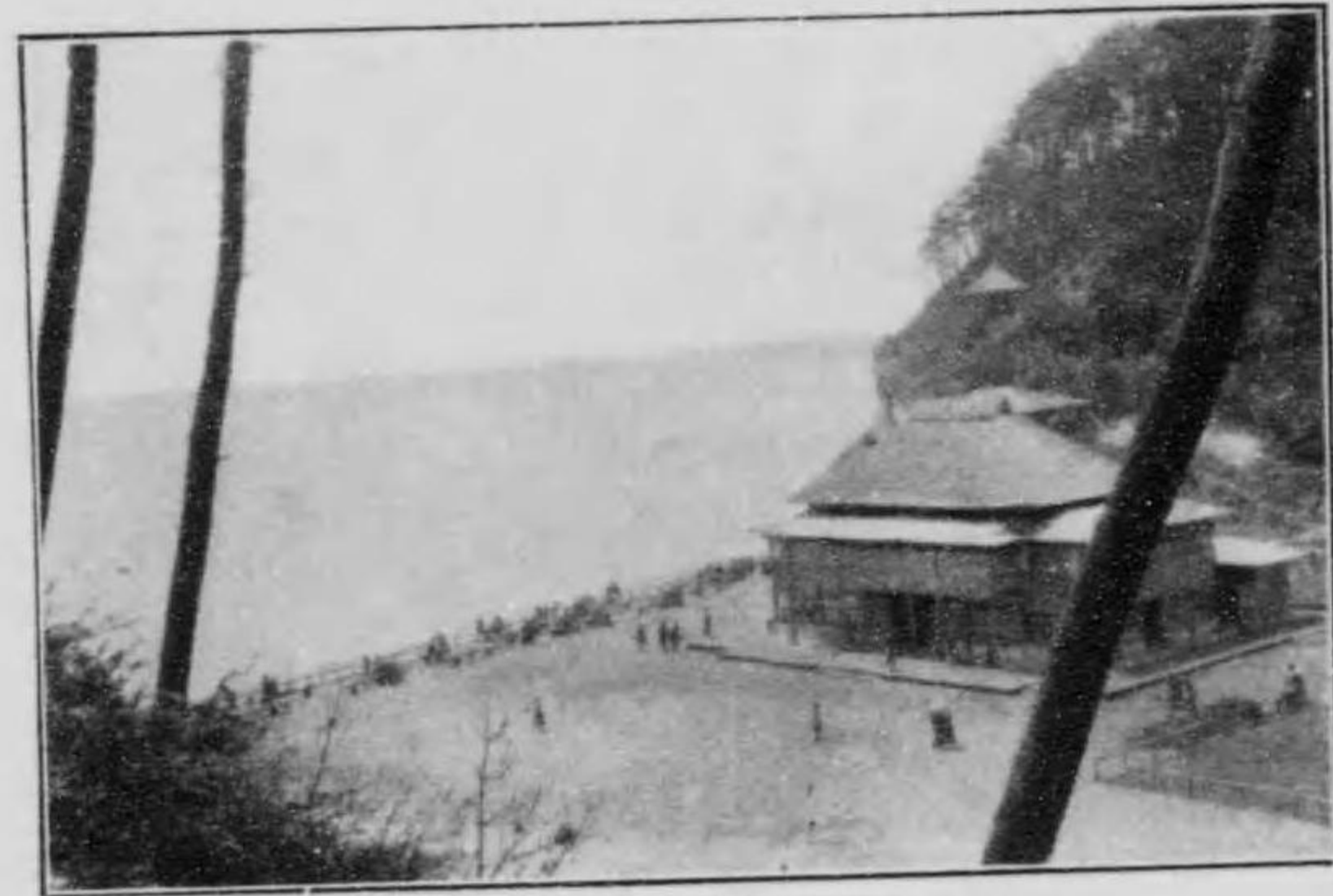
山義妙



湖名榛



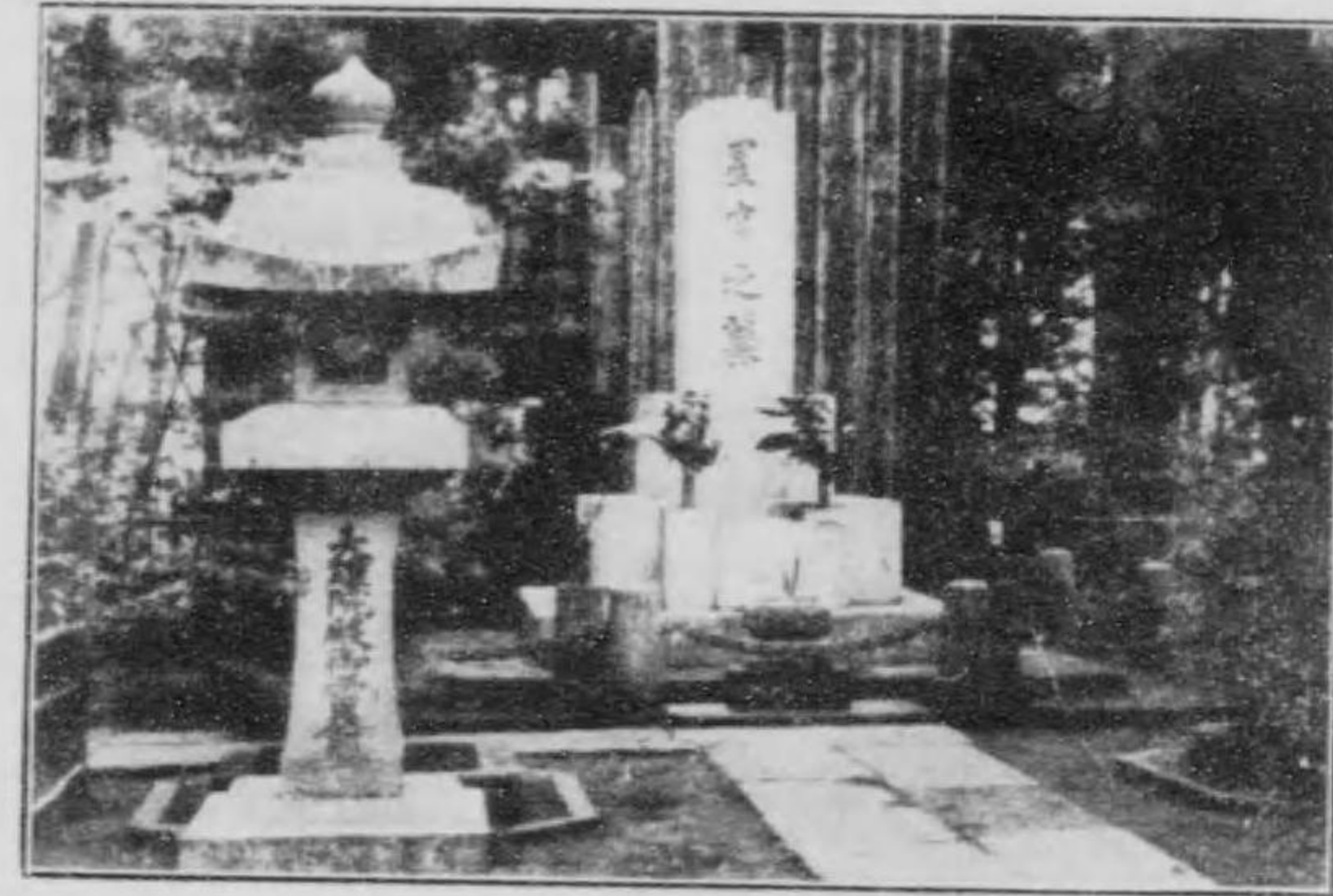
花櫻の島向



三溪園海岸



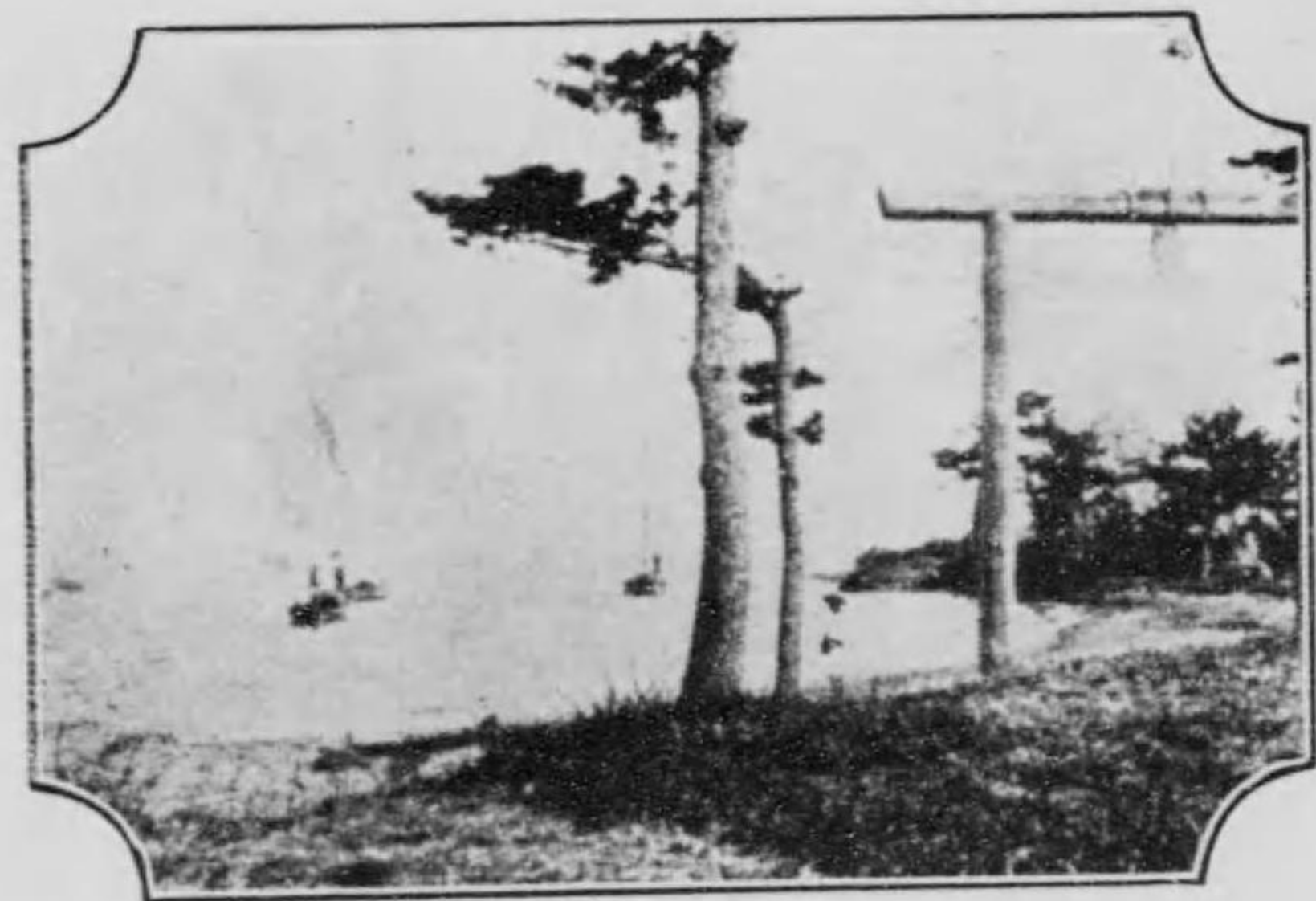
三溪園東慶寺



池上星享墓



大森沙干狩



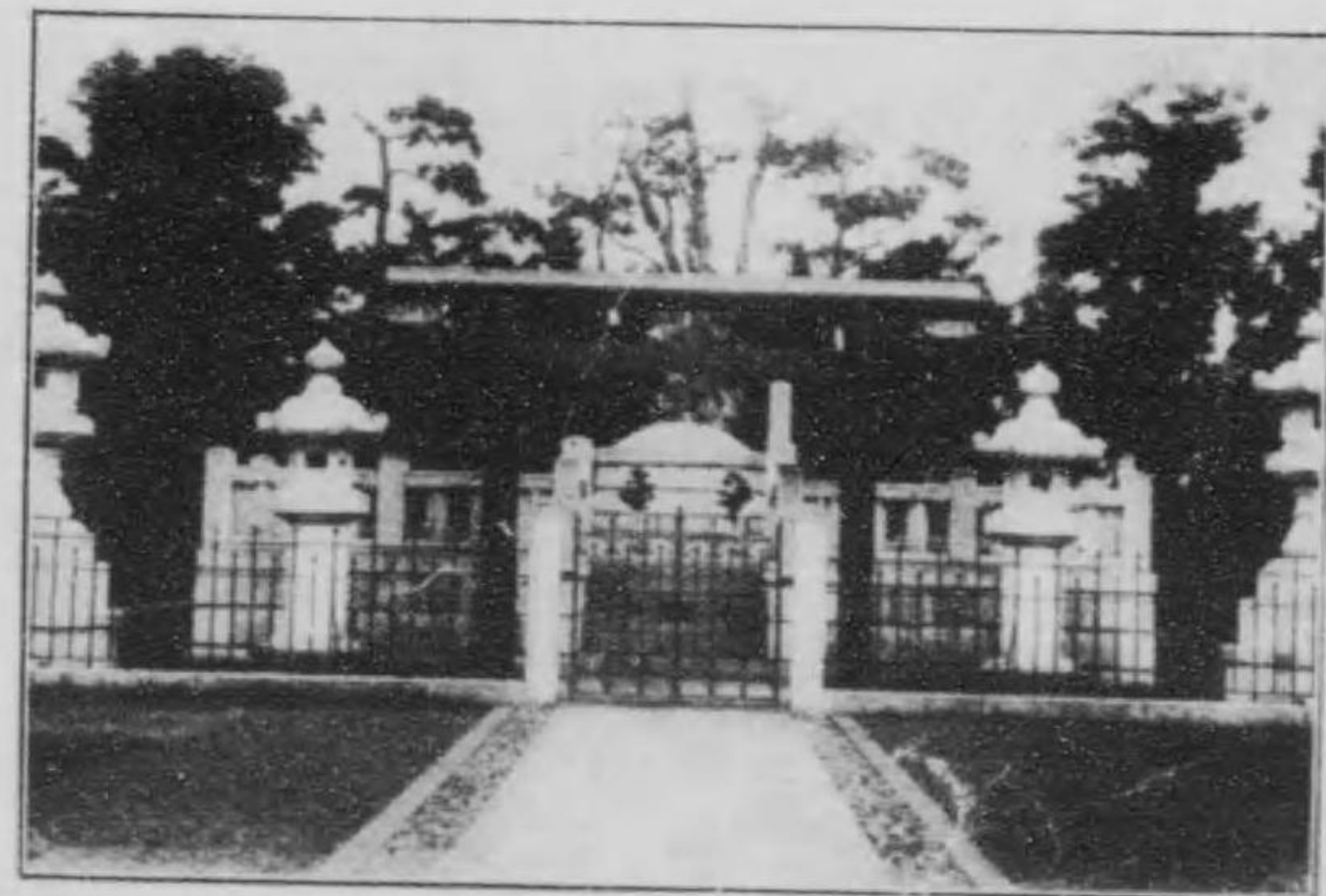
霞ヶ浦



修善寺の夜泣松



三溪園横宙庵



谷垂伊藤公墳墓



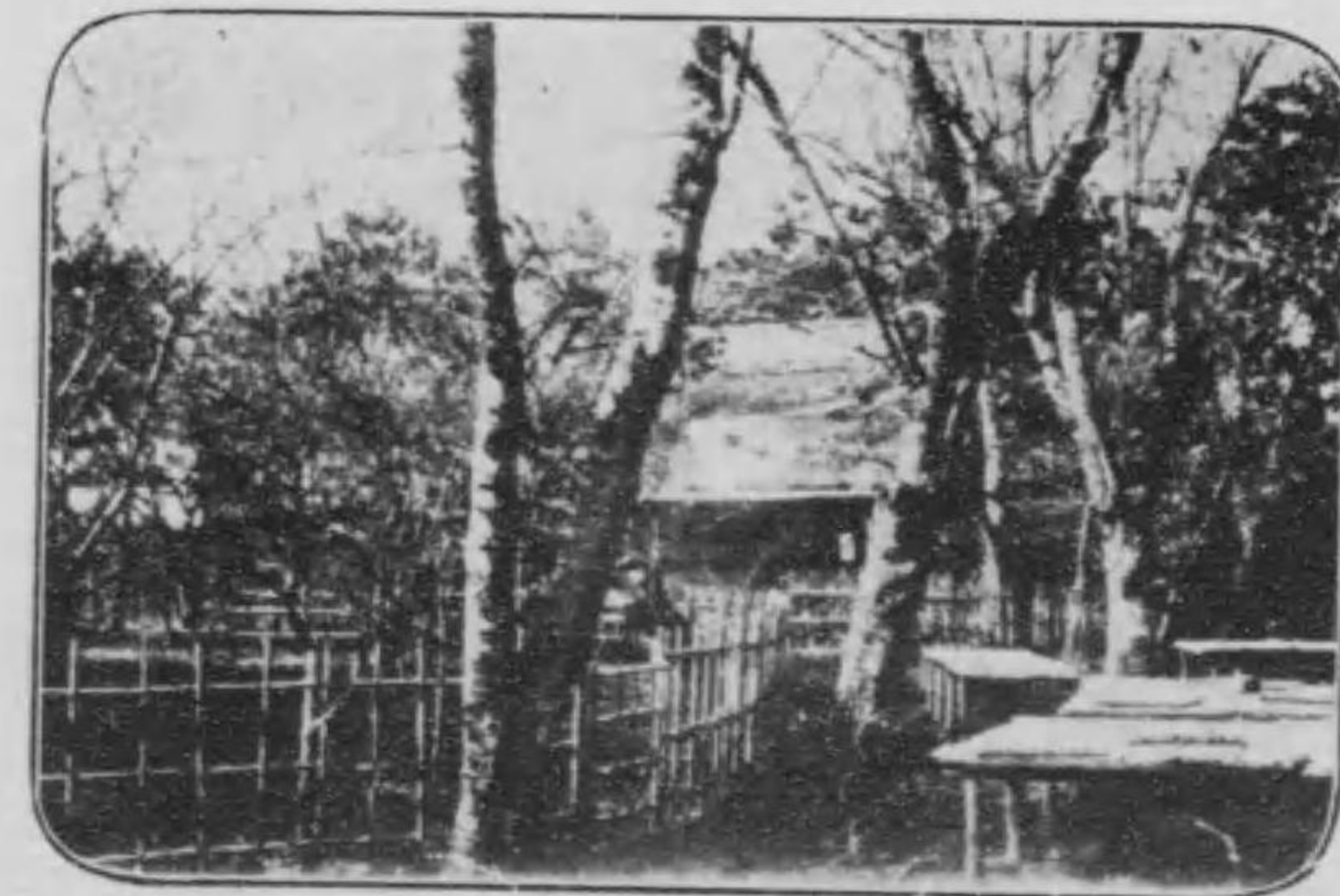
松の打籠光家川徳黒目



池の洗足上池



園梅海熱



梅の園景八



日光明門



日光華嚴瀧

郊外 探勝 その日帰り目次

- 【も、のはな】市川……………一
真間の弘法寺、手古奈の詞、國府臺、法華寺
- 【おまゐり】成田……………五
歸へりば宗吾様、おみやげは梅びしほ
- 【うめ】杉田……………八
屏風が浦、横濱見物、金澤八景、妙法寺の珠麗梅
- 【海水浴】一の宮と大原……………二
房總の海岸、一の宮、觀音岬
- 【おまゐり】川崎……………四
穴守稻荷、扇ヶ浦の運動場、森ヶ崎鐵泉
- 【ゆさん】江之島と鎌倉……………二八
藤澤の遊行寺、小栗判官の古跡、龍口寺

目次

(増訂大正三年版)

- 【もみぢ】御嶽……………二五
袈裟掛の松
新月が瀨の吉野村、日原の鐘乳洞、綾尾の瀧、七代の瀧
- 【海水浴】稻毛……………二七
秋は茸狩、甘藷先生の墓、長作の夫婦梅、習志野、猪の鼻臺
- 【おまゐり】堀の内と新井……………三〇
春は摘草、秋は栗飯、子育薬師、井の頭の辨天
- 【うめ】蒲田と小向井……………三三
と原村……………三三
- 【海水浴】館山……………三四
梅屋敷、小杉村の最明寺、圓覺堂

(1)

目次

鏡ヶ浦、観音は那古と船形、鏡ヶ浦の八景、

【おまゐり】池上……………三七

近くは八景園、遠くは矢口の渡、本門寺、
星亨の墓、新田神社、

【たうぢ】成東……………三九

九十九里、浪切不動、宗吾刑場、東金の
城跡、将門山、小野の小町生地、

【ほとろ】大宮……………四二

氷川神社、櫻もよし、萩、紅葉、茸狩
もよし、温泉もあり、鹽田山、

【海水浴】大磯……………四五

鳴立澤を見て化粧坂の化粧園子を召せ、
替我兄弟の木像、西行庵、

【さくら】小金井……………四七

國分寺の古瓦、玉川の新緑、

【わかば】府中……………四九

六社様から分倍河原、大釋の若葉もよし、

【たうぢ】箱根……………五

早雲寺の寶物、玉簾の瀧、報徳神社、
小峯の梅林、高山植物、

【海水浴】銚子……………五四

霞ヶ浦、潮來出島、大漁踊、犬吠岬、
川口明神、

【おまゐり】大雄山……………五七

二十八宿の山道、莊嚴寺獻供式、
感應の瀧、

【あゆりやう】多摩川(一、二)……………五九

日野と立川と拜島と羽村、納涼にもよし、
泳ぎにもよし、

【海水浴】大洗……………六四

眞の磯節を聞く磯濱、琴彈の瀧、
磯濱八景、平磯、

【梅】水戸……………六六

好文亭の眺望、弘道館の跡、常盤公園、

【もみぢ】高尾山……………六九

琵琶の瀧、蛇ヶ瀧、歸り途は八王子見物、
八王子城跡、

【海水浴】新子安……………七三

碧血の碑、浦島寺、總持寺、

【もみぢ】瀧の川……………七五

花は飛鳥山、王子神社、王子の稻荷、
道灌山、

【七福神詣】向島……………七六

東京中で七福神詣が四通り出来る

【おまゐり】雨降山……………八二

日本武尊と親鸞上人の古跡

【おまゐり】六阿彌陀……………八四

後生願ひの年寄に負けずてくくと
やつて見給へ

【さくら】熊谷堤……………八九

熊谷寺と薩摩守忠度の古跡、馬頭観音、
忠度櫻、

【海水浴】茅ヶ崎……………九二

海傳ひに平塚あり、鶴沼あり、

【おまゐり】鬼子母神……………九三

山吹の里と穴八幡も一つ高田の馬場、

【つじ】大久保……………九五

角筈の十二社、柏木の華州園と
ダリヤの名園、

【海水浴】葉山……………九七

小坪の古戦場、六代御前の墓ある櫻、
三浦導の墓、大楠山、

【ふぢ】粕壁……………九九

一房五尺もあり一株五十坪に餘る藤の花、
桃もまたよし、

【つじ】館林……………一〇一

文福茶釜の尻尾を見て雷嫌ひな人は

目次

雷電神社、館林城、初茸狩にもよし、
 【ふぢ】……龜井戸……………一〇四
 柳島の蘭玉と萩寺のはぎ
 【おまゐり】……目黒……………一〇六
 權八小紫の比翼塚、甘藷先生の墓、
 大鳥神社、祐天寺、奥澤の九品佛、
 【もみぢ】……海晏寺……………一〇九
 谷垂の伊藤公の墓、思賜館、東海寺に
 澤庵の押石、
 【おまゐり】……泉岳寺……………一一一
 師直首洗の井戸、義士の遺物、
 【ゆさん】……金澤……………一二三
 金澤文庫の跡あり、泥龜に有名な
 牡丹あり、筆捨山、安針の墓、
 【おまゐり】……喜多院……………一二五
 道灌の城跡と三芳野神社、飛行機の
 飛び廻る所澤、

【おまゐり】……東京の八十八
 ケ所……………一二七
 東京の市郡に亘る名所と靈地、
 【おまゐり】……布施と子の神……………一三三
 手賀沼、子神薬師、布施の辨財天、
 櫻山、
 【遠足】……飯能……………一三四
 能仁寺の十六羅漢、子の権現の深山幽谷、
 龍ヶ谷瀧、
 【ゑんそく】……荒幡……………一三六
 狭山の茶園と人造富士、元弘戦死碑、
 山口の観音、
 【おまゐり】……小岩不動……………一三八
 星下り松と影向松、琴彈の松、
 【すゞみ】……桐ヶ谷の瀧……………一三〇
 大圓寺の五百羅漢、安樂寺の連理の塚、
 氷川神社、

【しやうぶ】……堀切……………一三三
 隅田川の青葉、綾瀬の風景、
 【すゞみ】……等々力の瀧……………一三三
 玉川の鮎を漁し、細井廣澤の墓、
 【おまゐり】……西新井大師……………一三五
 春は梅櫻、秋は紅葉、
 【あゆがり】……思川と鬼怒川……………一三七
 日光諸山を望み風景畫の如し、
 【すゞみ】……清水の瀧……………一三九
 手長海老や鮎が歸りのお土産、
 【すゞみ】……王子の七瀧……………一四〇
 正に此れ理想的鎖夏の小天地、瀧の
 数が十ある、
 【も】……古河……………一四三
 熊澤蕃山の墓に詣で静御前の跡を弔
 ふべし、
 【うめ】……吉野……………一四五

山ありて高く、水ありて清く、風に
 新月ヶ瀧の稱あり、
 【うめ】……江東の梅……………一四七
 龜井戸から始まつて百花園で終る、
 【さくら】……三里塚……………一五〇
 陛下の牧場たる三里塚の櫻は關東
 第一なり、
 【おまゐり】……浦安辨財天……………一五二
 夏は海水浴に適し行徳へ廻つて行々千
 を聞くもよい、
 【うめ】……久地と用賀と
 下作延……………一五四
 玉川の春の遊び真に一幅の畫也
 【うめ】……津久根……………一五五
 荒川上流に浴ふて新月ヶ瀧の稱あり、
 仙波沼、
 【海水浴】……助川と河原子……………一五七

目次

泉が森、第二の大磯、
 【遠 足】……百穴……………一五九
 吾々の先祖の住んで居た穴を見て來給へ、
 松山城跡、
 【も みぢ】…碓氷峠……………一六二
 碓氷川の清流と霧積の温泉、輕井澤、
 【も 】…越ヶ谷……………一六四
 れんげは田に一杯、松に鳩がないて居る、
 松伏の仙郷、久伊豆神社、
 【遊 園 地】…安行……………一六六
 苗木接木にいろ／＼の花、
 【も 】…野田……………一六六
 醬油で名高い龜甲萬や木白なども
 みられる、野田公園、
 【おまゐり】…太田呑瀧……………一六九
 義重山新田寺、秋色を探り茸狩もよし、
 金山城跡、

【おまゐり】…柴又……………一七二
 江戸川の白帆と川甚の川魚料理、
 【つ みくさ】…大和根川……………一七三
 ヒクニツタの最好適地、
 【ゑんそく】…筑波山……………一七四
 山に登つて大に浩然の氣を養ふ、泉觀音、
 辨慶七辰り、
 【さ くら】…荒川堤……………一七七
 五色櫻と櫻草、摘草にもよし、
 【つ き み】…百草園……………一七八
 高幡の不動に詣て大國魂神社に詣ず、
 【さんけい】…松蔭神社……………一八二
 豪徳寺へ廻つて忠臣遠城謙道の墓
 に詣ずる、
 【遠 足】…深大寺……………一八五
 吾々先祖の用ゐた武器や日用道具を
 探し給へ、

【櫻 草】…浮間が原……………一八七
 戸田の原から横曾根原かけて一面の
 櫻草、

【さん ぼ】…雜司ヶ谷……………一八九
 秋は紅葉の色もよく、冬は木枯もまた
 妙也、

【あゆりやう】…荒川……………一九二
 一名を秩父赤壁と稱せる長瀨の絶景
 と象が鼻の奇勝、紅葉の名所、

【海 水 浴】…三崎……………一九三
 七里ヶ濱のヘルリ記念碑、城が島、
 櫻の御所、海月の名所、

【おまゐり】…香取神宮……………一九五
 伊能忠敬先生の測量機、潮來十六島の
 菜の花、

【あゆりやう】…相摸川……………一九七
 水清くして景致特によく尺大の香魚

目次

【あゆりやう】…入間川……………一九九
 を漁する事を得、
 秩父連山は手に取る如し、歸りに所澤
 の飛行機見物、

【き く】…川和の菊……………二〇〇
 小机城跡と小峰、平木の梅園、

【た う ぢ】…藪塚鑛泉……………二〇二
 安い所天下無比、秋は紅葉の足尾線、

【す ず み】…矢口の渡……………二〇三
 點をとるべし、和泉公園の風光、
 御譽の松、

【あゆりやう】…與瀨……………二〇四
 湘南の赤壁を賞し、勝頼の跡を吊ふ、

【遠 足】…富士登山……………二〇五
 夏は登山秋は裾野の花、
 【温 泉】…修善寺……………二〇六
 海近くして鮮魚多く山近くして時鳥

目次

多し、

【ゆざん】……松島……………三三
夏は涼みに、秋は月、冬は松の雪景色、

【スケート】……諏訪湖……………三六
温泉に這入つて日本アルプスの壯觀
を見る、

【もみぢ】……日光……………二八
日光を主として見るもよく紅葉を見
るなら中禪寺、

【ゆざん】……猿橋……………三三
大月を下りて裾野の秋草を賞するもよい、

【ゑんそく】……上州三古碑……………三三
金井澤碑、山上碑、多湖碑、

【海水浴】……千本松原……………三六
御用邸の静浦へは一里、土肥温泉へ
は汽船で二時間、

【たうぢ】……伊香保……………三〇
浪子の厥狩せる地蔵何原、棒名湖の
風色、

【たんけん】……浅間登山……………三三
東京から一番近い活火山、

【もみぢ】……妙義山……………三三
満山紅葉すれば赤鬼の酒に酔ふて火
を吐くが如し、

【温泉】……熱海と伊東……………三五
梅よし、海水浴よし、

【ゆざん】……横濱三溪園……………三八
春は梅、櫻、夏は海水浴、秋は萩の花、
蟲の聲、

郊外その日帰り目次終

郊外探勝

その日帰り

増訂大正三年版

落合浪雄著

もゝのはな

市川

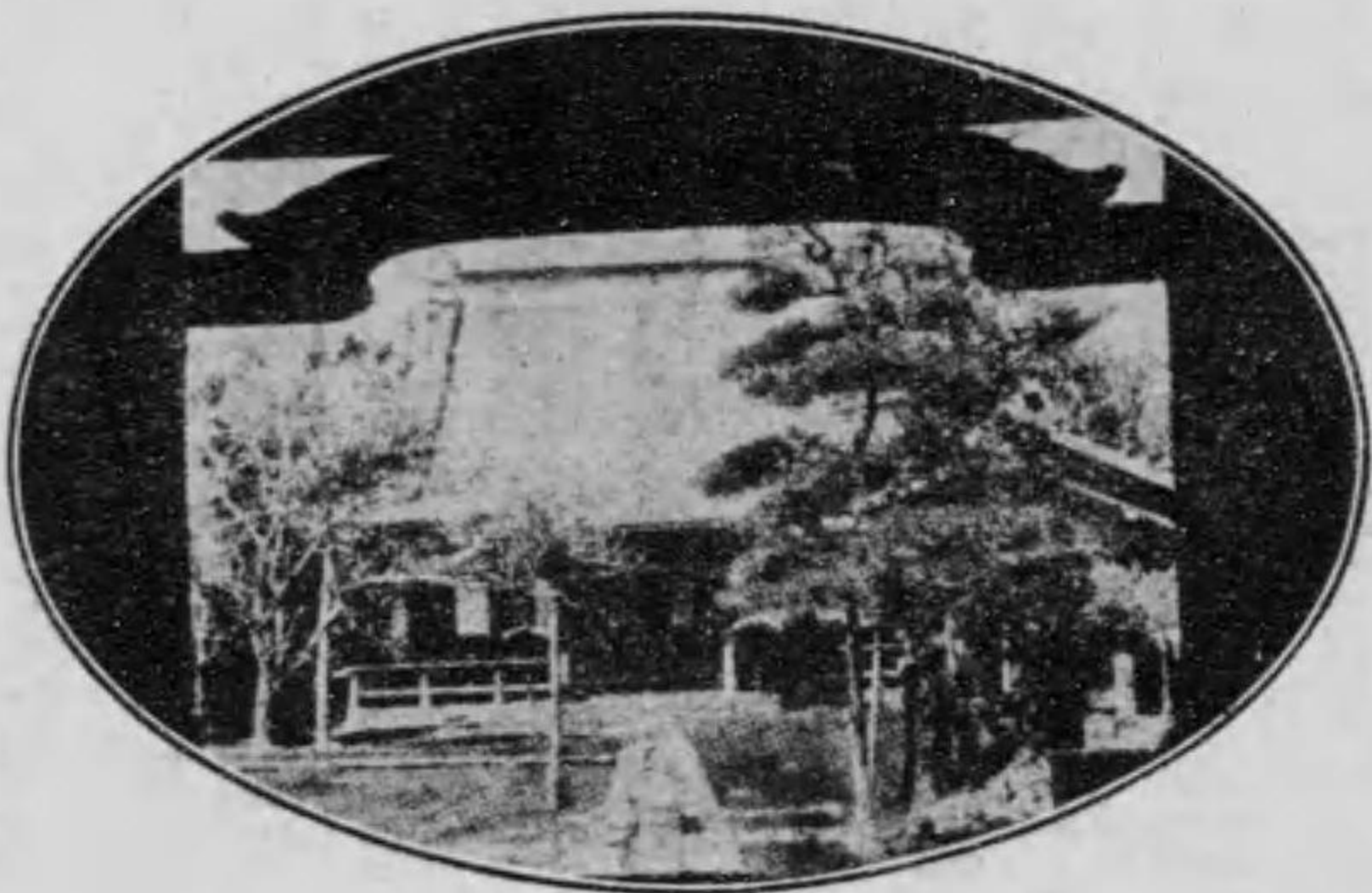
(真間の弘法寺、手古奈の祠、さては國府の臺へも廻られる)

桃の花は鄙びなりなど言ふ勿れさ、梅はやんごとなき際の令嬢品高き装ひ、櫻は黒人の狭な姿形と見れば、是は名も無き町娘の優しき處あどけない處が命なる可し、市川まで兩國停車場から僅に七哩、時間は三十分(賃金三等十三錢二等二十錢)然し近頃開通した京成電鐵で行けば押上から市川まで賃金十三錢時間は二十分

市川を右へ折れると其處邊中に桃の花畑、入口に紙の小旗、裂の大旗で客ひき

もゝのはな

の看板、すつと這入と盤蛇たる桃の枝縦横に延びて緋桃白桃の花盛り、花の中に亭もあり、へゞれけで歸りを船橋の八兵衛が許へと怪しからぬ義を結ぶ若い人あれば、莫蓆一枚に一家團樂で玉子に海苔巻のたのしそうな子供連、桃の下枝ぬけつ潜りつ鬼ごっこをする娘さん、雑沓のなかに桃の趣味はあるものとして桃の砂糖漬おみやげにぶらりと北へ真間の弘法寺へ志す、麥畑杉の林まで處々にある桃林を名残に弘法寺の大通りへ出ると晴れくした野の草色、雲雀も定めし鳴いてるのであらう、陽炎も立つ美しい色彩の蝙蝠傘が春の日に照らされてそゞろ浮き立つ足で、七八町は雑作もなく弘法寺の石段の下まで、右手に見える祠が即ち手古奈の祠のそばの小流が昔は大きい川であつて、川中へ柱を立て兩方から板を渡して行き交をしたので、真間の繼橋と云ふ、繼橋と云ふ名は萬葉集にもある、下つて慈圓の歌にも『葛飾や昔の真間の繼橋をわすれず渡る春霞かな』とあり、祠のある邊りは其當時の真間の後であつて、手古奈が二人の男に戀はれて彼方立てれば此方が立たぬ、思ひ餘つた最後を遂げし處なりと傳へてある、石段を登り盡せば弘法寺日



市川弘法寺

蓮宗のお寺で正面は釋迦堂、仁王門、仁王運慶の作といふ、振り返へると今來た途

は眼下、汗ばむだ肌

に風すやくと途水茶屋に腰を卸して澁茶に葛餅、麥畑の青いのところく

の桃林、東京では見られぬのんびりした好い眺めである。

弘法寺を裏へ抜けると砲兵旅團の兵營、營舎に沿ふて北西へ半道ばかりで總寧寺の境内へ出る境内はそう廣くはないが梅の頃には山門の唐ふりと調和して良い、境内を通り抜けると國府臺今はそこら一面を切り開いて里見公園と云ふて居る、里見廣次の墓石もあり茶屋がけがしてあつて松潤茶を飲むにたる、下は江戸川遠くは東京の人

烟幽の間に淺草の十二階、五重の塔も見えよう、國技館も見えよう晴れてさへ居た

ら富士は固よりである、華な桃林とは打て變つたしつとりした松林の間で、ゆる々々々と食事をし臺を下つて江戸川縁へ出で、真帆片帆で上下する船を見ながら市川の町へ出る。時間の都合では國府の臺を先にして弘法寺から市川の桃、それから田舎道を中山へ出て 法華經寺へ參詣するもよし、法華經寺は日蓮上人の百日說法のあつた靈場、本堂を中に骨堂、五層堂、經藏などあつて此界限では立派な寺、中山まで行けば法華經寺から二十町の妙正ヶ池、池の主が女に化けて日蓮上人の説法を聞き上人の曼陀羅を受け妙正と法名を授けられ、其曼陀羅を池の側の樓に引懸けた儘姿を隠したと云ふ因縁のある處、停車場の前に 群芳園 と云ふ近頃出來た花園があつて四季の花が絶へず、料理も出來て園遊會などには好適地である、夫より停車場から程遠からぬ 八幡神社へ參詣するがよい有名な八幡知らずの藪は路傍にあつて此處がその跡だと書いた札が立つて居る、藪は僅に十坪ばかりの唯型を示したにしかすぎない。中山停車場から兩國まで汽車の道程九哩八鎖、時間五十分、汽車賃は三等で十七錢二等で二十六錢、

おまゐり

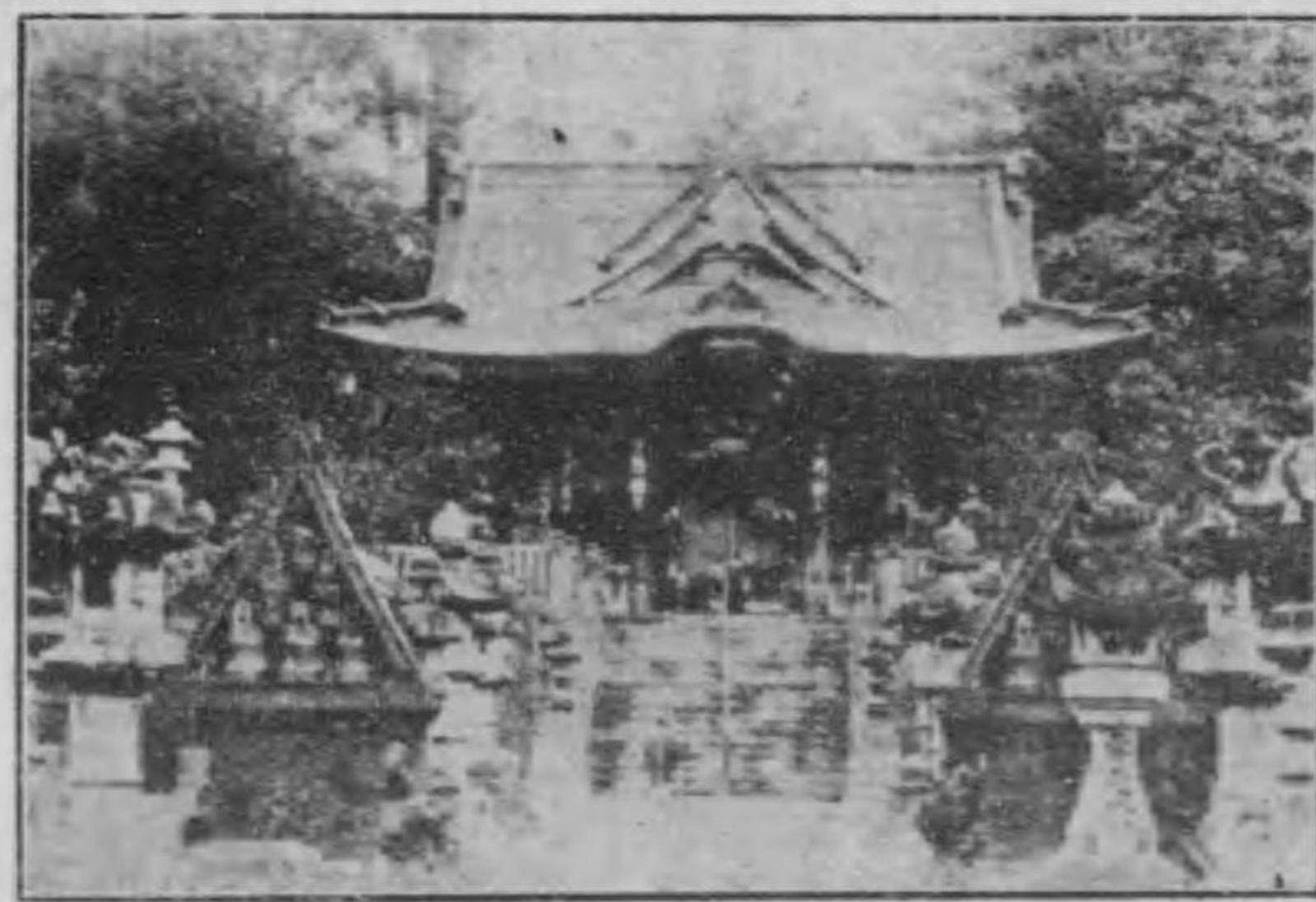
成田

(歸りは宗吾様、おみやげは梅びしほ)

成田山新勝寺

へは上野からでも、兩國橋からでも行く事が出来る、上野からは直行が四回其外は我孫子で乗換へ、哩數は四十一哩、汽車賃は三等で七十錢二等で一圓五錢、時間は二時間と十分兩國橋から行くと直行列車の外は銚子行へ乗つて行つて佐倉で乗換へ、哩數は殆ど同じ汽車賃も同じ唯時間は三十分ばかり遅くなる、成田の停車場から不動の門前まで電車片道三錢往復五錢山門を入り十四間四面の本堂は安政中の建築であつて、腰板の五百羅漢は杉本道山、扉の二十四孝圖は島村俊表、本堂裏手の十六羅漢は狩野一信の筆、一

おまゐり



成田山本堂

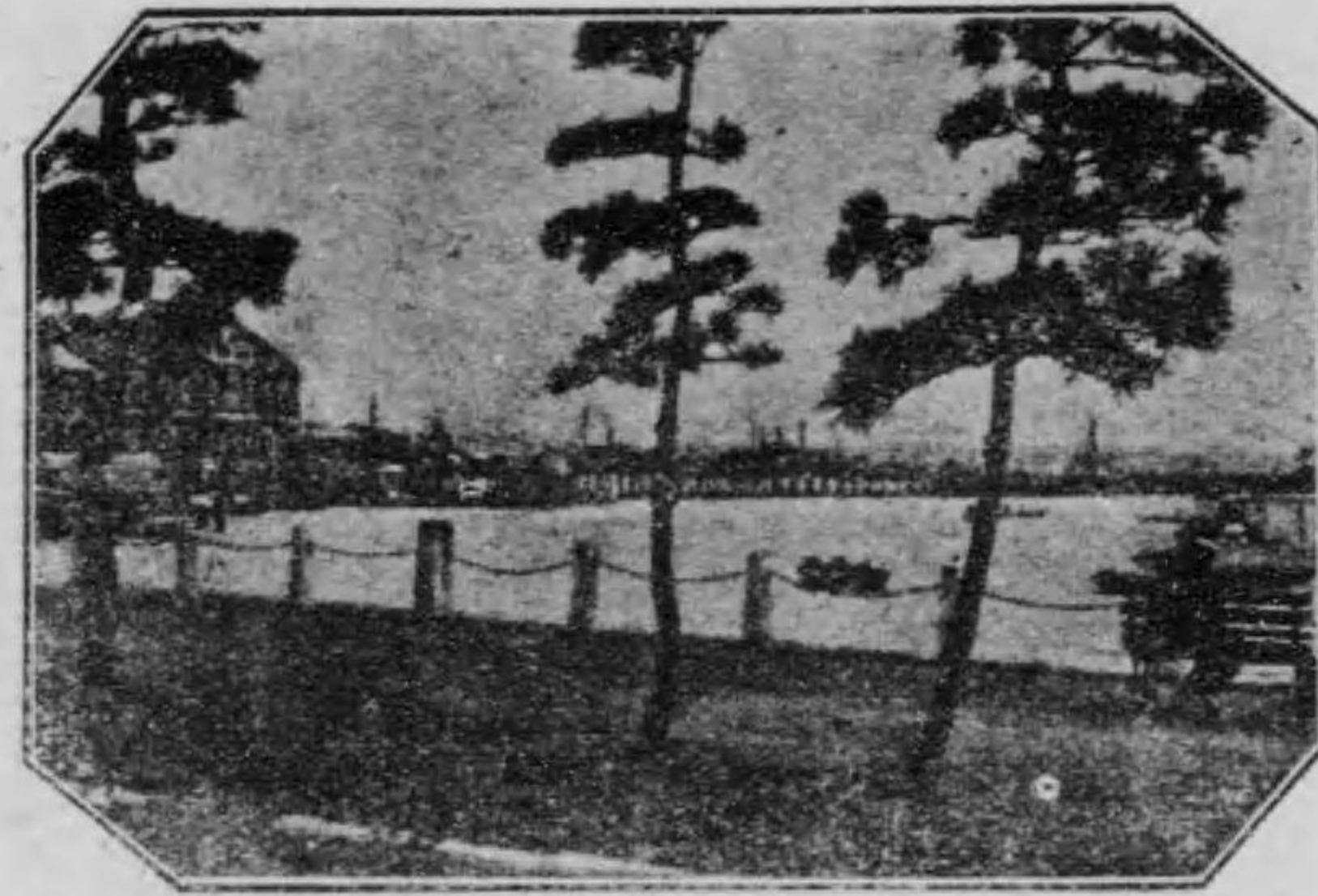
切經堂の額は白川樂翁公、光明堂は龜田鵬齋の扁額、見る可き物は非常に多い、朝日觀音堂、三重の塔、鐘樓、開山堂、護摩堂、其他を見る、寺寶は天國の寶劍を始め珍什其數を知らず、本堂たる不動明王は天竺毘首羯摩の作、弘法大師が入唐の際授けられて歸り高野山に安置してあつたが、平の將門の下總に叛を圖るや、時の高野山宣教大僧正此不動像を奉じて下總に下り朝敵降伏の祈を擧げ、將門亡びて後靈像を奉じて歸らんとしたるに、像の重量急に重くなりて動かさず、已むなく茲に伽藍を造り本堂として安置したるものである、成田の町は殆ど此新勝寺の爲めに存在するが如く、新勝寺も又成田の爲めに盡す事尠からず、幼稚園、圖書館等の設備など頗る見る可きものもある、宿屋は貞松館、若松屋、大野屋等あり、成田より佐倉への途酒々井の驛にて下車すれば木内宗吾を祀りし**宗吾靈堂**あり、途中宗吾の叔父光善が命乞ひの祈禱を凝らせし光勝寺あり、是等に參詣して優に一日に歸る事を得可し、又成宗電車の便を借れば成田山門前から宗吾まで十三錢で行ける、酒々井へ出るのが面倒なら十八錢で往復券を買ふも便利なり。

近來は特に成田山の初詣でと豆撒きは盛大を極め豆撒きの如きは死人を出す騒ぎなりその時には汽車は特別大割引をして通用三日間二等一圓六十錢三等一圓二錢菊も中々見事である。

おみやげ 梅びしほ、栗羊羹

杉田

(横濱見物と
而して金澤八景)



岸 海 濱 横

杉田の梅を見るには先づ横濱まで汽車、哩數十八哩時間は急行ならば僅に廿八分、遅くも五十二分普通賃金三等三十錢二等四十五錢、割引往復切符もあり、横濱では伊勢山の大神宮、野毛の不動、掃部山の井伊掃部頭の銅像、序に横濱居留地本牧等を見られ、ば見て杉田に向ふ、横濱停車場から西の橋まで電車(往復七錢)夫より橋を渡りて右に川沿ひて中村に出で屏風ヶ浦に達す、石川より杉田まで約二里、人力もあり、乗合船もあり、屏風ヶ浦の風光を稱しつ、行く程に大隧道を過ぐれば早杉田、白雲所々に霰き、衣袂に香あるを疑はしむる

程である、杉田

の全村海に面しに山沿ひ全村梅ならざるはなし、中にも妙法寺の珠簾梅其名最も現はれしも樹老ひて此頃は花漸く少く其名をのみ朽株に止むるに至つた、梅林を穿つて山に上れば、山上茶店料理屋軒を並べて客を待つ、床几に腰を投じて山下を眺むるに梅林を隔てて屏風ヶ浦一帶の景色文人畫の如し。

杉田から金澤へは山越して一里半餘、十三峠と名に聞えし嶮所も實は左程の道にはあらず、峠を上り切つてはつとバナラマの様に金澤の入江即ち八景のある所が眼下に展開されてから、爪先下りに降る事十餘町、洲崎の晴嵐、瀬戸の秋月、小泉の夜雨、乙艦の歸帆、稱名の晚鐘、平瀨の落雁、内川の暮雪、野島の夕照、と云つた處で實は餘りに大きい景色ではなく筆捨山の能



鐘 晚 名 稱 澤 金 州 武

見堂へ上れば八景を一目に見られる、元來明の大越禪師が支那の西湖に似て居ると云ふので八景になつたので近江の琵琶湖とは規模に於て頗る霄壤の差がある泥龜と云ふのは金澤の町の中で有名な牡丹の名所是だけでも態々見物の價値があるさうだから四五五月頃に茲を通つて鎌倉へ抜けるか、茲から朝比奈の切通しを抜けて約二里鎌倉へ行くのも好い、金澤での宿屋は吾妻屋、千代本、野島屋、一息入れて金龍院へ上れば山頂に九覽亭あり是も金澤の名所を一眸に集める事が出来る、昔しは定めしと思ふが入江が淺瀬になつて満潮の時でもなければ泥海の様な形があつて面白くない、見物す可き處は瀬戸の明神辨天社、北條實時父子の建立に成る稱名寺の境内に金澤文庫の後があると云ふ。

梅が香に腹ふくるゝや帆懸船
杉田 藝太

海水浴

一の宮と大原

(房總の海岸はまだ質樸で心安く遊べる)

房總の海岸で海水浴に好い處と云へば新大磯の名ある一の宮と大東、大原の三ヶ所であらう、此内一の宮は停車場の所在地から町を一の宮川まで出で、川を下つて海へ近き所に青松館、一の宮館等の海水浴旅館がある、川は水清く流静に鯉鮒鮠等を産し船遊び漁りによく、海は外海岸の割に浪高からず、近年舊領主たる加納子爵が河口の北岸に別荘を建てられしを始めて紳士紳商軍人學者等の別荘を建て者多く忽に新大磯の評判高くなりし處、土地の人は質樸にして旅館等も決して暴利を貪らず、平民的の避暑地としてよし、一の宮の海岸は松林を背にして平洲張りな観る可きもの妙きもの一の宮町は舊城下なれば城地、月の名所高藤山、玉前神社などある。

大東は九十九里濱の南端、犬吠ヶ岬と相對する大東岬に擁せられたる海岸にある太古彦火々出見尊が釣を垂れ給ひし處なりと傳へらるゝ、釣崎、同じ處に波濤の反

海水浴

響絶えず聞ゆる、音信山、一に鳴山といふもあり、海岸處々に筆草を産し、魚類は

思ふ儘に食べ飽きが出来来る可し

大原

海水浴場は停車場より七町餘小濱海岸に



大原觀音岬

四時間、大東へは四時間と少し、

あり小濱海岸は天正年間鎌田某の城地にして八幡宮を安置し海上岩島雀島の絶景あり、奇岩浪に嚙まれて風景佳絶の處に旅館帆萬千館翠松館大原館あり房總線は此大原を以て終點とし御宿、勝浦の方面には茲より馬車通ず、總じて此邊人氣まだまだよろしく宿賃など安し、東海道海岸の如く贅澤の競争をする必要もなく心安く鮮魚を味ひ海風の涼を買はんとする人には最恰好なるべし、兩國橋一番の汽車にて千葉にて乗換、一の宮へは大原へ五時間で到着、暑中には一の宮大原行割引

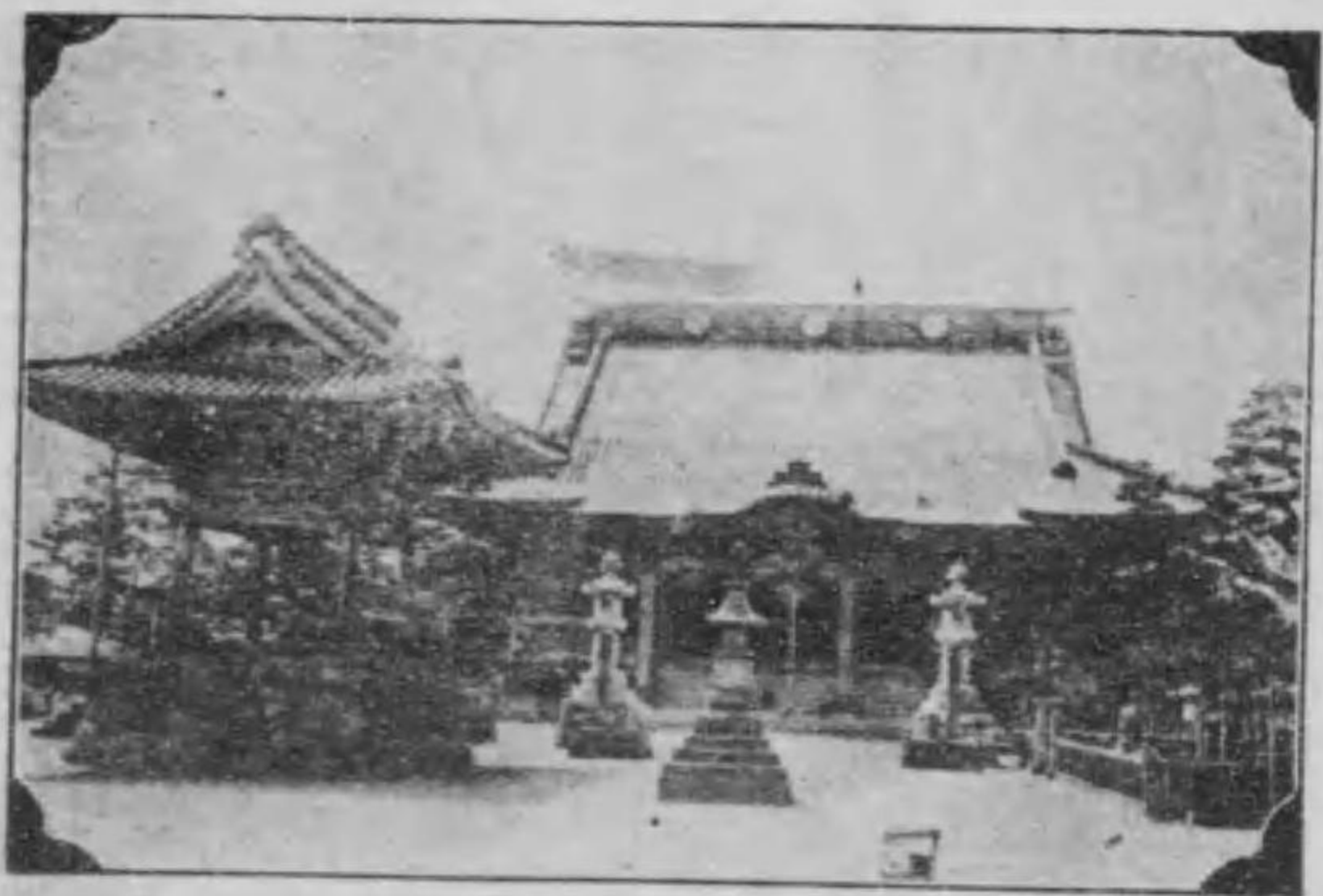
往復券を發賣もするしかつ酷暑の頃には特別にその日歸りの一の宮大原行の回遊車が出て且非常な大割引をする。

おまゐり

川崎

(穴守へ廻るか歸りは大森かそれとも森ヶ崎か)

川崎の大師は京濱間で最も多くの信者を持つて居る名刹である、大治年間此地の平間某といふ人が海中から弘法大師の像を網にかけて拾ひ取り是を安置する小堂を作つたのが始まりで、今の如き大伽藍となつたのである、川崎の大師へは汽車でも行ける、電車でも行ける、汽車は新橋から十哩時間三十分、賃金は三等が十七銭二等が廿六銭電車ならば品川まで市内の電車に乗り、八ッ山から京濱電車に乗つて大師まで僅に十三銭、汽車だと川崎の停車場から人力に乗るか又電車に乗り必要があるが、電車の方は川崎で乗り換へるだけ、



川崎大師の本堂



羽田穴守大鳥居

すつと大師堂の裏手まで乗つて行かれる、大師堂のあるのは川崎停車場から廿七町、町へ出て左りへ六郷の川端を傳ふて西へ行くので此の途中兩側に櫻樹數百、花時にはまるで櫻のトネルに化する、夫かあらぬか大師の日毎月二十一日のうち正五九を重とし更に五月には花見旁々參詣者が非常に多い、花の盡くる處が電車の停車場其よりは茶店、小料理屋、目なし達摩、麥稈細工などの店が軒並で納め手拭掛け暖廉赤まへだれが出で招くといふ有様、俗臭紛々たるものである。川崎の大師様を知らぬ物はないが、其寺號山號を知つて居る物は尠からう、金剛山平間寺と云ふ六ヶ敷い名前、山門を這入ると右は庫裏突當りが十間四間の本堂、左には大日堂があり、南側數千坪の處に池もあり、築山もあり、梅櫻

四季折々の花が参詣客を樂ましめる公園となつて居る。

茲から穴守へは六郷の川一つ、電車終點の少し手前に穴守ゆき渡船の札を知るべにて右へ曲り川椽へ出たらば直ぐ向ふ岸への渡し船を見付けるであらう、大師は神奈川縣、穴守は東京府境をなして居る六郷川の川下も渡るに何の危険もない、向ふ岸へ上つたら田圃道を凡そ五六町穴守様の赤い鳥居が數十百千萬と數へる程にあるを見る、神殿で御利益を願ひ、裏手の所謂お穴へ行くと、石を積み上げセメントで固めて、其石に誰々獻納と一々事面倒に記した其籠が山窟になつて茲に又御供物が累累としてある穴守様の御利益はあらたかなものであらうが、信心する人は難有いのでか、名聞にかと疑はれる程、俗臭の劇しさは大師以上であらう。穴守稻荷の裏に扇ヶ浦の海水浴場と運動場がある、海水浴場は報知新聞社の公開するもので、海の展望殊によく房總の山々果ては相模の山々も見えて都下有數の海水浴場である、その季節になると餘興があつて毎日、面白い。扇ヶ浦の運動場は 羽田グラウンド と云ふて京濱電車の經營で五萬坪もある、都

下には程理想的な運動場はまたとあるまい、ベースボール、テニスコートその他機械體操具一として具はらざるはない、運動會場として園遊會場としての好適地である。殊に野球界の覇なる早慶明諸大學がよく此處で競技をする、尙穴守には鑛泉の湧き出る處があつて羽田館と云ふ立派な宿がある、其外に幾軒も料理兼宿屋がある、此邊で晩飯を認めて歸るか、大森は海岸の松淺、伊勢源へ寄るかさらすは穴守様の歸りだけあつて用心に用心を重ねて犬の川端で歸宅後食事と云ふものも洒落たものであらう、穴守から電車で川崎まで十錢。大森の海岸からは四錢。穴守から大森へ行く途中の海岸に 森が崎鑛泉 がある、四季の眺めのよいのと低廉親切なので有名である、旅館の萬人舎、養生館、光遊館、盛平館、森濱館、三好館、若松館等が其の重なるものである。森ヶ崎へのみ直接に行きたい人は京濱電車を山谷で下りて十三四町人力車賃金二十錢、又穴守の稻荷橋から早船もある。

おみやげ 麥藁細工 具細工 あさり 天津桃

ゆ さ ん

江の島 鎌倉

(藤澤の遊行寺へ)
急げばまわれる

江の島鎌倉は東京から日歸りでの小旅行には最も適當した處で、江の島から廻はつて鎌倉へ行くとも、鎌倉を先にして江の島を歸り道にするとも自由自在、江の島を先にすれば藤澤まで汽車に乗り、茲に下車して、人力車を備ひ小栗判官の照手姫古蹟を尋ねる可し、

遊行寺 までは藤澤の町を通つて約十町、本名は藤澤山清淨光寺、境内には判官を祀れる小栗堂、判官の愛馬鬼鹿毛の轡、照手姫の鏡などがある。新橋から藤澤までは哩數三十、時間一時間と四十分、賃金は三等五十一錢二等七十七錢、鎌倉へ行くのは大船にて乗換へ、哩



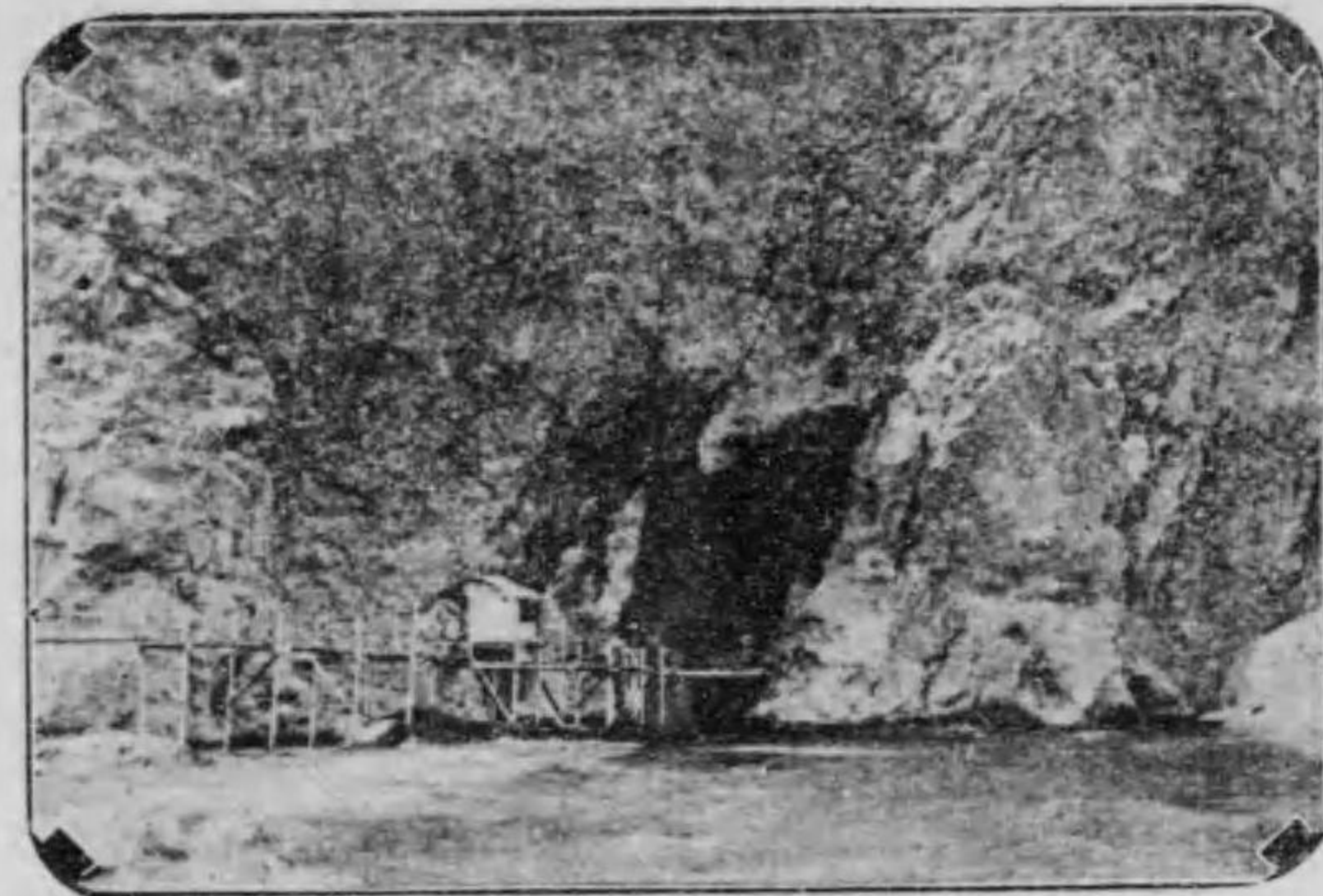
宮 齋 八 岡 ケ 鶴

數三十哩、賃金は同額、時間は少し餘計に掛る。藤澤から江の島へは電車あり、人力もあり片瀬川を下る乗合船もある、が矢張電車が好からう、

江の島

へ行くには片瀬迄の切符片道八錢、片瀬で下車したらば一寸龍の口、寂光山龍口寺へ參詣す可し、茲は日蓮上人御難の地で信心家は見逃しは出來ぬ處、其より電車の踏切を通つて砂山一つ越へれば目の覺める様な江の島の景色、江の島は今更でもなければ竹生島、嚴島と合せて日本三辨天の一つ、棧橋を渡つて島に着く、兩側は宿屋貝細工屋で通り切れない程、宿屋には惠壽比屋、境屋、岩本樓、讚岐屋、江戸屋、北村屋、などあり、坂を上つて左へ更に一二町行くと金龜樓と云ふのもある、何れかを選びて食事をするなり休息をするなり、偕て御參詣となると江の島神社は三つに分れて邊津の宮、中津の宮、奥津の宮となつて居る、奥津の宮を過ぎると、建長寺の兒白菊が身を投げたと云ふ兒が淵、名物螺の壺焼を味ひながら沖を見る景色は大森から品川沖を見た様なものぢやない、巖を切り崩しては足場を作り鐵の鎖を手摺として危き道を左りへくと廻る事約一町、鮑取らしてお呉

れなど、水潜りの漁夫が赤銅色の體をして取り圍んで來るのに、試みに十錢を投



江の島辨財天岩窟

ら先へ突き抜けると富士の人穴まで行かれると案内者の言葉、段々穴が小さくなる

から到底も歩いては行かれぬとは洒落にもならぬ話、歸りには繪葉書具細工のお土産を調べ、再び電車に乗るか、七里ヶ濱の長汀曲浦をぶらり／＼と歩くか、いづれにしても草臥れたら電車に乗る事にして、途中見る可きものは腰越の満腹寺、義經が京都から引返へして來たが、兄頼朝が逢つて呉れないので辨慶に腰越狀を書かせて引返へした處、それから日蓮上人龍の口御難の時鎌倉より赦免の使者と刀の折れた奇瑞を知らせの使者とが行合つた行合川、新田義貞が鎌倉攻めの時黄金造りの太刀を投げて干潮を祈つた稻村ヶ崎、日蓮上人の袈裟掛の松を見ると、やがて極樂寺の切通しへ出る、茲からもう鎌倉第一に長谷の觀音、切通しを下りると星月夜の井戸がある。覗いて見たれば晝でも星の見へる、左様かと井戸側へ掴まつて一生懸命に見ると何だか瀬戸物の皿の様なものが見へるが是が星かも知れない。觀音は佛工春日の作で二丈六尺十一面、カンテラを紐に縛つて引上げると同時に端嚴微妙の御相を拜して外へ出ると、由井ヶ濱の打寄する浪磯馴れの松中々に好い景色である。一つ鎌倉権五郎の社に賽し権五郎の手玉石袂石是かと怪しんではいけない、證據

に指のあとが付いて居る、が容易に手玉にはなりそうもない、けれども社前の力餅を澤山に喰べれば持てる筈だと餅屋の親爺の言葉観音の前を戻つて大佛へ参詣、奈良の次ぎの大大佛だ、高さは三丈五尺、膝の周圍が五間半、腹の中に観音六體阿彌陀三體が入れてあるのでも大きいものと知れよう。

大佛を見たらは大急ぎにて由井ヶ濱へ出で鎌倉宮へ参詣す可し、鎌倉の宮は護良親王の靈を祀つた處で、本殿の脊には親王が尊氏の爲めに押籠められ、最後に淵邊伊賀守の手に御命を喪はれた土の牽がある、神官に頼めば牢の入口を開けて中を覗かせて呉れる、ぞつと土臭い風が身に染みて、今でも親王の賊徒を怨む御心が残つて居る様に思はれる、夫から荏柄の天神、頼朝の



佛 大 倉 鎌

墓、大江廣元島津忠元の墓などを見る、頼朝の墓は鎌倉幕府を開いた人とも見えぬ程、質素な丈は僅に五尺ばかりの五輪堂、苔蒸し草茂く英雄畢竟生きてる内の感がある、夫して墓から下に見る田圃は昔源家三代の邸宅が美々しく建て連ねられて居た跡だと云へば尙更の事、茲より僅三四町鎌倉の八幡宮に着く、蓮池を圍はつて鳥居を潜れば第一番に朱塗の拜殿、是は静が法樂の舞を演じ賤やくの歌を詠じた處夫から石段に掛つて直ぐ左手の大銀杏が、公曉が實朝を打たんとして隠れた處、石段を上り切れば樓門、拜殿、左右の廻廊には寶物あり、樓門の前に立つて眺めると正面の大道は並木の古松遙に海まで續いて其先には由井ヶ濱の白浪、此外に淨明寺、光觸寺、光明寺、建長寺、延覺寺、といづれも名利だから見物して廻はつては鎌倉だけでも一日では足らず、青戸藤綱の錢を落した滑川、藤原の俊基朝臣が斬られた葛原岡神社、景清の土牢のある化粧坂等は又ゆるゆるの時に譲る可し、八幡社から鎌倉停車場へは僅に七町ばかり。

おみやげ 片瀬饅頭(片瀬) 貝細工いろく、酢貝 蠟燭の壺焼(江ノ島) 鎌倉焼、

瓦餅煎、女夫饅頭、埋木及貝細工(鎌倉) 権五郎餅(長谷)

江の島

波すゞし江の島うかぶ青壘

江の島へ女の旅や春の海

鎌倉

目に青葉山郭公はつ松魚

その昔鎌倉の海や鮫やなき

鶴が岡八幡

銀杏とぼどちらが古き梅の花

建長寺

陽炎となるやへり行く古柱

大佛

大佛のうつらくと春日かな

星月夜の井

鎌倉は井あり梅あり星月夜

也 有

子 規

素 堂

燕 村

子 規

同

同

同

同

同

同

も み ぢ

御 嶽

(新月ヶ瀬の吉野村日原の鐘 乳洞にも並からは遠くなし)

飯田町を甲武線の汽車に乗り立川驛で乗り換へて日向和田まで行く、哩数は約三十
 四哩、三等の賃金六十一錢二等九十三錢、飯田町を朝の一番で出れば日向和田へ二
 時間半で着く、茲より多摩川に沿ふて甲府街道を二里、萬年橋と云ふ處で街道を放
 れ橋を過ぎ拂子澤を経て、御嶽へ上る、麓から頂上まで坂路三十町、絶頂に御嶽
 神社あり、崇神天皇七年に大貴已命、少彥名命を祀つたもので海拔三千八百尺、
 盛夏も秋の如き氣候本社拜殿の壯麗を見、襖の瀧、七代の瀧、綾尾の瀑に心身を清
 めおほと岩、圓山、日の出岩、那具雄峰等の奇勝を見る可し、歸路は新道を取り此
 頃新月ヶ瀬の稱ある吉野村(吉野は別項に詳記してある)駒木野にて多摩川を渡り青
 梅町に入る此間御嶽より三里、多摩川の沿岸繪の如きを賞しつつ、流れを下るは燃ゆ
 るが如き満山の紅葉と、白絹を晒すが如き清流と對照の妙亦面白からう、御嶽の山
 中には祠前に御師の家十數軒あり、頼めば食膳を供し又夜泊させて貰ふ位の事は出

来る、日向和田より甲府街道を多摩川を溯つて氷川村と云ふに至り多摩川の本流
日原川に沿ふて山間に入り日原村の鐘乳洞を尋ねるも亦有益なる旅行であらう、此
の邊一帶奇山怪石なしと雖も水清くして氣すみ俗塵を十分に洗ふに足る日向和田よ
り日原まで十八里氷川まで約半分道は人力車あり。

御嶽から五日市へ下つて行く道は夏は暑熱酷しけれども秋は秋草咲き亂れ蟲聲唧々
節面白く行程また可なり、氷川村から丹波山を越へて甲斐鹽山に行くは多摩川水源
地の探勝だけあつて兩三日を費やすに足る。

おみやげ 梅びしほ、梅羊羹。

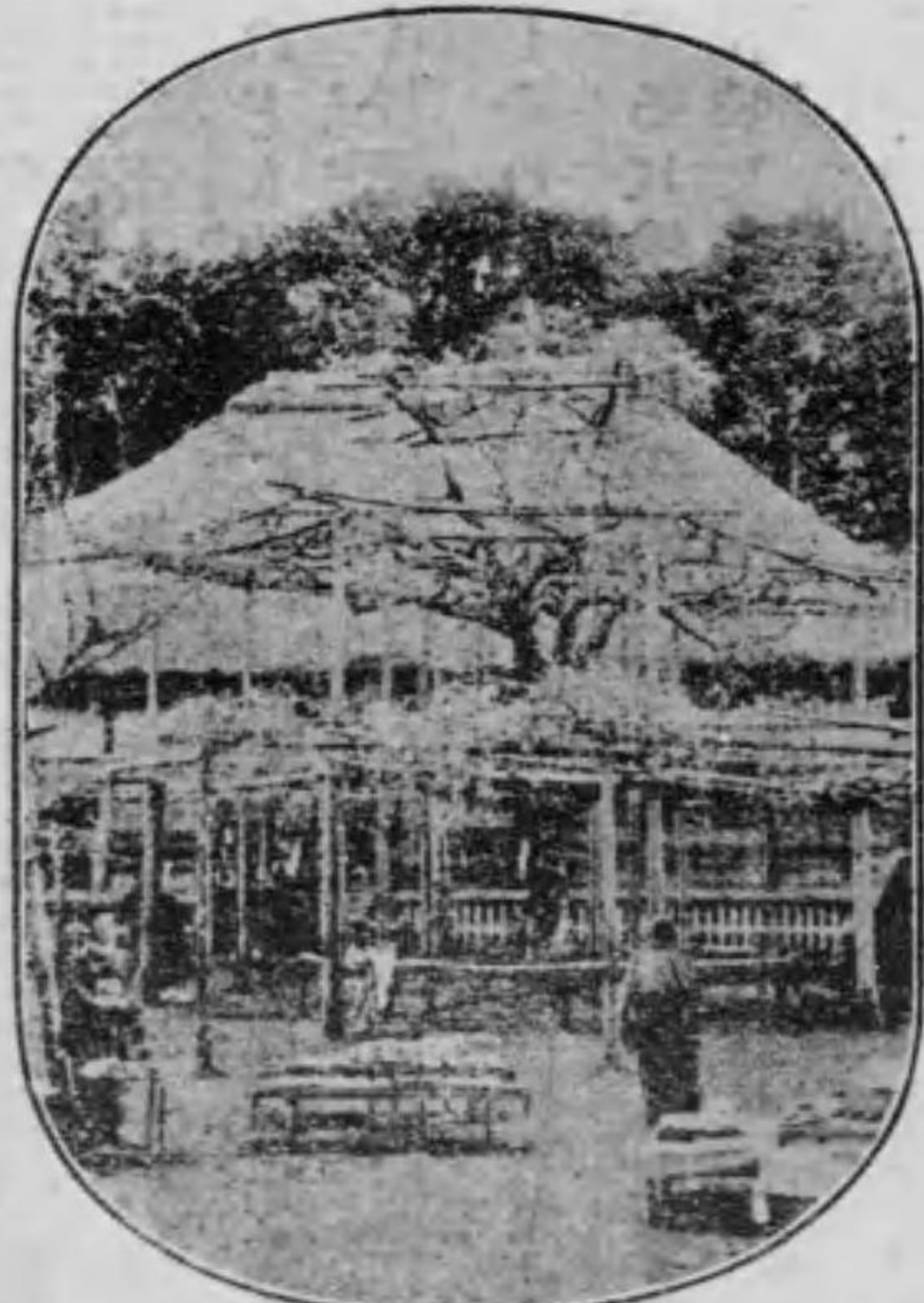
かいするよく

稲毛

(秋は茸狩、暮張に甘藷先生の墓
春は長作夫婦の梅を訪ふべし)

稲毛

は海水浴場としてばかりでなく夏は涼しく冬は暖で日歸りで遊に行く處と
しては非常に好い、汽車は兩國橋か
ら稲毛驛まで二十哩時間は一時間半
賃金三等三十四錢二等五十一錢、稻
毛の驛を下車するともう僅に七町隣
然と繁つて居る松林が目あて、右に
東京館左に養生館、中央の森の
中が海氣館と云ふ宿屋、松は御料
林だとやら千古の翠滴るが如く、海



梅 婦 夫 作 長

は遠淺の浪靜に左には房總の山々、遠くは東京灣を往來する白帆を眺めて繪の様な
處、海氣館には松林の間に離れ屋が幾棟となくあつて、松風の颯々たる間に獨茗を

かいするよく

養て啜れば浮世を放れた奥山住居の感がある、内所話も人には聞かれず真に落ち付いて居心の好い事此上もなし、窓を開けば後の山も前の庭も松ばかり遙に海の色も松の翠を通して眺め、味ふには鮮魚の庖丁鮮やかなるものがあり、遊ぶには碁將碁、玉突臺もある、浴場には海水の湧かしたのを一浴び浴びて松林の中を散歩すべし然れども涼氣秋に入つて天高くなれば此處等一帯の小松林が初葺の發生地となり落敷く松葉を掻けば下に傘を廣げて初葺が一つ二つ多い所は行列を成して生へて居る然しそれも場所があるから案内者を頼むが先つ肝心也館の西に當つて八幡社、更に西するに検見川の町、鐵道線路の方へ出で幕張の方へ足を向けて行くと一帯の甘藷栽培地、是は例の青木昆陽が地を相して第一に茲邊に植へ試みたものだそうではばら松の二三本ある小山の中に甘藷先生の墓と云うのが建てられてある、幕張停車場に立札がある **長作夫婦の梅** は、停車場から半里、長作の長榮寺と云ふ寺の地内にあるので老幹苔を帯びてその姿また見べきもので梅の頃には非常に行く人多い、館から東へは磯づたひに僅一里で千葉へ行かれる、稻毛の宿泊料は三館とも壹圓か

ら貳圓、晝食は一圓見當、朝早く出て悠つくりして食事の後、精々膝まで位しかない海の遠淺を飛び廻はつて鯨を手取にしたり、蛤を掘りだしたり、巖に付いて居るほうづきを取つたり、子供連れでも危険のない愉快な遊びに疲れた處で、晩饗を認め歸る事が出来よう、或は行き路に船橋 **習志野** を見物するか、歸りに千葉の名所、千葉氏の城址猪の鼻臺、寺院内にある千葉神社、大日寺、金渡神社、寒川神社、さては「寒川や袖思が浦にたつ煙君を待つ橋身にぞ知る」の君待橋を見物し夕方汽車にて千葉より兩國橋まで、哩數二十二哩七鎖、時間は一時間四十分三等賃金三十八錢二等五十七錢。

三千里の旅に上る

海樓の涼しさつひの別れかな

碧梧桐

おまゐり

堀の内と新井

(春は摘み草
秋は栗飯)



堀ノ内仁王門

堀の内のお祖師様と新井の薬師とは同一日に参詣する事が出来よう、堀の内へは甲武線中野迄、電車で行かれる、中野で下車して南への道は堀の内、踏切を通つて北へは新井への道、堀の内へは約十七町許り、新宿終點の少し向ふ水道の所から自働車なら二十錢納め手拭の軒先にひら／＼する茶店十數軒を通り過ぎるといかめしき柵、門、池上の本門寺ほどには行かないが伽藍頗る壯麗、本堂は日蓮の高弟日朗の作なる日蓮の像がある、毎年池上本門寺と前後して御會式がある、満都の有難連が殆ど堂内構内に溢れる程に詣るさうで

ある、新井の薬師へは中野驛から僅に十二三町、兵營の側を通つて田甫路の突き當り俗に子育薬師と云つて参詣者は中々に多い、秋は枯野を見ながら、名物の栗飯を喰ひ雑木林の紅葉を賞しつ、一日のそゞろ歩きには丁度手頃の場所であらう、甲武線の汽車で吉祥寺まで行き驛から四町ばかりで、井の頭の辨天がある、池は其水清冽、昔徳川家康が茶を煮る料にとて態々汲ました處、後に神田上水の源となつたのだそう、池の周圍幽邃閑雅、紅葉の頃もよし、涼みにもよろし。公園になりかけてゐる。

井の頭

茶の水に塵なおとしそ里つばめ

其角

う め

蒲田と小向井と原村



蒲田梅屋敷

蒲田には汽車の停車場もあれども、京濱電車の停留場梅屋敷は薄田梅林のすぐ前なれば是に依るが好し、茲まで電車賃八ツ山より八錢、下車した直ぐ右手の大きい家が梅屋敷の山本と云ふ家、其庭に入ると老梅數百、庭廣からず何の眺望もない處であるから風情は尠い、園内には天皇陛下の嘗て御休憩になつた玉座の跡がある、梅干、梅びしほをお土産にして茲を出で、再び電車に乗り川崎で下車して(川崎まで電車賃五錢)西北へ十五町許りで小向井の梅林を探る可し、梅林は六郷川に沿ひ香雪全村を掩ひ樹の多いのは蒲田の比

にはあらず、成島柳北等が是を評判して以來世間に知る人多くなりしも此頃は又さびれたる風あり、土地平坦なれば雅致はなければ、直に川端に出で舟を備ひて川崎若くは穴守へでも廻はらば好い遊山となる可し、若又流を溯つて西へ十二三町を辿れば小杉村に最明寺と云ふ寺あり、本堂には大日如来を安置し北條時頼の建立と稱せられ今は見る影もなければ尙閻魔堂觀音堂あり昔の壯麗なりし俤を殘せり。

原村は六郷土手停留場から堤に沿ふて約六七町古來名のある矢口の渡近くにある、流は清き六郷川花は清き梅の花樹、堤上の眺め殊によし。渡しを渡れば前記の小向井。

海水浴

館山

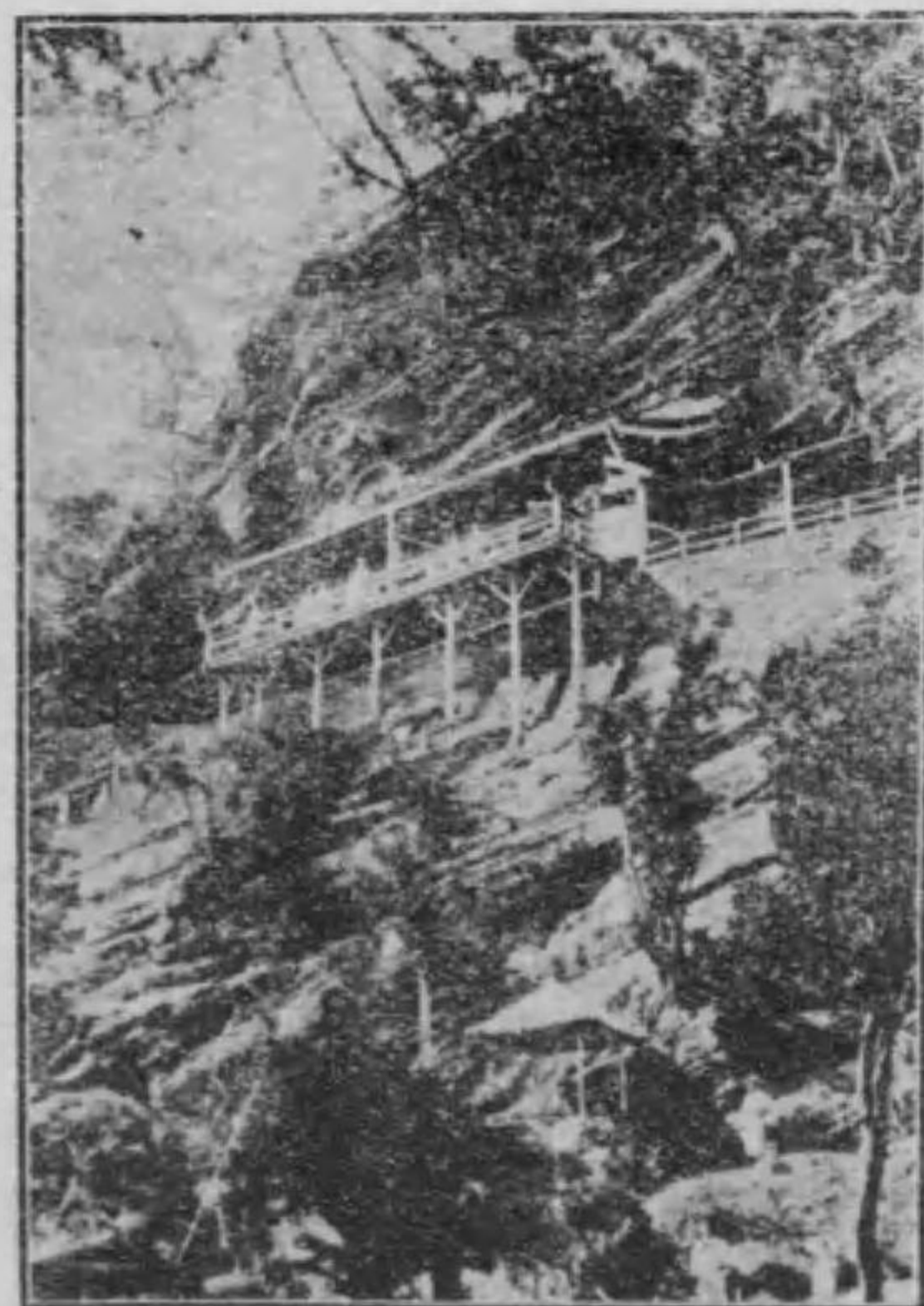
(名所は鏡ヶ浦
観音は那古と船形)

東京湾汽船を利用して暁の六時靈岸島を發する一番の船で東京湾に乗り出せば北條

館山

へはいづれも十二時前に着

く、汽船賃は片道八十四錢、歸りは最終の館山發船が午後八時で靈岸島着は午前三時、目的地に居る時間は僅に八時間、少しく心細い感もあるが、都人士は馴れないが海上の旅行は、非常に愉快なもの、殊に歸途を月夜の晩にでも選めば如何に面白く如何に樂しからう、北條館山も有名な那古の觀音も船形の觀音も同じく鏡ヶ浦の灣に面して汽船の發着所になつて居る、北條と館山とは汐入川を境にして相並んで何れ



船形の觀音

も海水浴場として五六十錢見當で宿泊する事の出来る手軽な避暑地として、景色もよし食物は魚が豊富にある事などで近年中々學生などが評判が好い、北條には木村

八幡

には第一

屋、吉野庵、吉田屋、館山には松岡、藤屋、鶴屋、田村屋等がある、
高等學校、東京高等師範學校の水泳場があつて毎年沖の島、鷹の島を周る壯快極りなき關東大遠泳がある、館山公園は町の丘上にあつて鏡ヶ浦の風光を一瞬に集め海上鷹の島、沖の島を手取る如く見る事が出来る、大日岩、琴平神社、さては里見義實の城址と傳へられる城山など見、那古、船形を見物する都合にして急ぎ出發す可き事、那古は坂東卅三觀音の一、那古の山腹にあつてうしろは、斷崖、前は鏡ヶ浦頼朝の建てた、仁王門三重の塔などあり、船形も殆ど那古と相似て斷崖中に本堂あり、那古は行基の開基にして茲は慈覺大師の草創、同じく鏡ヶ浦の風光も、館山公園で見ると、那古、船形、見る處の變はるに従つて千態萬様、面白き事限りなし、鏡ヶ浦には灣内多々良の落雁、船形の歸帆、那古の晚鐘、湊の夕照、八幡の晴嵐、城山の秋月、宮城の暮雪、汐見の夜雨一々海岸を尋ねて見ると面白うからう、忙し

そうでも男の足、草鞋脚絆の覺悟あれば日歸りの旅で十分。然し少し遠くへ行つて白濱の怒濤を見るもよい。

おまゐり

池上

(近くは八景園遠くは矢口の渡)

日蓮上人が入寂の地である池上の本門寺大森停車場より約二十町、新橋から汽車で往復か二十錢、京濱電車でなら八ツ山から往復十錢、大森停車場から人力車は二十錢から三十錢の見當、徒歩でも道はよし三分もか、ればゆるりと行かれる、踏切を越し、突當りは梅花で有名な八景園山上に上つて東を望めば大森の海岸松緑に波ほの白き景色遠くは房總の山々で、青壘を敷いた如き海の彼方に見られる、本門寺の山號は長榮山、創立は弘安四年、彼の元寇の國難を日蓮が法力で起した神風に防いでから間もなくの事である、高き石段を上ると右手に五重の塔、本堂の左には釋迦堂、眞骨堂上人廟などの建物あり、上人廟の傍に日蓮上人硯水の井廟の中には上人寄り懸りの柱あり、廟の前の櫻は毎年十月十二日丁度會式の頃に開くを以て會式櫻と呼ばれて居る、會式の當日は大森より池上まで始ど人を以て埋めたる如く、お籠と稱し、本堂に徹夜する人數千、沿道大箒を焚いて徹夜押返されぬ

おまゐり

おまゐり

程の参詣人に便する程である、名士星享の墓も此境内にあり、本門寺の北隣には鑛泉の湧く處があり、夫を温泉にして旅人宿兼割烹の明ぼの樓と云ふのがある、山より中腹に掛けて建連ねられたる幾棟の間に梅樹數千、南天約一萬株、花時には美しいものである、其上見晴はよし閑静で、都はなれがして如何程好いか知れない。本門寺から西へ半道勝海舟の墓のある馬込お洗足の池、夫から多摩川に況ふて下流の矢口村には新田義興を祀つた新田神社、義興が江戸太郎左衛門等に討たれた矢口の渡近くには義興と死を共にした臣下十人を祀つた十騎社あり、是等を見物して夜に入らぬ間に歸る事が出来よう。

萬燈が休む畑の月夜かな



池上本門寺

東洋城

とらぢ

成東

(東金に出で九十九里見物佐倉へ寄つて宗吾刑場を訪ふ)

成東の礪泉は獨逸の何とやら温泉と同質であつて婦人の病氣には非常に利く、茲で



成東浪不切動

ち頂上に一つの祀がある、昔は九十九里の濱が此邊で太平洋から打寄する波濤は此巖石に打切られたと云ふので、茲に安置されて居る不動様の名を浪切不動と云つ

とらぢ

て、海上安全の守り神であるそうだ、樓上にと上ると廣々とした景色、春ならは處々に桃の花を點じて麥隴菜圃 うら／＼とした景色に、此家の方針として成る可く家族的にと云ふので心置のない食事を濟ませて鑛泉に入る、體の筋が緩むだ様に心持の好くなつたのに任せて浪切不動の山に登る、左程の高さでもなければ、切立てた岩道頂上まで行けば一寸息が切れる 頂上からは遙に九十九里の濱が見える、歸つて又一風呂ゆる／＼夕飲を喰べて歸るもよし、人力を備ふて東金まで一里を走らせ、東金の城址、三王臺、小野の小町の生地、本漸寺、鶴沼池、さては日吉神社、八坂神社などを見物して東金から房總線に乗り大網で乗り換へ千葉を経て兩國橋に向ふ、又は成東より佐倉まで汽車に乗り、茨臺と稱し舊佐倉藩の刑場を訪ひ佐倉宗吾處刑の跡を見、將門山に將門祀に賽し千葉より兩國橋行に乘車するもよい。

入道山

秋深く萩の徑の盡きすある

碧梧桐

ほたる

大宮

(櫻、蓮の花、萩、紅葉もよし) 温泉もあり茸狩りもよし)

昔は關東の中樞として牟差志の府が置かれてあつたと云ふ大宮は其名殘か武藏の一の宮と稱せらるゝ、官幣大社氷川神社が二千餘年の舊社として松杉暗く生ひ繁り神寂びたる町外れに鎮座ましまして居る、其境内が大宮公園、二萬餘坪の廣い處池には蓮の花、松杉の緑を彩る櫻、其上に本社裏手の山からはアルカリ鑛泉が湧く、静に遊ぶ可く病を養ふ可く宿屋が萬松樓、八重垣などあり。かつ此の一帶は萩もよく紅葉は特に紅葉見るなら氷川の里よ顔が緋になる紅になる」と俗語にある如く天然の錦に包まれ恰も繪巻物を見るの感あり。

上野から大宮驛まで汽車哩數十六哩六鎖二等賃金四十二錢三等は廿八錢、時間は約五十分、停車場に續いての大宮工場は規模頗る大きく汽車をどし／＼製作して居る、停車場の前を半町ばかり兩側の宿屋茶屋の掛聲を聞き流して大通を出る、左に折れて又右に曲り七八町で氷川神社の入口、人力車に乗つても十錢か十五錢の、神社

の入口から兩側に杉の並木正門を這入つた拜殿、結構壯麗と云ふ程ではないが壯嚴のお社で素盞鳴尊、大己貴尊、稻田姫を祀つてある例年大祭は八月一日に催され勅使が下向して東遊の舞を拜殿に奏する事になつて居る、拜殿から右へ折れると池がある、池の西側に幾軒もの宿屋、温泉は色々の病氣に利く食べ物に決して悪くはない、宿を出て池の周圍裏手の小山に散歩する、公園から北へ五六町の鹽田山と云ふのは上杉管領の旗下鹽田忠資が城址だと云ひ傳へてある、螢は大宮の名物であるが螢狩までしてその日歸ると云ふのは頗る困難な仕事、出来るならば泊り懸け、翌朝早く歸るとしたいものである、螢の多いのは公園から東へ七町ばかりの見沼川、川幅も廣からず兩岸は草生ひ繁つたつまら



氷川神社

ない川であるが螢の大きさと來たら、又其の大きいと來たら東京の人は必ず叱驚する先づ船を仕度して午後八時頃下流から次第に漕ぎ上る、螢火亂飛と云つても東京の人の目には想像は出来ない、縦横無盡に大きいのが飛び廻はる、線香花火を揚げ詰めてにして居る様なもの、兩岸の草叢には是又露が宿つた様にべつたりと止まつて譬へる物のない程美しく光つて居る、此方の岸へ寄せ又彼方の岸へ寄せて船の上から手を延ばし手捕にして用意の籠へ入れると忽に三十や五十は取れる、其面白さは云ふに云はれず形容も出来ない、若船に酒肴の用意あり、流に任して舟を浮べ飲みながらに賞翫したら如何程の愉快さであらう、螢は出始めが大きく、次第く小に小さくなるのであるから、「螢も近々御飛散相成り」と螢を御の字で扱ふ大宮の宿屋の廣告が新聞にでも出たら早速出掛けて御見物が願ひ度い、夜露で浴衣は濡めつぼくなる、従つて疲れるが、急げば終列車で歸れない事もない。公園を抜けて天神山の奥の松林に行くと初葺や鼠葺や芝葺等か列をなして立つてゐる、落る栗を拾ひつゝ、遠近に鳴く百舌鳥をきゝつゝ、秋の行樂として此れに越えた事は一寸少なからう。

ほたる
夏では面倒だが春や秋の天気都合で歸り路に浦和下りて里や林の中を半里程歩行くと太田窪と云ふ所がある農家の片手間に川魚料理をやるので、就中蒲焼や鯉こくなどがよいと云ふ事になつて居る。野趣横溢して非常に美味く通人の行く處である。

かるすいよく

大磯

(鴨立澤を見て化粧坂の化粧園子を召せ)



かしすあよく

大磯海水浴

鎌倉時代には海道第一の繁華な處、虎、少將等の遊君を出して鎌倉の銷金窩であつた處、明治になつて松本順先生、海水浴の効能を唱道してから忽ちに繁昌を極める小都會となつた、謂は、海水浴場の先達で、諸般の設備が完全して居て、今では洋食屋玉突場、新聞場、小料理屋、藝妓屋等何でも無いものは無い姿で俗化し盡して風雅な田舎らしい處は無くなつたが、却て當今の人情華美を競い驕奢を誇りとするには合ふかして矢張盛に人が出る、別荘は山手と云はず町と云はず軒並にある其外海水旅館は、有名な濤龍館、招仙閣、長生館

を始めとし、甲喜樓、山本、百足屋等數十軒ある、停車場から海岸へ僅かに三町許り、海は遠浅で浪こそ少し荒れ危険は少なく女子供でも泳がれる處、停車場から西へ五町の町端れに彼の有名の鳴立澤、西行法師が「心なき身にも憐は知られけり」と詠じて庵室を結んだ西行庵、歌にばかり有名なのは無い。寶永中俳諧師大位三千風が庵居してから俳諧にも道場となつた所である、町の中央延臺寺の本堂には曾我兄弟の木像、寺内に虎子石あり、鎌倉時代に遊廓なりし化粧坂は停車場より東の踏切の邊にして昔の名残としては化粧團子を賣る茶店あるのみ、夫れより東へ數町にして相模灘を一望に眺める高麗山、更に一町にて花水川、頼朝が花見に來りし時花既に散りたる跡なればとて花不見橋の名ある橋あり。

新橋より大磯まで汽車四十哩餘三等賃金六十八錢二等一圓〇二錢、時間ば二時間と少しなり。

大磯の松風寒しとらの時

徳元

さくら 小金井

(國分寺の古瓦玉川の新緑)

小金井の櫻は悉く八重であるから上野隅田を見盡したあとでよろしい、承應年中常陸櫻川から移し植えたもので多摩川上水の兩側の堤約二里と云ふもの櫻のトンネル水は清し花は艶なり、飯田町から、甲武線境驛まで僅か十二哩、時間約二時間賃金三等二十三錢二等三十五錢、(境國分寺共通の往復切符花時に限り發賣さる)、境で下車して約十二三町多摩川堤に出るチラリホラリと櫻の花を眺めながら次第に上へ上るに従つて花は漸く多く櫻の下には可憐な木爪が一面に生へて殆んど櫻と同時に花を開く、上は櫻下は木爪、小金井の春は

さくら



小金井の櫻

此れが爲めに一入美觀を呈するのである堤の中央小金井橋の附近は枝は枝に相連なり、香雲水に映じ、落花は緑に紅の友禪模様、向島を二つ合せて向ひ合せたもの如く、唯美しいとより多くは云はれぬ、兩側に料理屋水茶屋軒並にあり、うで玉子の六錢海苔卷の一人前廿五錢などと高い處もあるやうなれど、矢張腰掛に敷いた赤毛布の田舎びた處は、面白い處あり、草鞋がけ、編上げの花見るは先づ好い處、小金井橋より更に流を上り、櫻漸く少くなる邊より左に折れて約一里で國分寺の停車場へ出る、停車場を前へ左へ十數町、昔の國分寺の跡が山門の礎のみを印に境内へ這入れれば古瓦累々として山の如し、手に取つて見れば布目あり、是は何百何十年のものサなど一寸捻つた講釋でもする人には結構なお土産、但し重いのは御覺悟の事と仕る、

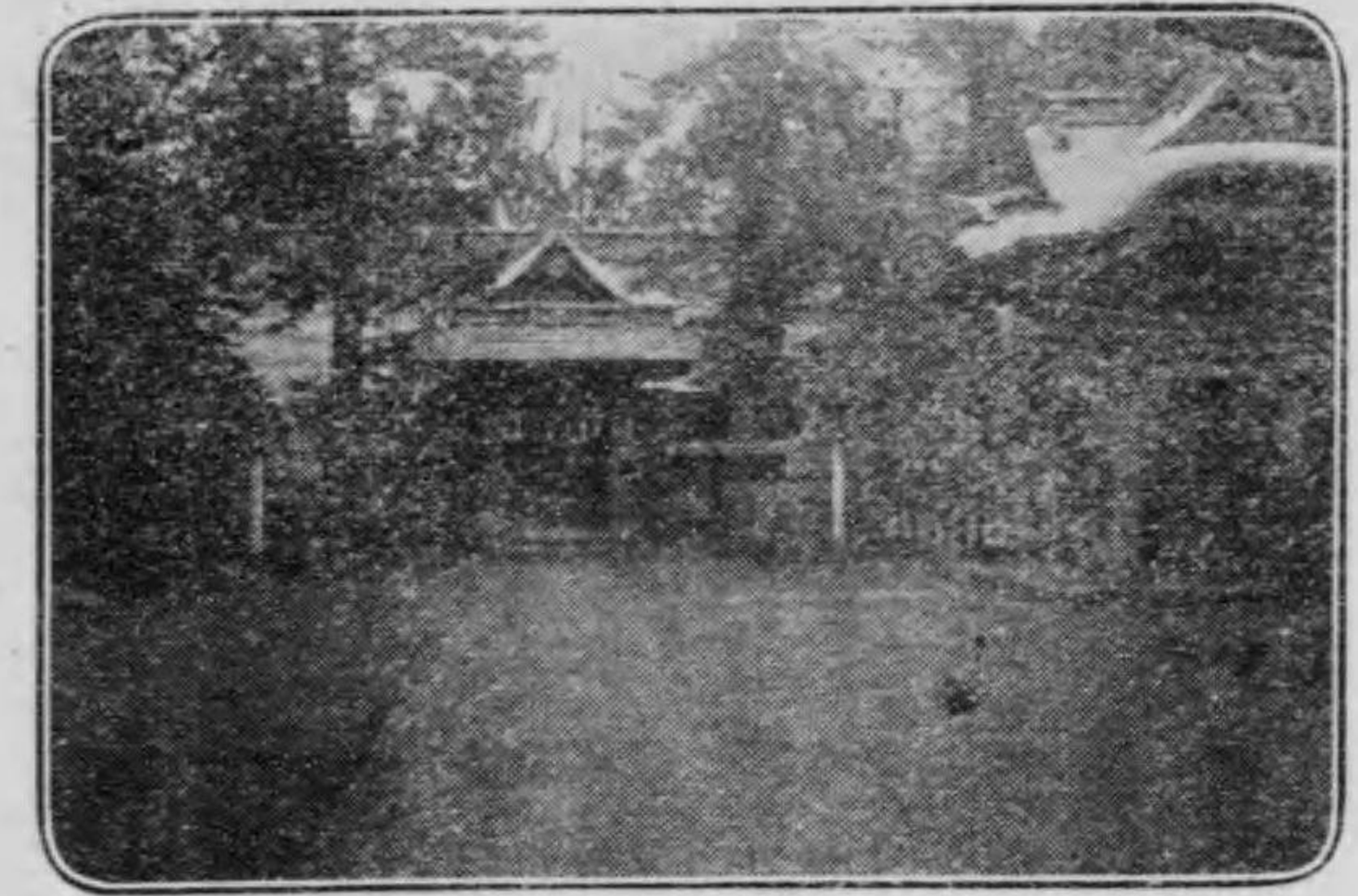
國分寺

今はもる布目瓦や袖しぐれ
擲ては瓦もかなし秋の聲
文 來
太

わかば

府中

(六社様から分倍河原大禰の若葉よし)



わかば

國分寺から半里で府中へ着く、昔の武藏の國の首都今でも頗る賑なもの、町の中央に六社明神と云つて大國魂命、小野神、小河神、氷川神、松山神、金鑽神を祀つた、大國魂神社がある、國弊中社である、是が評判のお祭即ち毎年五月五日、神輿の假屋へ移る晩に町中一つも燈火を點せず、近郷近在から男女老若の別なく出掛けて来て色々悪事が遠慮なく行はれる處、併近年は警察でも少しは干渉するかして左程の事もなし様である。明神の西南十町で多摩川の岸へ出る、新緑の未若く流の音淙々元弘三年新田義貞義兵を擧げ武藏に

来る北條氏既に分倍にありと大平記卷の十にある
分倍河原 といふのは是である
國分寺へ戻る、草疲れたら人力車あり僅に十五銭か廿銭、馬車がある金十銭、
國分寺から府中へ入る兩側が樺の老樹が並木してゐる八幡太郎義家が陸奥に安部氏
を攻めに行つて戦勝の記念に植へたのださうだ、早春の頃此樺の若葉するを見るの
は豪壯て何とも云へない程誠にいゝ。國分寺から飯田町まで十七哩、時間は一時間
と五分、三等賃金廿九銭二等で四十四銭。

分倍河原

里人よ秋の夜語れ大平記

墓

太

とうち

箱根

(小田原の小峰梅林早雲寺の寶物
と玉簾の瀧胸ヶ岳を登破すべし)

箱根へ日返へりて遊びに行かうといふのは頗る六ヶ敷い問題であるが、箱根も塔の
澤か湯本などは裕りして一日を松籟澗聲に心耳を終まして暮す事が出来ようか。
新橋から箱根へ行くには國府津まで汽車四十七哩、三等で七十八銭二等で一圓十七
銭、回遊列車の時には更に幾割かの割引がある、時間は二時間と三十分、急行車
に乗り込めば一時間半以内で行く事が出来る、國府津で下車して湯本までは電車鐵
道が約五十分、賃金は三等で三十銭、途中酒匂の川を渡る時既に箱根の山に白雲の濛
々として掛かるのを見るであらう、
小田原の町に入つては、町の家並を越して蔚
蒼たる城跡の木立、小田原名物いろいろ屋の看板を見て右に折れ、ば二宮尊徳を祀
れる報徳神社がある、その北ついきが
小峰の梅林で早開を以て有名である、大久
保神社があつて社頭相模灘を望み得、清香静寂の幽境である、それより早川の流れに
沿ふて走り出せばちきに
湯本である、福住橋を渡れば福住をはじめ温泉宿澤山

と湯本細工の賣店軒を並ぶ、福住橋を渡らず川沿に上へ上り對岸に渡り爪先上りの坂道を上る事五町にして塔の澤に着す、溪流は玉の緒橋、千年橋の下遙に巖を噛み水聲松風の如し、**塔の澤**には環翠樓、一の湯、新玉の湯、福住等の温泉宿あり、湯本に着する節すぐに見物するか、左もなくば、宿へ着きて後、湯本に福住の前より旭橋を渡り須雲川を溯つて玉簾の瀧を見物す可し、瀧は高さ十數間、幅七八間、素絹を掛けたる如く又玉簾を掛けたる如し、但し瀧の邊一帶私有の庭園となり入場者の金十錢宛取らるゝは情ない心地なり

歸道早雲寺に立ち寄り北條早雲の木像寶物等を見せて貰ふ可し、早雲寺は質素なる寺院、北條氏勃興の當時を想察し得て面白し。



瀧の垂玉根箱

朝早く新橋を出發し午前箱根着、晝飯後其邊を見物をして午後ゆつくり湯に浴し食事をしてそろゝ歸途に就かば非常に夜を更かす心配はなし、但し塔の澤よりは箱根山中の都會なる **宮の下** まで僅に一里、幽邃閑雅なる **底倉** へは宮の下より數丁、歸るのが厭にならば日程を變更して更に大に發展す可し。

尙近頃芦の湯から本宮山と云ふ硫黄山を経て **駒ヶ岳** 頂上に行ける新道が出来た駒ヶ岳は海拔四千三百尺で箱根山中の高峰で種々な高山植物があり頂上に駒形神社や駒の爪と云ふ名稱がある、そこからは甲信の諸山、大山、丹澤山、富士山等呼べば答ふるもの如く風景すこぶる佳一遊すべき所也。

おみやげ

寄木細工、挽物細工、小田原の梅干と鹽辛、梅びしを、湯の花、湯の花染、

夏山を上り下りの七湯かな

子規

槍立て、通る人なし花かしき

同

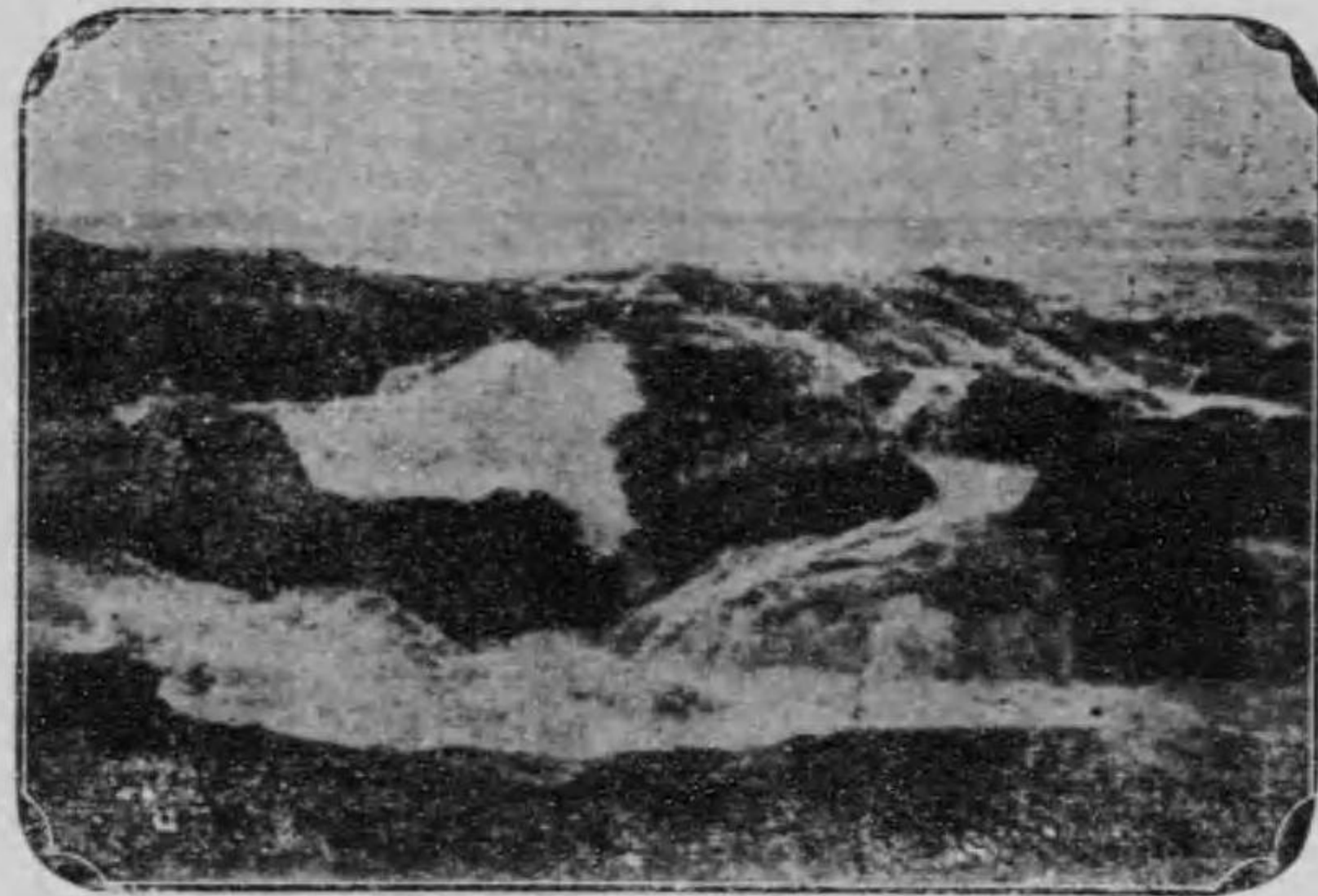
涼しさや裸で越ゆる箱根山

同

海水浴

銚子

(男性的海洋と大漁踊の野趣)



銚子犬吠崎

大森羽田さては鎌倉江の島の水も海は海であるが、謂は、女性的寄せて来る浪もチャボくと行水盥を掻き廻はすに過ぎないが、銚子となると海も本物である、對岸は何にしろ亞米利加のもの、夫に向つて突出て居る犬吠岬に當つて碎ける大浪小浪は凄まじい許の壯觀、水沫は雨の如く霧の如く、岸に立つて見て居る者は袂や袖を濡すばかりか、腋下自ら冷風湧くの懐があるであらう、銚子の犬吠岬から上總は大東の岬まで灣形をなした海岸は鯛の捕れるので有名な九十九里海岸、海岸の名物大漁踊を船頭の謂ゆる大模様のまいわい着

たる姿で見る事の出来るのも漁村の面影いちじるしく莊嚴なる海岸の波濤掀翻に對して面白い對照であらう。

銚子へ行くには總武線兩國橋驛から汽車に乗るのが最便利である、(外に靈岸島から船で霞ヶ浦を廻はつて潮來出島を探り鹿島香取を経て銚子に行く途もあるが、是は稍日時を要する、詳しくは七日の旅を見られよ)、兩國橋から出る汽車には成田行きもあり、大原行もあるから、成る可く調べて置いて銚子へ直行の列車へ乗り込む方が好い、兩國橋を朝の一番に乗り込むと銚子へ、ザット五時間哩數七十二哩、汽車賃は三等が壹圓拾貳錢二等が一圓六十八錢であるが夏季中は割引往復切符があるから夫を買つた方が便利で而して經濟である。

歸りの汽車は銚子發の終列車を選まねばなるまい、夫で兩國へ遅く着く此れでまる一日の遊びとなるのに肝心の銚子には九時間しか居られない事になり、肴の新らしいの、夕暮方の海の景色、見捨難いもの、多い人は一泊して翌朝の一番か二の汽車で歸る事にして飲むなら落付いて飲む事にした方が好いであらう、銚子の町は何の

かいすぬよく

變哲もない處犬吠岬燈臺に近き處を鷄明と名付け茲に海水浴場があつて曉鷄館、水明樓、浩養館、洗心樓等の旅館がある。遊覽鐵道が出来たから停車場からすぐ鷄明に來る事が出来る。

犬吠岬に近く海には大黒島、鶴島、助島、一の岩、二の岩の點景あり、犬若あり、君ヶ濱一帶の松林殊に風色絶好、飯岡の圓福寺、川口の千人塚、日高川の清姫に似た其話を由緒とする川口明神等閑あらば見物す可く、大漁の懷瀼き漁夫を搾つて下腹の毛まで抜いて仕舞ふ等の松岸の遊廓も昔の俤はない。
銚子より戻り道の停車場のうちで飯岡で下車し岩井の龍福寺に有名な四十八瀧あり、今は其七八を殘すばかりであるが、怒濤を見て更に飛瀑に臨むる其趣き自然に相違があつて面白からう。

おみやげ、鯉鹽辛、縮、もろみ、

捨飼ひに牛肥ゆる里の木種哉

碧梧桐

海樓の松薄霧に残る月

同

おまゐり

大雄山

(二十八宿の山道 莊嚴寺献供式)

小田原の道了様と云つたら、東京では可成な人氣のある神様、松田停車場から約一里半南足柄村字關本にある、寺號は最乗寺應永年間に了庵禪師の開山に係るものであるが、道了と云ふのは了庵禪師の弟子非常の強力で開山の時山を拓き樹を切り木石を運搬するなど殆ど神業であつたが、死ぬかと思ふと忽ち天狗と化して後は永久に同山の鎮護を誓つたと傳へられてある、其道了權現が殆ど主人同様になつて荒神様として成田に繼いで賑やかな信徒を澤山に持つて居られる、松田からは人力車で三十錢、馬車なら十五錢位、馬返からおまゐり



松掛袈裟了道原田小

絶頂まで内端の二十八町、是を二十八宿に分けて標石が立つて居る、道は険しくはないが殆ど真立に爪先上りに登るので楽ではない、足弱の爲めには駕籠もある、二十八町を上り切ると本堂、宿坊奥の院までは更に上る事十数町である、寺内に感應の瀧あり、老杉古松鬱蒼として茂り合ひ晝尙暗き様子は如何様天狗が住はれるかとも思はれる、俗に御供と云つて献供式は夜三更に白衣白覆面の僧が黒塗の桶に供物を納め、暗中を奥の院に献げ、是は天狗が手づから受取られると云つて難有がるのである、黒暗々裡白衣の僧が樹間を縫ふて見えつ陰れつするのは頗る神秘的で莊嚴極まるものである、新橋停車場から松田まで哩數五十三、時間は三時間、三等賃金八十七錢、二等一圓卅一錢、歸り途には裏山越に箱根へ出る事も出来る、車を備ふて小田原へ出る道もある。

あゆりよう

多摩川 (一)

(日野と立川と) 拜島と羽村)

最も輕便に行くならば下多摩川、二子の渡であるが、ほんとに多摩川の鮎漁をした人は上多摩川に行くに限る、以前は鮎漁と云へば日野と相場が定まつて居た、日野驛へは飯田町から二時間足らずで二等賃金五十七錢、三等賃金三十八錢、日野には多摩川畔に玉川亭と云ふのがいゝ、然し日野驛の手前の立川驛で下りるならば、川まで十二三町、丸芝、福地と云ふのがいゝ、それとも立川で青梅鐵道へ乗換へて拜島、羽村へ行くもいゝ、此の邊一帶の漁法は遊船と鵜を使ふのが最も趣味があつて面白い、淺瀬で漁するには「モジ網」「八子網」を用ゐ、その他釣、投網、追い部屋等もいゝ、費用は遊船十八人乗船頭附二圓五十錢、鵜二羽二圓五十錢、モジ網二圓、追い部屋三圓、投網一圓二十錢と云ふ相場である。殺生の事は此位に留めて少く近傍の名所を述べよう、立川驛から降りて左へ、鎮守の森を右に眺めて十町位いに 普濟寺 と云ふがある。古戦場であつて今も城塞の

あゆりよう

一部が残つてゐる、寺に芙蓉観と云ふ座敷がある、此處は富士を見るによく、かつ武相の翠巒一眸に收め、俯せば玉川の清流白蛇の如く、鮎を釣り人手に取る如く爽快限りなく四季の眺望絶佳である。

立川より乗換へ拜島には瀧山の古城趾あり、風光の明媚近郊その比を見ず。

玉川の鮎に食ひ飽く一日哉
玉川や小鮎たばしる晒し布

子規
同

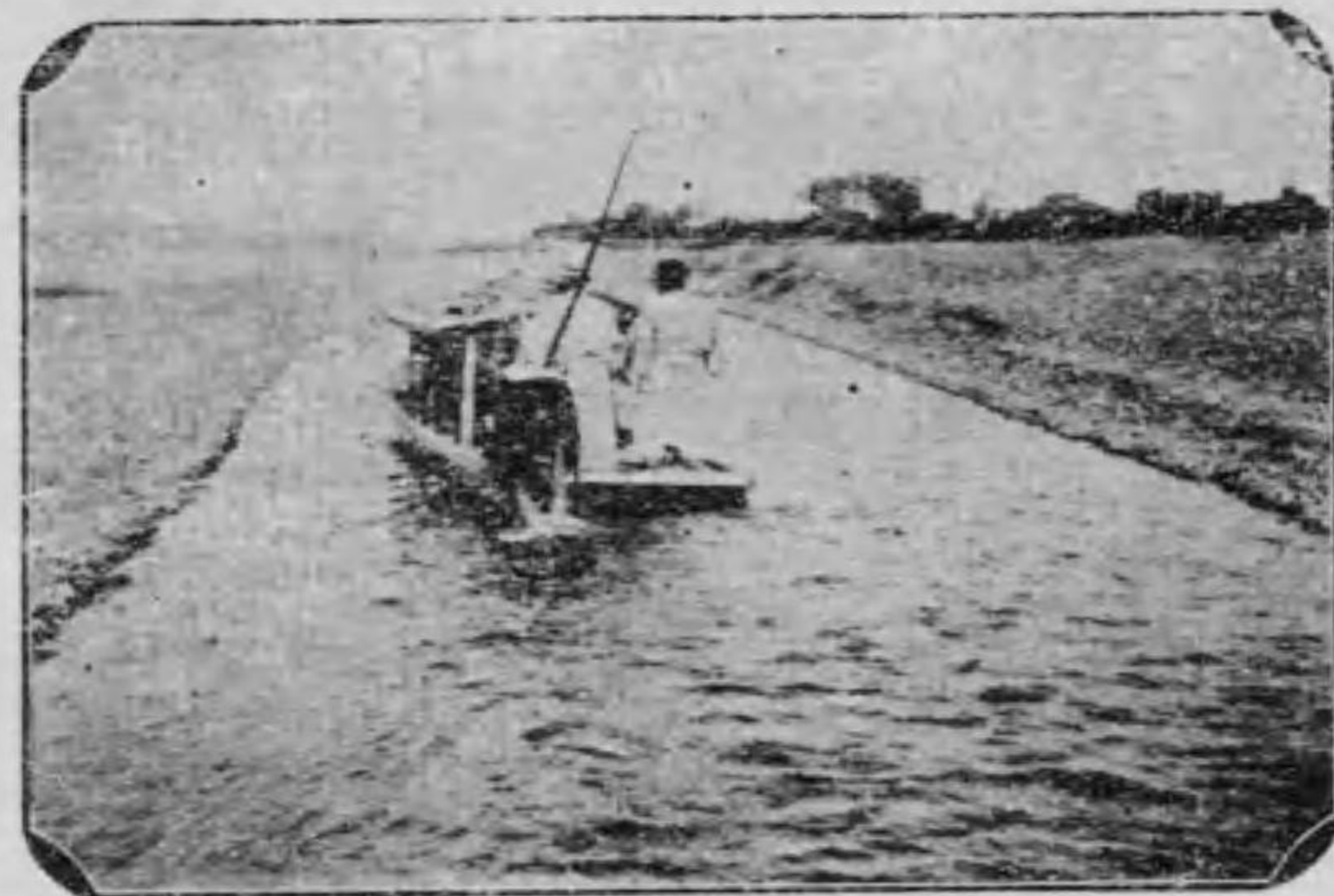
多摩川(二)

(納涼にもよし)
泳ぎにもよし

玉川と云つても場所が廣いが茲には最も手軽に行ける玉川の鮎獵を説く 澁谷の終點までは市内電車、甲武線か山の手線の電車ならば澁谷の停車場までどちらにしても半町も歩かずに玉川電車の出發點に着く、茲から電車約三十分、終點は玉川縁二子の渡しの側である、停車場を降りると直ぐ茶店、鮎料理位は出来るから、茲で鹽焼魚田を調理させて味ふもよし、料理店に玉泉亭 柳屋、喜月、河を渡つて龜屋がある自ら獵して喰はんと欲せば玉川電鐵會社から指定の漁師を呼び舟を出させて是れに乗り組むと七厘も乗り砂糖も鹽も醬油もと云ふ風に鱸には臺所が出来て、投網、羽網、鵜飼といろ／＼にして取れる、潑刺たる香魚が直に下物となつて膳に上る、腕に覺へがあるならば淺瀬へ下りて網を打つて見るのもよし水中へ眼鏡を差込んで早瀬を渡る若鮎を突いて見るのも面白からう、年々歳々洲も變り波も變れども流を上るに従がつて魚は多い様である、小さきは酢味噌、大なるは鹽焼に、地酒の

あゆりよう

味も亦格別先に立つて行く漁師の手先ばかりに見惚れて居る内に川は右折左折、兩岸の緑の景色は次第く々に變り行く、眺めもあり、面白くもあり、而して美味い物が喰べられるのだから日曜の一日を茲に過のは都會の人には極好い保養であらう、水は深からず流は清く熱ければ淺瀬で小供衆のちやぶくやるに危からず、家庭的に一家引纏めて出懸けるに費用冬からねば經濟をも兼ねるものと云ふ可し、相場は年々變りあれども、屋根舟船頭付一圓以上、鵜飼一組一圓五十錢以上、投網六十錢、友釣五十錢、羽網一組二圓五十錢位の處、若し夫れウンと取つて脊負ひ引れぬ程のおみやげを揃へ様とすれば堰を切つてかい堀をする方法なれども、是れは一寸冒険でもあり、直ぐに往つて直ぐは間に合はな



遊船川玉

いかも知れない。玉川遊園地附近の名所に玉川遊園地がある一萬坪程の廣さで眺望殊に佳く瀧もあれば花壇もある尙宏大にグラウンドもあつて種々の禽獸を飼養し小動物園の觀がある尙ほその下に玉川菖蒲園があつて名花數千株自然の風景を一致し一層の美觀を呈する。

玉川遊園地附近の名所に玉川遊園地がある一萬坪程の廣さで眺望殊に佳く瀧もあれば花壇もある尙宏大にグラウンドもあつて種々の禽獸を飼養し小動物園の觀がある尙ほその下に玉川菖蒲園があつて名花數千株自然の風景を一致し一層の美觀を呈する。

玉川やまづお先へと飛ぶ蛙
鮎死ん瀬の細りけり冬の川
同 一 茶

海水浴

大洗

(眞の磯節を聞く磯濱、平磯をも廻る)

「磯で名所は御洗様よ」と誰でも知つて居る俗語、磯と云ふのは平磯、磯濱、大洗等所謂鹿嶋灘に面する海岸の總稱であらう、大洗様と云ふのは大巳貴命、少名彦名命を祀つた丘上の磯前神社、齋蒼たる老松社後の子の日の原に續きて「松が見えますほのく」と漁夫をして命を頼みの羅針盤としたりしものであらう、水戸から茲まで三里廿五町、人力車賃六十錢、那珂川下りの汽船に依れば杉山河岸から祝町まで十六錢、祝町に上つて、那珂川を横ぎる海門橋を経て、「客を待つ」と謠はれて居る祝町の遊廓に入る、妓樓數十軒昔の姿はない



水戸大洗神社

そうだが二階建三階建で中々立派なもの、茲を通り過ぎて、左折し砂原を數町行くと大洗の海岸に達する、汽船着く河岸から人力車を備ても十二三錢で行かれる、大洗には琴弾の瀧、烏帽子岩、鬼洗の澤などあり、磯濱八景など、云ふのもある、金波樓魚來庵、相並で有名なる料理屋もあるが、また外に小林樓、大洗ホテル、杵屋など云ふものもある。酒は醇ならずとも肴は鮮である、磯濱の老妓一人を聘して眞の磯節を聞くも面白からう、但し夏場などに集つて來る女どもは茲に妓籍を掲げて居ても何處の者やら分らない、其邊の心をせぬばなるまい、大洗より那珂川を渡り湊町に御殿山の勝景を見、平磯町に向ふ可し、茲は海水浴場としては却て大洗より好いかも知れない、萬年樓、平野屋、平磯館等の旅館がある、大洗へは矢張上野を出で水戸まで汽車、哩數七十三、賃金三等一圓十三錢二等一圓七十錢、行き道か歸り途にか水戸を一巡するならば水戸の章を參考にし給へ。

祝町

遊女屋のあいて舟つく花薄

碧梧桐

梅

水戸

(好文亭の眺望
弘道館の跡)



第二公園八角堂

汽車が水戸驛に這入らうと云ふ時、右手に見えるのは光圀卿が八景を選た千波沼、左手に見えるのは烈公の經營に成る、日本三公園の一と云はれる偕樂園である、梅は其數五千餘株此公園の西北の側に、苔面白く枝ぶり様柄として春知り顔に綻び初めるのである秋頃には樹下には蟲ないて人をして去る能はざるの思ひあらしむ。停車場に下りて車を備へば十五六錢、歩いても僅に半里ばかりの一本道、雑作なく公園を尋な當てる事が出来よう、偕樂園は其後「常盤公園」と改められ、更に停車場の上に舊水戸城三の丸を其儘公園としたのを第

二公園と呼ぶに對して第一公園とも云はれて居る、公園に續いて義公烈公を祀つた常盤神社、園内に入つては烈公筆の偕樂園碑、仙湖の碑などあり、好文亭へ上つて下瞰すれば千波湖畔睡るが如き柳色畫の如くである、疎末なれど一寸捻つた偕樂焼と云ふ焼物屋もある、梅林に入つては香雲袂に入つて仙境に導かるゝが如く、數千株の花遅速あり芬芳同じからず、若し是が東京にあつたら東京中が匂ふだらうと思はれる程である、歸り途第二公園に奇つて舊弘道館跡に弘道館碑孔子廟等を見、此間には似合はしき老梅の小さけれども花咲けるを見て停車場に行く、是で歸るのは餘りにあつけないかも知れず、

第二公園 より北へ三町はかりで那珂川縁へ出る可く、茲から汽船にて祝町まで（停車場から人力車ならば大洗まで五六十錢）行き（此賃錢十六錢）祝町より砂原を凡そ十數町歩いて大洗の海岸に出で金波樓魚來庵に荒海の魚を味ふもよからう、（大洗の章を參考す可し）。

上野より水戸まで哩數七十哩時間三時間と四十分、急行で三時間、賃金は三等一圓十三錢、二等一圓七十錢、觀梅の時分には上野にて割引往復券を發賣して觀梅臨

（梅）

梅

時汽車は半減の割引、までして第一公園の下で止めてくれる。

おみやげ、梅干、萩筆、梅かん、吉原殿中、水戸の梅

好文亭

杏の跡芙蓉の下に印すらん

碧梧桐

東湖の墓

おくつきに薄こそあれ杉の関

同

祇園寺

秋風秋思松も唐様の名残かな

同

もみぢ

高尾山

(歸り途は八王子を見物)

高尾の紅葉を見るには中央東線浅川の驛まで汽車、飯田町から三十哩六鎖、時間は約二時間賃金は三等五十一錢、二等七十七錢(紅葉時分には割引往復券が発賣される)。

浅川で下車して町へ出たら西へ凡半道で山麓の高尾橋に達する。抑も茲で一寸高尾山の難有い處を説明しな

高尾山

は天平年間行基菩薩の開いたもので、麓より三十町で薬

ければならない、山中杉と紅葉ばかり、新道より舊道の方が少々峻岨ではあるが近い、新道へは橋を渡つて直ぐ左に折れ溪川の縁に名も知らぬ草の花が危き崖に咲き亂れて居るの

もみぢ



高尾山麓の瀧

を見ながら割石で疊である細道を傳ひ十二三町で瓜先上りに登つて行くと、崖下に二階作りの宿屋然たる建物屋根には單物、蒲團などの狼藉と廣げてあるのを見付ける、是に高尾山の琵琶瀧に掛つて精神病を癒そうと云ふ病院だそうだが、成る程崖道の左を折れるとだら／＼と下つて突當りには瀧の音聲々と山氣がぞつと身に染む、薄暗い山陰に華美な納め手拭などが掛けてあつて小さい祠がある、其後ろへ廻れば即ち琵琶の瀧、高さは僅に三間あるかなしだが水勢の猛烈なると、手を入れてもちぎれる程の冷さ、山を上つて来た熱さも忽ち忘れて堂守の出す澁茶に茫然として眺めて居るとひよつこり出て来たのは髪もおどろ、色青ざめて頬きつ立ち、雪の様に肌もあらはに腰にまつはる湯布を引合せ／＼、怨めしそうな目でヂツと四方を睨む二十三の美人、驚くには及ばない、狂人、男に捨てられたか親に責められたか、但しは兒に分れて取り亂した狂人ではあるけれども、此御山へ来た限り決して亂暴はしませんと病人の世話人が云ふ、病院には堪へず數十人の精神病者が居るが、難有い事にお醫者様でも湯治でも治らぬものが茲へ來ると癒るそうなの、琵琶瀧

を見たら元の途を眞直に上ると本道へ出て登り十六町目の所は此處が山頂で武州の平原渺茫としてその果を知らない近きは青きを列ねて、玉川の流れ、八王子の町いづれも指呼の間にあり好個の壯觀氣宇自から大なるを知る、十四町目から少し下りて復た上れば兩側に杉苗何千本何百本の某として奉納の建札、いや建札の塚の間を十町ばかりで本堂樂王院、壯嚴な建物の後に又上る事數十歩の富士見臺と云ふのがある、満山は皆紅葉時雨の度々峯より染めて麓の青葉に及ぶ見頃は十一月の中ば頃でもあらうか、元の道を辿つて下山の途中(左琵琶瀧とは反對の谷間)へ下る事十二三町で行基菩薩に得度を受けた大蛇がお禮の爲めにお山へ差上げたと云ふ蛇ヶ瀧、景色としては此方が琵琶の瀧よりも好からう、日光にもあるそうだが此山にも佛法僧と鳴く鳥が居るけれど、精進の悪い人の耳には這入らないそうだから、先づ大抵は聞かれぬものとして諦めたが好からう。歸り道に時間が餘つたら八王子へ下車して見物する、織物の産地として有名だけに其方の専門以外の者には多く見る處もないが、唯一つ町から西へ一里ばかりに北

條氏照が築いた八王子城の跡がある城は天正十八年前田上杉に攻め落された古戦場で今でも石垣は形をのこし、近傍に瀧澤山、竹林山、月ヶ峰などあり、是も紅葉の名所、夏も町でも冷み場所になつて居る、淺川から八王子城へは道順としても汽車に乗らずにテク歩きが好い、汽車に乗れば哩數三哩六鑽、時間十分三等七錢二等一錢、八王子から飯田町までは汽車二十七哩時間一時間半、三等賃金は四十五錢二等で六十八錢、八王子と高尾との間には此の頃自働車が運轉してゐる、その賃金は高尾八王子間廿八錢、往復五十錢淺川高尾間十錢。

おみやげ、わらび鎌、天狗平、かん天狗、

目の下の小春日和や八王子

籠り堂は瀧のすゞしきところ哉

鳴雪
碧梧桐

海水浴

新子安

(碧血の碑と浦島寺と總持寺)

東京附近の海は多くは遠淺なる爲めか、水濁り汚き事限なく大磯、鎌倉に比す可くもあらぬに、新に開かれし新子安海水浴場は東京灣中にて水最清く波靜にして海水浴場として一日を樂しく暮すには隨一の處なる可し、汽車にて鶴見停車場に下車するもよし、京濱電車ならば新子安まで、(片道廿一錢)下車して東へ僅に一丁にて海水浴場へ出る可し、浴場は京濱電車會社の經營なれば費用を要せずして更衣所もあり、近頃は都新聞が更衣所を新設して日々いろいろの餘興をやつてゐる醫者などの設備もある筈なれば安心の出来る處なり、行か歸りかの途中見物す可き處は、海岸の東海道を北に生麥にて碧血の碑と東子安の浦島寺なり、碧血の碑の文久年間島津の行列を通過し時横濱に在りし一英人が前驅を横ぎりしより供廻りはの一士奮然其無禮を咎めて斬り棄て談判殊に六ヶ敷かりし古蹟にて、松並木敷町續く處に蘆薄生ひ茂りたる間に小碑の建てるあるのみなり、浦島寺は鐵道線路を横ぎりて山

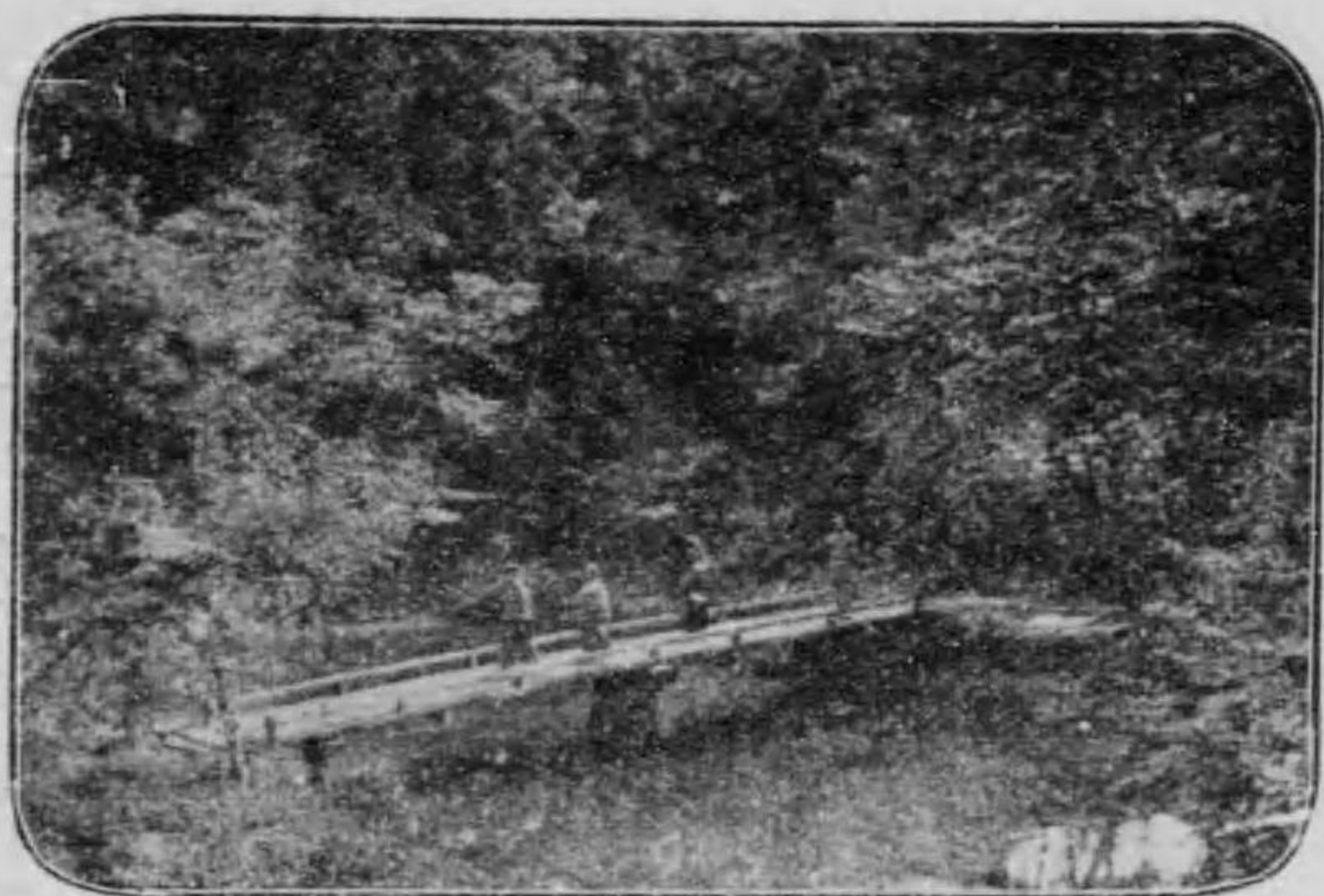
手にあり、護國山觀福寺と云ひ俗に浦島寺と云ふは境内に浦島太郎の碑あり、浦島太郎が如何にして此邊まで流れ來りしものかは舊記も何もなければ知り難けれど、寺は淳和天皇の勅願所なりと云へば可なり古きものといふ可く、好事家は一度參詣して大に調べる所ありて然る可きものなる可し。

向ふ鶴見の山に大きな寺がある、此れは禪刹の本山「總持寺」である境内の規模の廣大で一萬八千坪の大公園があたり花月園と云ふ二萬坪の庭のある料理店もある。夏季は特に納涼によく春秋の頃は此處より渺々たる品海を眺め白帆點綴たるその奥に房總の諸山を望むべく、かつ一帶の白水鶴見川の蜿蜒として海に入る邊り殊に風光賞すべく、近く大森品川の漣波縁なる所より大船巨舶の滿濱港は勿論本牧の翠り一眸の裡にある海の廣漠を愛する人は必ず行くべき處なり。

もみぢ

瀧の川

(飛鳥山)



葉紅の川の瀧

瀧の川は石神井川の下流、飛鳥山と王子神社の間を流れる一名を音無川とも云ふ、王子と云へば昔は東都第一の保養所洒落た遊び場所であつたものを、大磯箱根に取られ近くは大森川崎に取られて今では王子へなどと云へば舊幣じみて聞える様であるが、花はなくとも紅葉はなくとも、山のたいすまい水のかたち扇屋でも海老屋でも静な樓上で一杯を催して見たまへ、ちよいと訝の處がありますよ、夫は兎も角瀧の川へ行くには汽車なら上野から王子驛まで僅に四哩ばかり時間は十五分賃金二等十一錢三等七錢、驛を出て踏切を起したらち

きに王子神社、夫より北に王子の稻荷、瀧の川を溯つて金剛寺の境内は紅葉には殊に名あり、火の如き紅葉水に映じて美しき事は、
 ん方なし、瀧は稻荷の境内にあり、夏には納涼の
 客が中々に出る、飛鳥山の近くへ戻り道は扇屋か、
 海老屋、昔し風な建物にさびがあつて食べ物も無
 闇にハイカラでない處を買ふ事にす可し、但餘り
 油物ばかりを望んでお稻荷様の御眷族と間違へら
 れぬ用心は必要なり、偕花の方から申そうなら、停
 車場を下りたら直ぐ上が飛鳥山、本郷から駒込を
 ドン／＼真直に抜けて來ても、左程に遠い道では
 ない、満山皆花盛りだけに上野向島の雑沓はなく、
 ゆつくり落ち付いての花見とまでは行かなくとも
 入ませせず鬼ゴッコ位は出来る、大に洒落て八笑人を學ひ敵討の芝居でもやつた



飛鳥山の櫻

ら大受大當りは保證する、歸り道は山の下をぶらり／＼道灌山へ出れば茲にも花は
 澤山ありまして、昔からの名所花見寺も近し、麗々とした春でも、落ち付いて秋の
 日でも、唯歩いて居るだけで極江戸式なノンビリした空氣が身に染む様に思はれる、
 理屈を云ふのではないが、汽車が出来てから上方の贅六式名古屋のオキヤンセ式な
 どが侵入して關東兵衛は上野から汽車で逃げ出し逃げ遅れたのが此邊に寮の番人で
 もして居ると云つた風である。

七福神詣



向島百花園

向島

(東京中で七福神詣でか四通り出来る)

年の始めに縁起を祝ふ七福神詣と云ふのが東京市内と附近とで幾通りも出来る、が其内で最も著名なのは向島であらう、向島の七福神と云ふのは弘福寺の布袋、白髯の壽老人、長命寺の辨天、百花園の福祿壽、三圍の恵比壽大黒、多聞寺の毘沙門で、例年元旦から七草迄何れも開扉し門前には七福會の紫の大旗を立て、参詣者の便に備へてゐる、尙ほ希望者には一體五錢宛で尊體を授與してくれる、蓋し半日の散歩がてら、冬の墨堤の風光を賞するもまた趣味深かるべし、是を参拜の順序で御案内を致さう、第一は「夕立

や田を三圍の神ならば』の其角が有名な句碑のある三圍社内に鎮座ましまし恵比壽大黒の兩神、三圍神社は宇迦之御魂命を祀り一に田中稻荷と云つて、村社で恵比壽大黒の兩神は小ながら別に一社をなし、古雅の木彫の像を祀つてある、三圍の社の背後は長命寺、名物の櫻餅を召上る前に参詣なされませう、長命寺は寶壽山遍照院と云ふて天台宗延暦寺の末寺であるが寛永の末將軍御鷹狩の途すがら此寺に御休息境内の井戸の水を召上り、是を長命水との名を下され寺號まで長命寺と改めたとの事、本尊が即ち辨才天、傳教大師の一刀三禮と云はれた名作である、牛の御前から東へ半町須崎町、黄蘗宗の弘福寺の本堂左手に布袋像が安置されて居る、次は百花園、太田南畝の『春花秋冬花不斷 東西南北客爭來』との聯が能く其趣を傳へて早咲の梅から秋の七草、四時見る物の絶えない園中座敷の床に安置されて居る福祿壽は七福神の一に數へられて居る、其次には白髯の壽老人であるが、白髯神社は猿田彦命を祀り天照大神豊受大神などを合祀した近江滋賀郡の白髯神社の分社であつて壽老人がある譯ではないが、白髯と云ふので壽老神をあるものとし七福神

の一つに數へたのである。最後に隅田社の多聞寺の毘沙門天で白髯から十町程ある、此れは多聞寺の本尊で空海上人苦心の作と稱せられてゐる、此外に七福神詣と云ふのが山の手に二つと、龜戸に一つある、谷中七福神と云ふのは不忍池の辨天、それから八丁天王寺の毘沙門天、それから一丁、初音町長安寺の壽老人、それから二丁日暮里經王寺の大黒天、それから二丁修性寺の布袋、すぐ隣りの青雲寺の恵比壽、それから五町田端東覺寺の福祿壽、もう一つのは目黒不動内の恵比壽大黒、同幡龍寺の辨天、二本榎の毘沙門、白金瑞聖寺の布袋、同じく妙圓寺の壽老人と福祿壽。龜戸七福神とは香取神社境内の恵比須と大黒天、萩寺の布袋、常光寺の壽老人、普門院の毘沙門、東寺の辨財天、天祖神社の福祿壽。

おみやげ、長命寺の櫻餅、言問團子、百花園の焼物

三 園

夕立や田を三園の神ならば
小 梅
今下す雁は小梅か柳島

抱 一
其 角

牛 御 前

是やみな雨を開くらん下すみ

其 角

木 母 寺

木母寺に歌の會ありけふの月

同

梅 若 塚

みの虫を撃ことなかれ落葉かな

曉 台

百 花 園

見に行くや野分のとこの百花園

子 規

寺 島 村

櫻多き寺島村や蜆賣り

同

おまゐり

おまゐり

雨降山

(日本武尊と親鸞上人の古跡)

日(ひ)がへりの旅(たび)としては少(すこ)しく困難(こんなん)なれど、健脚(けんきゃく)を誇(ほ)りとする人(ひと)には左(ひだり)して六(む)ヶ敷(し)き事(こと)にもあらばこそ、大山(おほやま)の阿夫利神社(あふりじんじや)へは汽車(きしや)にて平塚(ひらつか)まで、此(この)時(じ)間(かん)二(に)時(じ)間(かん)と七(なな)分(ぶん)(汽車賃(きしやちん)三等(とう)六十四(ろくじゅう)銭(せん)二等(とう)にて九十六(きゅうじゅう)六(む)銭(せん))平塚(ひらつか)より粕屋村(かすやむら)まで二里(にり)人力車(じんりきしや)にて一時(いち)間(かん)と少(すこ)し此(この)賃(ちん)銭(せん)三十(さんじゅう)銭(せん)より四十(しじゅう)銭(せん)、粕屋(かすや)より大山町(おほやま)まで二十(にじゅう)町(ちやう)、茲(こゝ)は山(やま)駕(が)の外(ほか)通(つう)せす、大山町(おほやま)より絶頂(ぜつちやう)まで一里(いちり)三十二(さんじゅう)二(に)町(ちやう)、山頂(さんちやう)に雨降神社(あめふりじんじや)あり石尊(せきそん)大権現(だいこんげん)と云(い)ふ日本(やまと)武尊(たけのみこと)が東征(とうせい)の際(さい)腰(こし)を掛(か)け給(たま)ひし巨石(きよせき)を神體(しんたい)としたるもの、親鸞上人(しんらんしやうにん)が此(この)石(せき)上(じやう)に歸命(きみやう)盡(じん)十方(じゅうじやう)無碍(むがい)光(くわう)如來(にょらい)と刻(こ)したるなりと云(い)ふ、維新前(いしんぜん)は眞言宗(しんごんしゅう)の寺院(じやういん)ありしも神佛混(しんぶつこん)合(が)を禁(きん)せられてより今(いま)は別社(べつしや)の一(いち)となり毎年(まいねん)七月(なな)月(げつ)の大祭(たいさい)に信徒(しんねん)の登山(とんざん)參詣(さんぎ)するもの多(おほ)し、山上(さんじやう)不動堂(ふどうだう)の北三町(きたさんちやう)の上(うへ)は高さ(たか)三丈六尺(さんじやうろくしやく)、下(した)のは高さ(たか)四丈四尺(しじやうしやく)ある二重(にじゆう)の瀧(たき)あり、一の鳥居(とりゐ)より上(うへ)、霞ヶ原(かすみはら)に大瀧(おほたき)あり是(こゝ)又(また)高二丈幅(たかふたか)三間(さんけん)、山(やま)を下(くだ)つて大山町(おほやま)には宿屋(やどや)翠浪閣(すいらうかく)伊豆屋(いずや)駒屋(こまや)等(とう)あり、寄木細工(よせぎさいく)、挽物細工(ひきものさいく)など賣(う)る店(みせ)も澤山(たくさん)あり。

大山

鹿(か)やせて餅(もち)くふ犬(いぬ)の毛(け)並(なら)かな
腰(こし)押(お)やかゝる岩根(いわね)の下(した)もみぢ

遠(とほ)水(みづ)
其(その)角(かく)

おまゐり

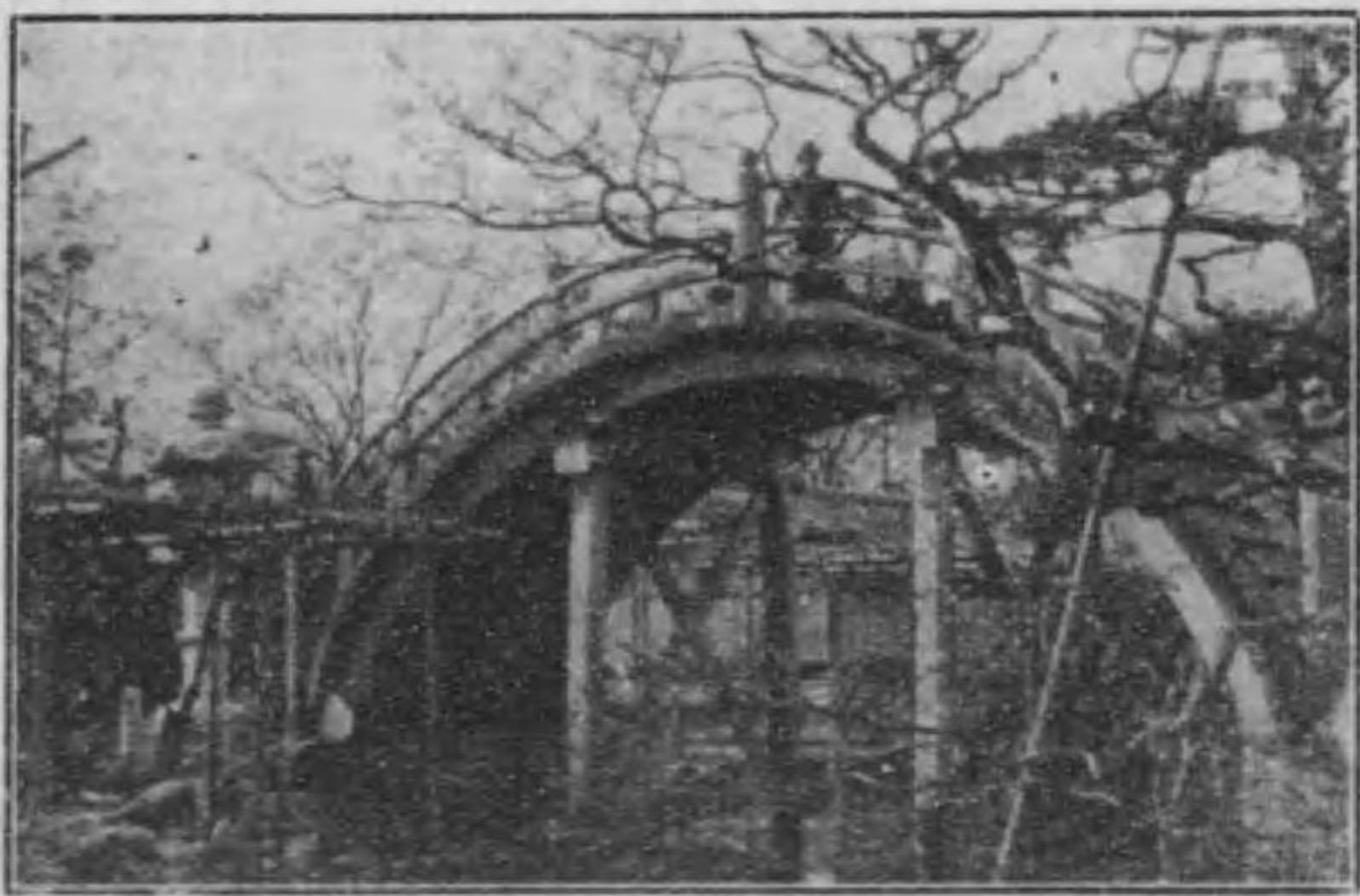
おまゐり

六阿彌陀

(後生願ひの年寄に負けず
てくくくとやつて見給へ)

春秋の彼岸に六阿彌陀詣と云つて行基上人の一木六體の彌陀の尊像を安置したお寺
 六ヶ寺をぐるりと參詣して歩く事がある。お婆さん、是に連れられる娘さん若衆な
 ど胸に頭陀袋を下げ日和下駄に脚半でテク〜と歩いて行く姿を上野附近で彼岸時
 分には見受ける事があらう、是を年寄に負けずに手輕にくると歩いて見るのも面
 白からう、六ヶ寺は散在して無精なものには歩けない路順を考へて上手に廻れば
 一日で時間に餘りあらうとも道草を喰ふ事多ければ廻り残す恐れがある、最初の振
 出を第五番常樂院上野廣小路三橋のそば、茲を起點として次には第四番興樂寺まで
 は上野から山手線電車で田端まで(四錢)行き茲で下車して田端の脳病院の際が即ち
 興樂寺、夫から西ヶ原道へ出で瀧の川聖學院前を西ヶ原農園を左に見て行くと第三
 番の無量寺、本尊は弘法大師作の足止の不動、外に恵心僧都作雷除觀世音などもあ
 る。無量寺からは飛鳥山に向ひ玉子停車場に出で王子と豊島の境なる豊王橋を渡り

一丁目からの處より左に曲れば第一番の西福寺へ出る、茲の阿彌陀如來は一木六體
 とは云へ元木如來と云ひ傳へてあるに依れば第一
 番である所以も分らう、何故と云ふに元木に優る
 うら木なし、とは云へ御利益は六阿彌陀を巡禮せ
 ざるに於ては授け難しとの事である、一番を出て
 荒川の下流豊島川の渡を渡る、其角が「六阿彌陀
 かけて啼くらむほとゝぎす」と詠だのは此邊であ
 らうと云ふ、江北村字沼田と云ふ處で第二番の惠
 明寺に至る、惠明寺の松並木を通り田圃の中を二
 町許で性翁寺に木餘如來と云ふのがある、木あ
 まりと云へば一木六體を作つて尙餘木があつた様
 に見へるが石標には「六阿彌陀根本木餘如來」と
 あるのは大に矛盾して居る、性翁寺から十八町で西新井の大師を次參詣し、さて第



橋 鼓 太 戸 井 龜

おまゐり

六番はと云ふと龜井戸の常光寺で非常に遠い、茲には宜しく文明の利器を應用して汽車に乗る可しで、西新井の厄除大師を拜んだら、七町を徒歩して西新井の停車場へ行き、茲から龜井戸まで汽車（此間九哩餘時間四十六分三等賃金十三錢二等二十錢）龜井戸の停車場を下車したら、龜井戸天神の表門前から三町ばかりして常光寺此間電車と汽車を徐いて道程約二里半遠いようでも左程ではなし、彼岸中は各寺とも鐘を鳴らして道に迷はぬ様にするそうであるから、心丈夫に善男善女の跡に付いて廻れば眞逆に車に轆かれる程の間違もなからうと思はれる。

「六阿彌陀嫁の噂のすてどころ」

武州江戸六阿彌陀順禮御詠歌

- 一番 南のちからまわりはじめしその元木 (豊島) 西福寺
- 二世のうちのふんとなる (沼田) 惠明寺
- 二番 無がなへはみのりのふれでこすぬまた
- 三番 阿りがたや阿彌陀の浄土にしがはら
- 四番 彌なが今此世でたれをまけたげた (田端) 興樂寺
- 五番 陀くさんにとなへしくちのこの下谷 (下谷) 常樂院
- 六番 佛たいをめぐりしまいしかめいどや (龜戸) 常光寺

此の外西方の六阿彌陀と山の手の六阿彌陀と云ふがある即ち、

西方のは

それから山の手の

- | | | | | | |
|--------|-----|----|-------|-----|----|
| 芝西久保 | 大養寺 | 一番 | 麴町十丁目 | 心法寺 | 一番 |
| 麻布飯倉 | 善良寺 | 二番 | 四谷寺町 | 西念寺 | 二番 |
| 芝三田四丁目 | 春林寺 | 三番 | 青山南町 | 龍泉寺 | 三番 |
| 高輪庚申堂 | 正覺寺 | 四番 | 青山南町 | 梅窓院 | 四番 |
| 芝白金 | 正源寺 | 五番 | 青山北町 | 高德寺 | 五番 |
| 目黒 | 祐天寺 | 六番 | 同 | 善光寺 | 六番 |

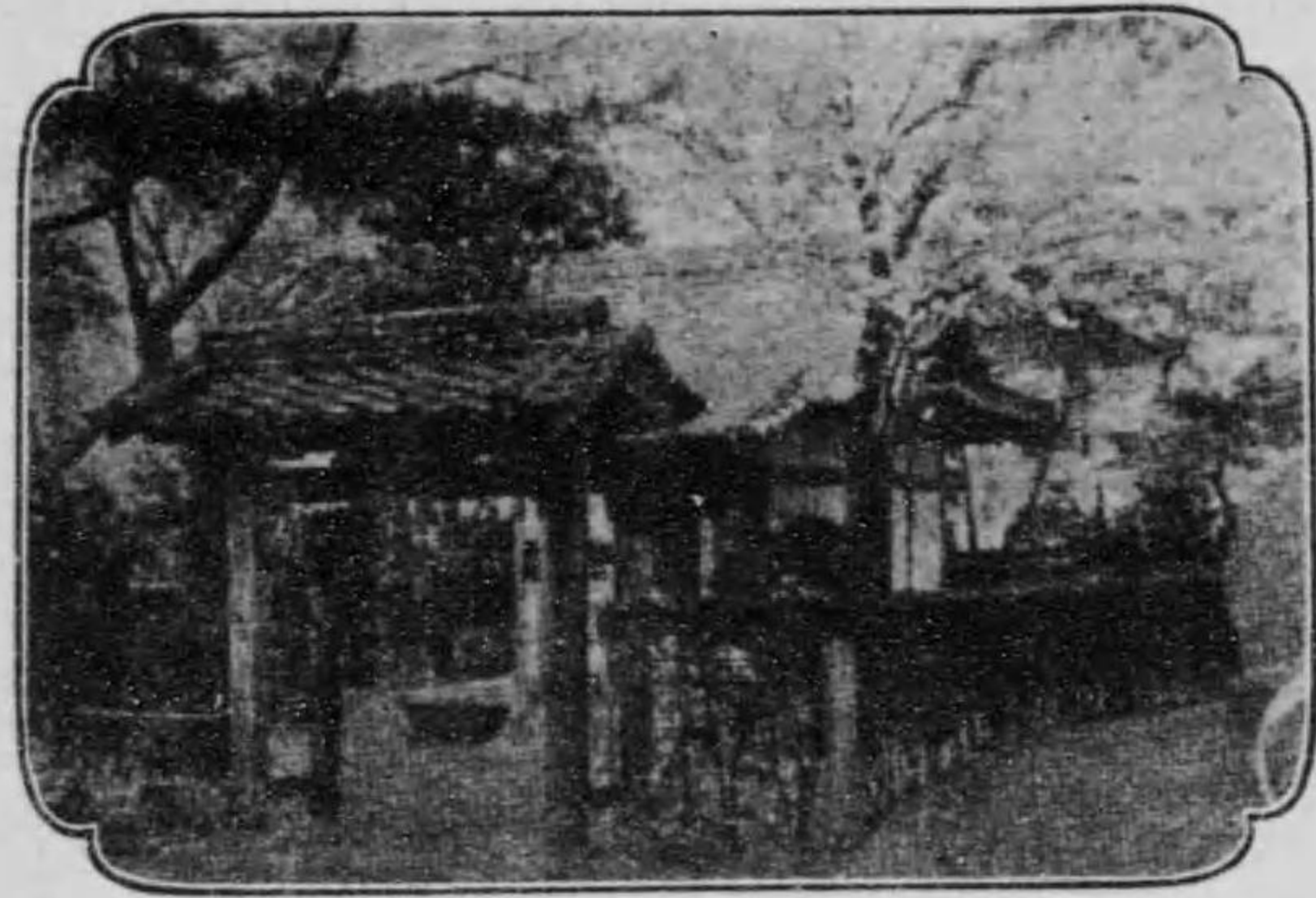
おまゐり

おまゐり
 此れは行基菩薩の作ではないが矢張り昔から六阿彌陀と云ふて居る信心は第二で自然の中を知らずくに運動するは都會居住者の體力養成上缺くべからざる趣味ある面白味である。
 (88)

さくら

熊谷堤

(熊谷寺と薩摩守
 忠度の古跡あり)



さくら

熊谷寺

向島上野飛鳥山に次いで此頃交通の便利に連れて熊谷の櫻は評判となつた熊谷へ行くには上野から熊谷まで汽車、哩數三十八哩時間二時間と廿分、三等賃金六十三錢二等九十五錢、花時には大割引の往復切符が賣り出される、熊谷の町から荒川堤即ち熊谷大堤までは雑作もない、麥隴菜圃の間を堤へ出れば花は長堤十里八重も一重も鬱金も緋も熊谷堤だけで櫻の種類が三千とか四千とかあるとこれ程で盛りもあれば蕾もあり時を定めず次第に咲いて行くのであるから、向島あたりの様に一度に咲いて一度に散るのでなく、眺める時間も餘程

長いと云ふ事、白帆ゆるく上下する荒川の流に向つて大堤の芝生に風呂敷を敷いてゆつくり腰辨當をつかふ時ノンキさ加減愉快さ加減どれ程であらう、花を今宵の主人に頼む太平樂を初め、程好く引返へして熊谷の町に戻り熊谷次郎直實の建立したと云ふ蓮生山熊谷寺に賽して寺寶たる熊谷の遺物を見更に石上寺に有名なる庭園を見て歸る可し、此外此邊には妻沼に齋藤別當の信仰したと云ふ歡喜天、大田村の馬頭觀音などあり深谷で下車すれば平忠度の墓其妻菊の前の墓、忠度櫻などあり。

海水浴

茅ヶ崎

(海傳ひに平塚あり鶴沼あり)

故市川團十郎の名を記憶して居る人は必ず其別荘の茅ヶ崎にあつた事を知つて居よう、茅ヶ崎は別に南湖と云ふ名があつて大磯よりは近く浪も穏で景色の好い處、嬉島の歸帆、柳島の落雁、南湖の晴嵐、鳥居戸の夕照、高砂の秋月、眞崎の夜雨、鶴ヶ峯の暮雪、八雲の晩鐘の八景がある、停車場から松林を抜けて砂地を行く事南へ八町で、海岸に出る、海岸には茅ヶ崎館中村樓、海水館、萬松樓、松旭閣、松本樓等あり、浦傳ひに南へ行けば一里ばかりで平塚の海水浴場がある、茲も浪は平で危険がない上に大磯あたり程に金が費らないと

海水浴



茅ヶ崎の地引網

云ふので相應に客がある、おきな家、旭亭、皆屋等の旅館も比較的低廉にて親切に取扱ふ、馬入川まで行けば鮎獵も出来るし、大磯へも遠くはない、序に此邊の案内をすれば、藤澤驛から僅か二十町で鶴沼の海水浴場は丁度江の島と相對して景色もよし、東屋、鶴沼館、待潮館などは便利の好い宿屋、磯傳ひに江の島へも行かれるし、茅ヶ崎の方へ向つて行けば明治村に明治館と云ふ海水浴場もある、新橋から茅ヶ崎までは哩程三十五哩、時間は約二時間、賃金は三等五十八錢二等八十七錢、平塚までは三等六十四錢二等九十六錢。

おまゐり

鬼子母神

(山吹の里と穴八幡も一つ高田の馬場)



おまゐり

雑司ヶ谷鬼子母神

電車を江戸川の終點で下車して音羽の大通りへ出で西の方へ坂道を上り左りへ左りへと歩く事十二三町で、目白の女子大學の前へ出る、茲から數町で雑司ヶ谷の鬼子母神に行かれる鬼子母神は法明寺の寺内大行院にあつて平素でも可なりの參詣者があるが焼鳥と芋團子は此處の名物である、十月には會式と稱して法華宗一流の南無妙法蓮華經を唱へて講中の繰出すもの其數を知らず萬燈の光太鼓の響で賑やかに夜を徹する程である、夫より南へ山吹の里は昔太田道灌が『七重八重花は咲けども』の歌の意味で賤の女が出した山吹の謎に困

おまゐり

つて閉口した舊蹟だと傳へられて居る、夫から程近き高田の馬場、是は赤穂義士の一堀部安兵衛が叔父の仇を討つたので有名な處水稲荷、穴八幡、さては早稲田大學など見物する處は中々多い。外に戸山の原は春の長閑な時、秋の大晴れの散歩には東京にこない、所があるかと思はれる位だ、殊に冬落葉が風に吹かれて土の香を嗅いてゐると北歐にでも行つてゐるような氣分が湧いてくる。

おみやげ、焼鳥、芋團子、

つゝじ

大久保

日比谷公園に躑躅の多數を奪ひ去られてトラストに壓倒されて閉口したる小商人の如き觀ある大久保は近年少しく寂れたる様なるも日比谷には人形なき爲か、日比谷で見たのでは氣が濟まず、矢張躑躅を茲のものと思はせる大久保は郊外探勝の菜には抜く事を得ざるものであらう、大久保へ行くのは市ヶ谷若くは牛込よりも道あれども普通は甲武線の電車に依り大久保まで行き東へ、四五町戻るを便利とする、躑躅は團子坂の菊と同じく各園競つて花を養ひ珍花奇樹を誇とし、外に團子坂式に躑躅人形を作つて見物料を取つて居る、歸り

つゝじ



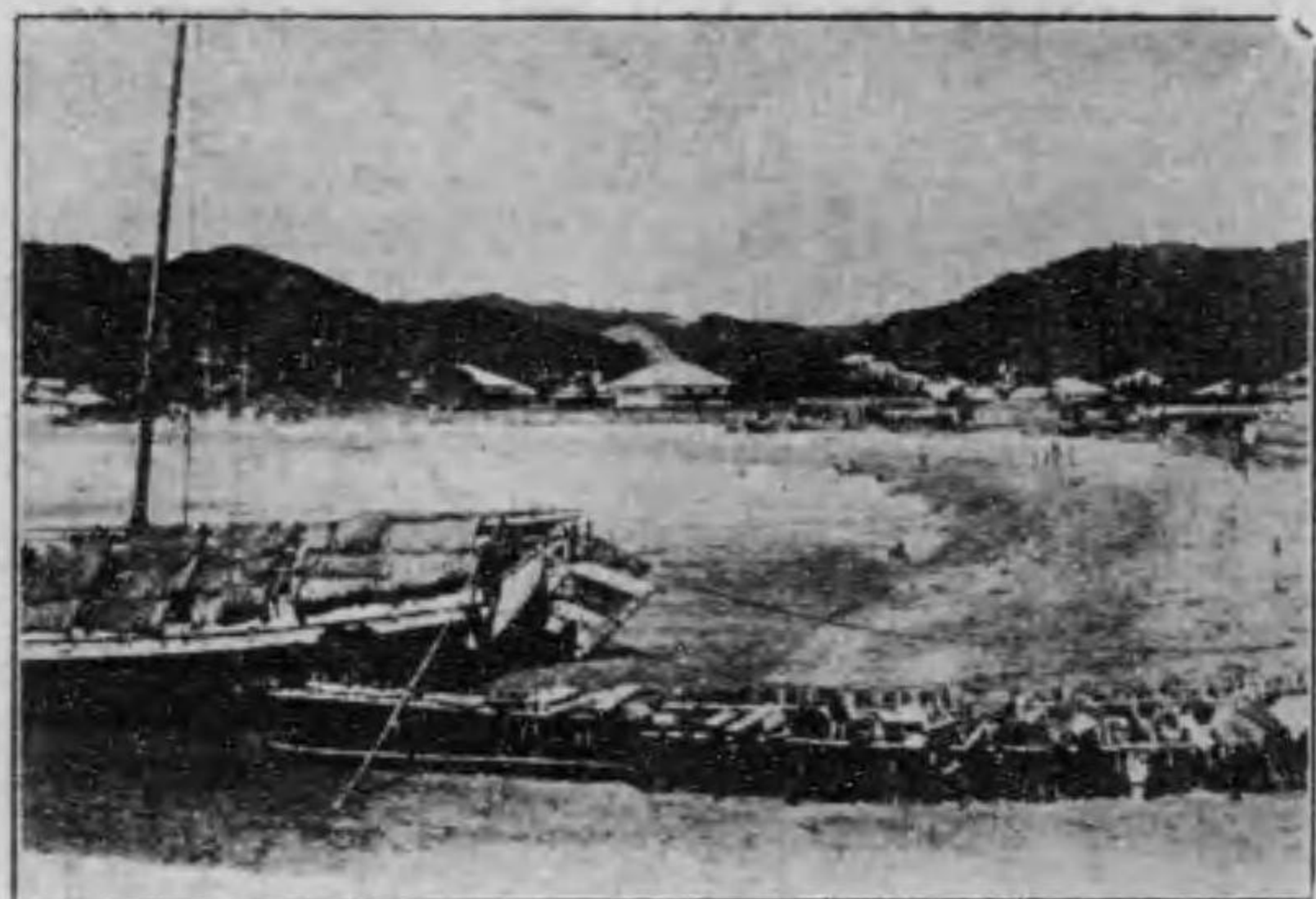
池の現權社二十

つゝじ
には新宿で下車して角筈の十二社を訪ふもよい、茲は十二社権現と云つて熊野から勸請したもので靈驗顯やかなものと云はれて居るが、裏手に池あり老松其周圍に鬱蒼として居る間に茶店と料理店を兼帯の葎簀張軒を並べ梅林、壽などの茶屋があつて小瀧を呼物にして夏は涼み、秋はもみじ、春も冬も相應の出入のある所となつて居る然し食物も普通の値段で少しもぼらないのは感心だ。昌平橋から大久保まで六錢、飯田町から五錢、新宿からは昌平橋まで五錢。大久保停留場の次ぎの柏木には華洲園と云ふ中々廣濶なダリヤの名園がある、その外春夏秋冬ことに花が絶へない、かつ停留場附近には明治大學の運動會があつて野球の練習が癡狂を極めてる。

海水浴

葉山

(小坪の古戦場六代御前の墓ある櫻)



神明戸森山葉

小説不如歸で名高い森戸の濱、萬葉集に『あしかの秋の山』の歌ある大楠山、其他鎌倉時代の不朽の歴史とも見る可き名所舊蹟に富む逗子葉山は新橋から逗子まで三十三哩程汽車賃は三等五十五錢二等八十三錢、横須賀行では其儘、國府津行其他は大船で乗換へ、二時間と十分ばかりで行ける、逗子の海岸は停車場から西南に十町許り、西には相模灘を隔て、伊豆相模の遠山、中に白扇倒懸の景色を眺めて、水は清し浪は静なり湘南第一の好風景であらう、宿屋には養神亭、日陰の茶屋柳屋等あり、名所舊蹟の探ぐる可きは北條早雲

と戦ひ敗軍の末々に遁れて自殺せる三浦道寸の墓ある延命寺、平の維盛が遺子六代の墓ありと云ふ櫻山、島山重忠と三浦義澄とが戦ひし小坪の古戦場等あり、逗子の停車場よりは南の方約一里と半ばかりで葉山に達する、海岸のそゝる歩きを續けて逗子より葉山に向へば先づ名島の勝景を海に見松原續き、海中に突出せる長者ヶ崎に到る可し、葉山御用邸前を過ぎ長者ヶ崎に着く旅館長者園に到る、長者園の樓上より見れば江の島を點景に富士を見て相模灘一帯は盆景の如し、東には秋名山即ち大楠山あり、高さは七百餘尺、登れば風景は天空海濶更に一段の妙を展じ來り壯絶快絶を叫ばざるを得ず、逗子驛の東は田浦驛、茲にも海水浴場あり、其次は横須賀驛にして日歸りの旅としては兎も角、閑あらば便を求めて軍港一覽も有益なる可し。

美しきくらげ浮きたり春の海

子規

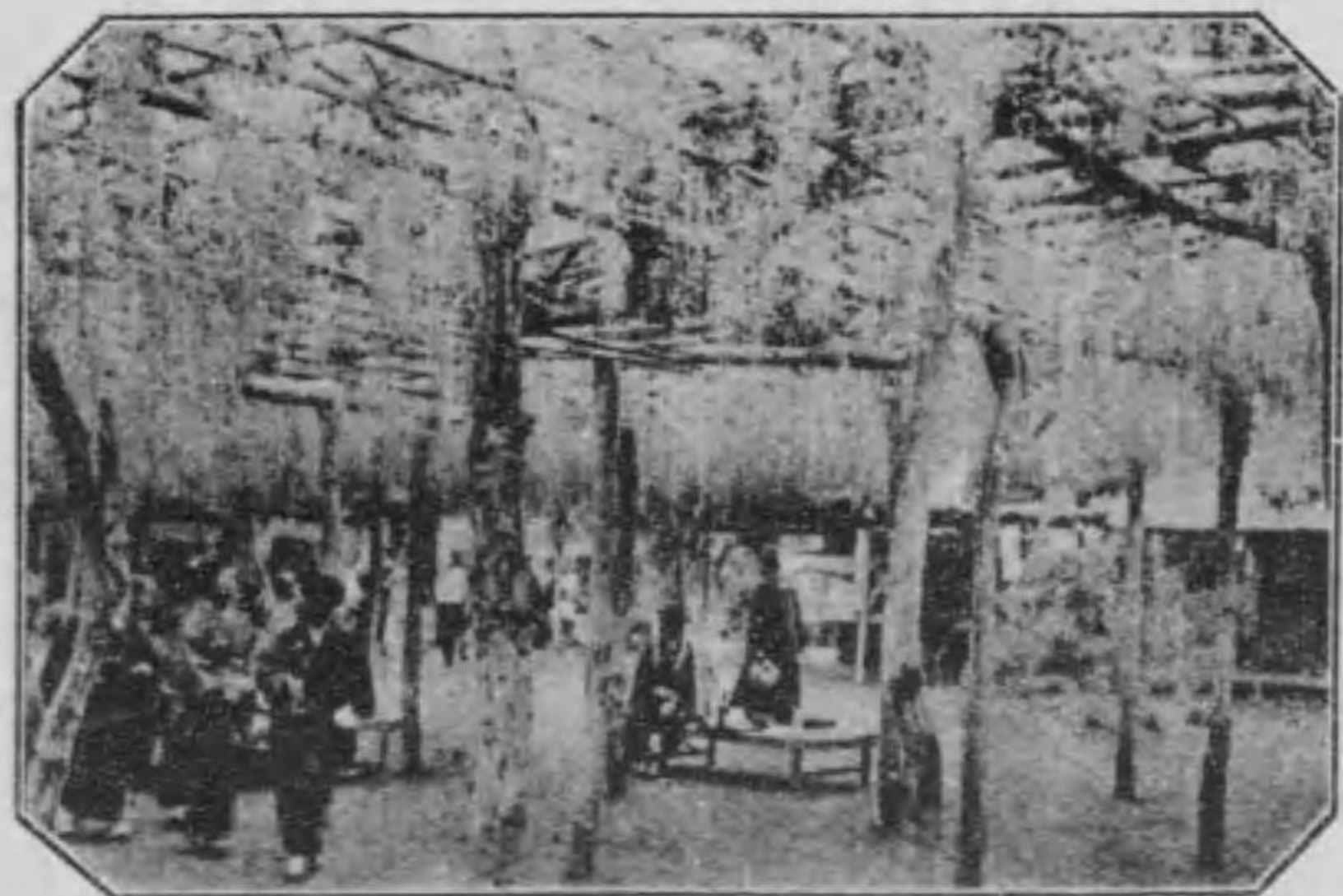
ふぢ

粕壁

(一房五尺もあり、一株五十坪に餘る藤の花桃またよし)

浅草驛から東武線の汽車に乗つて粕壁まで行く、總武線に乗つたら龜井戸で乗換になる、距離二十哩賃金は三等三十六錢二等五十四錢、一時間と十數分で粕壁へ着く。粕壁は春日部で東鑑に春日部甲斐守實景が此地に起り三浦泰村と相謀つて北條氏を滅さんとしたと出て居る、春日部を粕壁に誤り傳へたのであらうと云ふ、粕壁でおかしいのは『彼の業平中將の東下りに名にしをはいざ言問はん都鳥』と詠だ隅田川の渡は現在の向島では無くして此粕壁より數町内枝村字梅田と云ふ處だとしてある、其處には川は全くなく唯小さい池

ふぢ



藤の島牛壁粕

と堤の形のものがあつて梅若塚とさへ云ふものもあるけれども、業平朝臣もいざ言問はんの都鳥も埼玉縣への管轄争ひは願下げであらう、有名な藤と云ふのは停車場から僅に十六町人力で行く事が出来る香松村「牛島」と云ふ處にある、幾百年とも齡を知られぬ古木で一本の幹より蔓の延び廣がる事五十餘坪、夫ばかりではない、ぶらりと下がる藤の花の穂が、出来る悪い時でも三尺より短からず、出来の好い時には、五尺位まで延びて地を匍ふ程の事があると云ふ。別項越谷ヶ中にある久伊豆神社の藤花と共に關東に於ける藤花の二幅對である。

停車場から十町、丘がめぐりめぐる間、松の色翠にその麓を桃が艶に咲く底から鶏犬相和して夕餉の煙りがある、越ヶ谷の桃に飽いた人は一日此處に来て清興を専らにするがい。

つゝじ

館林

(茂林寺の文福茶釜をみて雷嫌らふ人は雷電神社へ)



館林茂林寺

館林の躑躅のある所は、花山とも云ひ、また躑躅が岡とも云ふ、口碑によると古し一婦人が死な、くつてはならぬ事があつて此の沼に身を投げた。そうすると里人が此れを吊ふて躑躅花一株を松の樹の下に植へたのが抑もの初まりだと云ふ、然しこんなには澤山あるのは新田義貞の妃勾當内侍遺愛のものを新田郷から寛永年中に、此處に移植したものだとも云ひ傳へられて居る、兎に角に躑躅として宇内第一と云ふてもよい、浅草驛から四十五哩餘二等で賃金一圓廿二錢三等で八拾一錢先づ停車場を出て城址をみる。

館林城は一名を尾曳城とも云ふて天文元年に赤井山城守の築いたもので、以後三百五十年明治四年秋元但馬守の時に廢城となつてから今は、中學校の敷地となつて居るにすぎない、城址から濠を隔て、向ふ側に躑躅が岡がある、老幹と云へは概ね一丈餘、それに若木が連り、高く低く繁つて花季満山絢爛として錦繡を掛けたる如くそれが、側の沼に映じてその美觀極まりなし、躑躅が岡より廿五町、六郷村字堀工村の「茂林寺」に有名な文福茶釜がある、昔嘶して行くと文福茶釜と云ふけれど、その本尊の茂林寺へ行くと分福茶釜と云ふて居る、茂林寺は境内が廣くつて、周圍が笹藪だから、今でも狸が住んでやしないか思はれるように、静寂な寺である。歸りには十五町で、利根川べりに出る、遠く上野信濃の山々雲表に聳ゆる富士山を見點々たる白帆を敷へて川俣驛から歸るがい、雷さまの恐はしい人は、「雷電神社」へ御參詣して、身の冥福を祈るがよい、宮は館林から二里、古河街道にある、宮の創立は推古天皇の時であるから古い點から云へば隨分古るものだ、神社は内務省の特別保護建築物とはなつてゐるが、その取り立てて云ふ程立派なものではない、

唯だ板倉湖畔の半島にあつて漁家點々、遙に兩毛の群山をみる邊り實に捨て難い、名は雷電神社と云ふが實は雷除けの神様でなく雨乞いの神で近在に名高い。近年館林驛附近六百町の大官林を開放して、そこら一面に叢生する初茸を自由に取らせる、都下に此れぞと云ふて茸狩りによい場所がなくつて秋晴れの好天氣に遊山がてらの茸狩と云ふ大自然を知らぬ都會常住者の爲めに官林を開放するなどは實に目出度い御代と云はねばならない、それに加へて栗が隨分ある、五合や一升拾ふのは譯けはない。

ふ ぢ 龜井戸

(柳島の藪玉と)

本所停車場前より東へ十數町、江東橋の終點から
 なら七八町、南葛飾郡龜井戸村に龜井戸天神社
 あり、一月には初卯の日には藪玉を賣り、開運、
 火防、雷除の御札が出て參詣人持に多し一月廿五
 日には饗替の神事あり、此の神事は筑紫太宰府の
 天満宮のを移したもので、昔しに變らぬ賑やかさ、
 唯だ變つたのは未明に參詣して行逢ふ同士が携へ
 て行つた饗を替へたのであつたが、野暮な人々が
 風俗上の取締だと云ふてそれは禁じられて唯だ前
 年のを宮に持て行つて替へてくるのである饗の疎
 刻が如何にも古雅で掬すべし、尙ほ節分の日はこ



神天の戸井龜

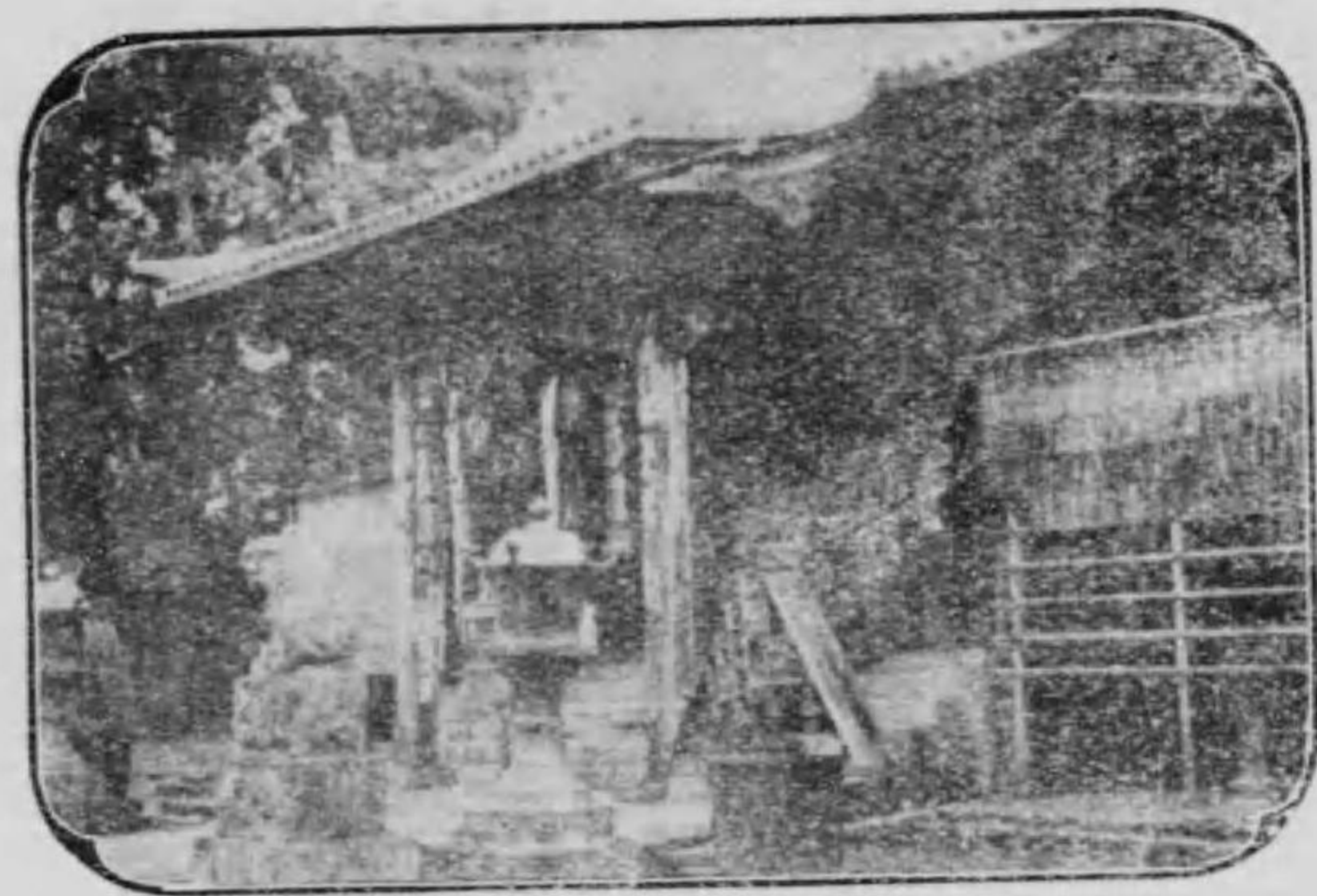
れも太宰府の古事に倣ひて追儼の神事がある即ち赤鬼青鬼退治の古式で北風吹く寒
 天にも參詣者が堂に溢ふれる。二月には社後に數百の梅樹芬芳を發し杖を牽く人絶
 えす、天神社の縁起はと云ふに太宰府の僧靈夢を感じ飛梅の幹をもて菅公の像を形
 り是を守護して江戸に出で地を下して龜井戸に天満宮を勸請したるもの、境内廣
 からねど壯麗、社殿廻廊美しくしき前に池ありて、太鼓橋を架け、池には紫と白の
 藤咲き廣がりて池上に其色を映じ美しく事限りなし季節は變れども天神社より遠か
 らず俗に「萩寺」の名ある龍眼寺あり底上萩非常に多く袂すしき秋の朝露を踏み
 分けて尋ぬるもよく、月ある夜蟲の音尋ねて訪ふもよかる可し、其又川向ふには「白
 蛇の出るのは柳島」と詠はれし柳島の妙見堂あり、境内に古松あり、其幹の洞穴に
 白蛇が住み居り時々人目に觸れる事もあると傳へられて居る。橋本の板前漸く老
 いて龜井戸田圃にや煙突が増して三味線の音が朝から鳴つてゐる。

おみやげ、葛餅、張子の龜

おまゐり

目黒

(權八小紫の比翼塚甘
諸先生の墓もあり)

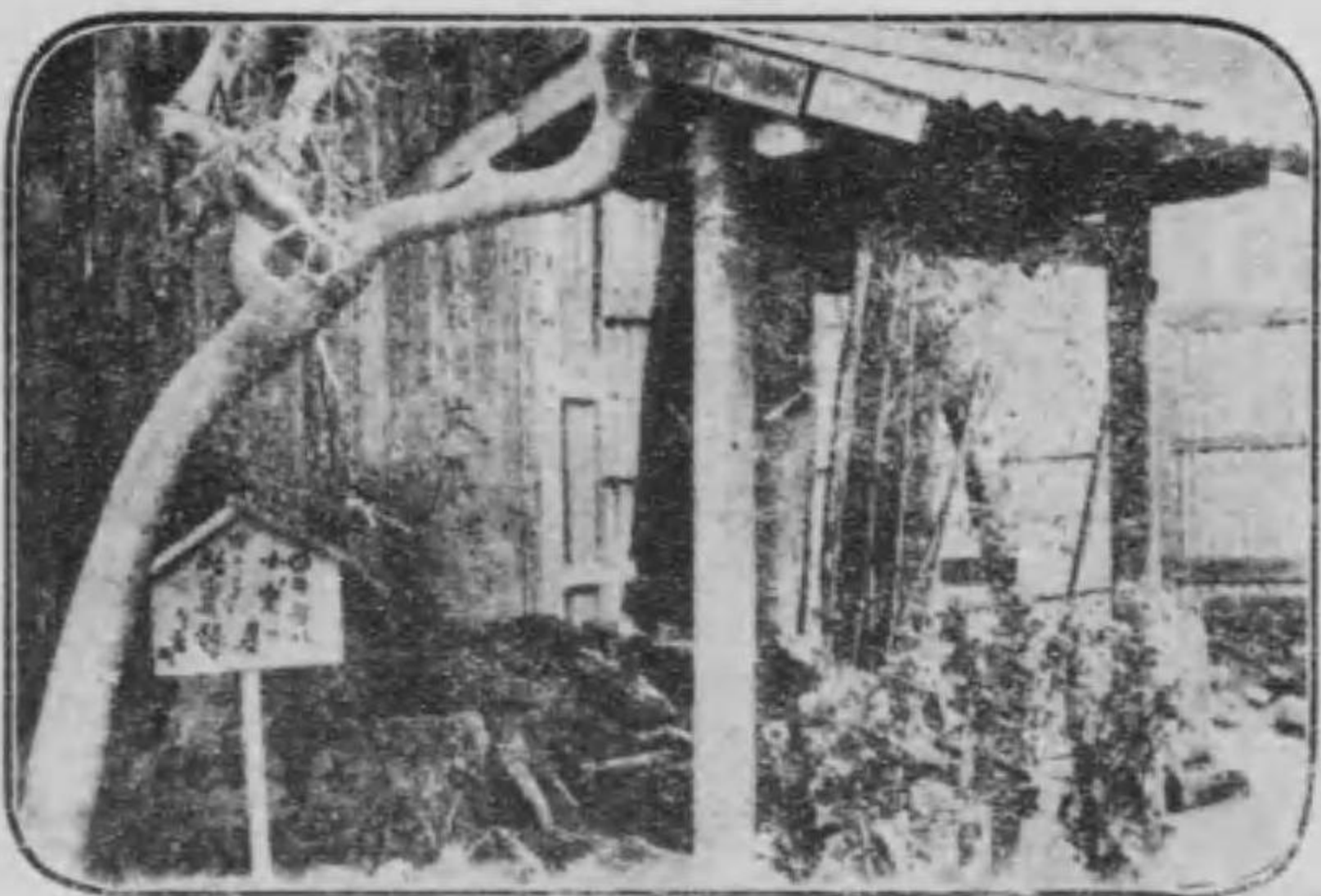


目黒不動本堂

市内電車ならば目黒まで山の手線電車なれば、上野からでも吳服橋からでも品川からでも又飯田町牛込邊からなら代々木で乗り換へて行く事が出来る、目黒の停車場を出て右の線路の上の橋を越へると真直にだらりと降り坂、是を下り切つて約七町、不動院に着く、寺號は龍泉寺大同年中慈覺大師の草創であると云ふ、仁王門を入ると左に獨鈷の瀧あり、石段を上れば本堂、本堂の後には大日堂、虚空藏堂、鬼子母神堂などあり、本尊は不動なればとて目黒の不動とまで名を高くしたる筈なるに實は不動ではなくて日本武尊が野火の中

に立ち草薙の劍を掲げで立ち給へる御姿なりと云ふものもあり、外に境内に甘薯を栽るを關東人に教へて饑饉の備をなさしめし甘藷先生青木昆陽の墓あり、門前には料理店大國家、角伊勢、内田家橋和屋等軒を並べ春は竹の子飯秋は栗飯に客を呼ぶ、夏は境内の不動瀧がい、瀧はそう大きくないが水の清いと冷たいのが此の瀧の特色である、かつ老樹が多いから瀑聲四隣に震ひ夏尙寒き思がするすぐ隣りに 苔香園と云ふて四季折り々の花の園があるが就中萩を以てその名が響いてゐる一日の散策には手頃の處なれば參詣人は中々に多し門前より右に半町ばかりの處へ權八と小紫とを葬れる比翼塚あり、北へ二町にして日本武尊を祀し大鳥神社あり毎年十一月酉の日に酉の市あり、

おまゐり



目黒比翼塚

祐天寺

おまゐり
 は目黒不動院より約十町、本尊は恵心僧都作の阿彌陀如来にして其前に祐天の像あり、祐天上人は彼の下總埴牛村與右衛門の妻累の怨靈を解脱せし人、其時祐天が着せし衣女院より賜はりし蜀紅錦の袈裟等寺寶として珍藏し蟲干の時參詣人に拜觀を許す、上人の墓は本堂より左の林中にあり、祐天より更に西へ一里許にて奥澤の九品物あり、本堂に聖徳太子作の阿彌陀佛を安置し其左に上品中品下品の三堂あり一堂に如来の三體あり是を稱して九品物と云ふなり、毎年四月不斷念佛を修行の際には近郷近在よりの信者澤山に集り東京より態々出向く信心者も甚だ多し。山手電車を目黒から二つ先の大崎停車場近くに妙華園がある、四季とりくくにい花が咲いている。

目黒
 瀧の秋永代垢離の碑もたりぬ
 六花
 爐開や江戸の圖で見る目黒山
 貞佐

もみぢ

海晏寺

(谷垂の伊藤公の墓東海寺は澤庵の押石)



品川海晏寺紅葉

「アレ見やしやんせ海晏寺」は紅葉では高雄龍田も及ばないと云ふ名所、品川八ツ山より京濱電車に乗り鮫洲(片道四錢)まで乗り同所に下車して本街道に出で少しく北へ戻るとちきにある大覺禪師を開山として北條時頼が建立したものの壯嚴なる伽藍は昔、火災に逢つて焼けた儘假堂のみである、本尊は鮫の腹より出た觀世音で、此鮫の揚がつた濱の名を鮫洲と云つたのが今も地名に残つてゐる事である、寺内の丘陵一帯に楓樹多し、一度『林間暖酒』の風流でもなく無闇に伐採したるも近年楓樹を澤山に植付たれば、紅楓の間遙に品川沖を

眺むるの光景絶佳である、境内に岩倉具視の墳墓あり歸途青物横町を左に十數町にして伊藤公の恩賜館、谷垂の墓地を訪ひ更に本道に戻り千體荒神に詣でるが、
 「荒神様」は何でも開運の事なら聞いて下ださる神様であるが、何か御願ひ申した
 らその歸りには決して後を振り返つて見てはいけない、もしも振り返ると運を取戻され
 て仕舞ふ。信心の人が中々に多いが其の内でも三月と十一月には特別に賑ふそれか
 ら北番場の品川神社の前を過ぎ左に折れ、は「東海寺」に至る、東海寺は有名なる
 澤庵和尚の開山三代將軍の建立にして維新の際殿堂、悉く火災に罹り今は坊中の春
 雨庵を本堂として釋尊の像を安置しあるのみ鐵道線路を横ざり西手墓地の中に開山
 澤庵和尚の墓あり八尺許りの天然石を置く、是は澤庵漬の押石のつもりなる可し
 と云へども餘り穿ち過ぎた話なり。

東海寺

木枯や一字不説の松のこゑ
 澤庵をやらじと門の紅葉散る

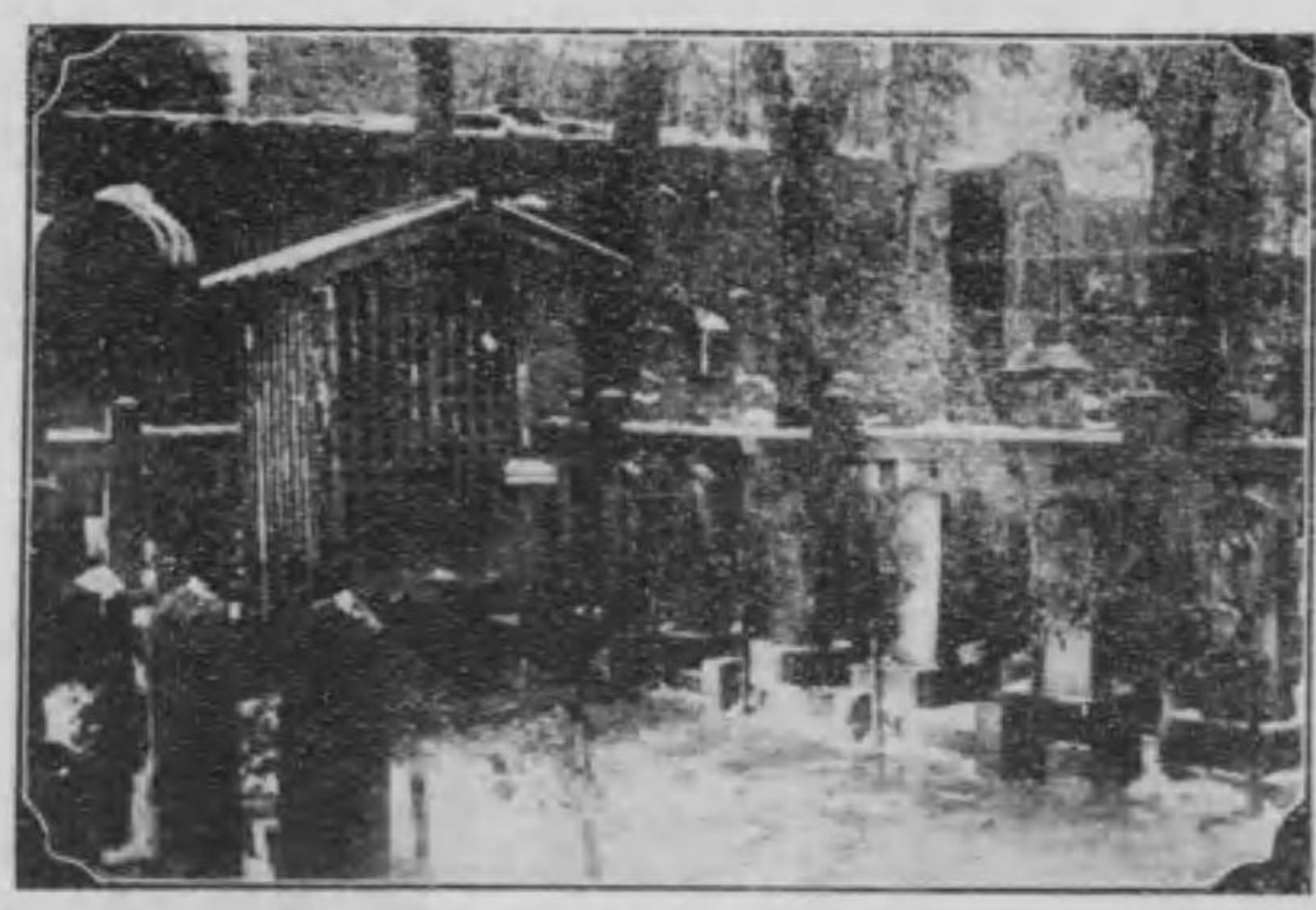
墓 太
 几 董

おまゐり 泉岳寺

(師直首洗の井戸と義
 士の遺物を見落すな)

『四十七士の墓所』と鐵道唱歌にある、東京名所の
 随一、高輪の泉岳寺へは市内電車品川行に乗りて
 泉岳寺前の停留場下車、大道より右へ這入れば
 兩側は茶屋料屋軒を並べ、直ぐに萬松山泉岳寺
 である、同寺は曹洞宗の寺院として有名であつた
 が、更に赤穂四十七士の墓地がある爲めに何人も
 殆ど知らぬ者はない程になつた、元祿十四年十二
 月十四日臥薪嘗膽の境に出入する事一年有半で漸
 く優曇華の花咲く春に逢ふ心地、思ひの儘に仇吉
 良上野介を討取り四十七士悉く切腹して今は皆一
 基の墓石、内匠頭長矩の墓石に近く列を正して相

おまゐり



泉岳寺大石良雄の墓

おまゐり

並び苦蒸したる石碑の下に永へに眠る忠魂は生けるが如く當時を人に語つて惰夫を
して起たしむるの概がある、境内首洗ひの井戸は、水清冽雪の朝の寒さを思はしめ、
遺物陣列所に至つて兜頭巾、鎖帷子、槍太刀を見ては更に歸つて義士傳を讀む事一
回ならざるを得ざる心持がする、墓みちの左側に江戸の大儒龜田鵬齋先生の赤穂義
士之碑が先年『日本及日本人』政教社同人の首唱の下に再建されてゐる。

おみやげ、義士盃、義士笄

石寒し 四十七士か霜柱

ものゝふの骨芝染る砌かな

几 蕭
墓 太

ゆ さ ん

金 澤

(金澤文庫の跡あり 泥龜に有名の牡丹あり)

湘瀟八景を寫した金澤八景は鎌倉時代には訪ふ人も多かつたらうが今では寂しい事
である、其第一の原因としては交通機關の整つて居ないのを數へると今の人達の
採る旅行の趣味とは金澤の風光が適合しない爲めであらうかと思ふ、金澤へは横濱
まで汽車、横濱からは石川町へ出て杉田村を通り約三里、人力も通じるが長汀曲浦
の間を行くのであるから徒歩がよからうと思ふ、やがて金澤へ着くと云ふ處の時
巨勢の金岡が八景を寫そうとして筆を投じたと云ふ筆捨山、其山に能見堂あり八景
を一眸の内に集めて風景絶佳、山を下れば既に金澤の町二三町にして瀬戸の橋に到
る、夫より瀬戸明神社に詣で、海中に突出したる處に江州竹生島より勸請したる辨
才天祠を拜み古刹金龍院に達す、此地は金澤の八景、瀬戸の秋月、洲崎の晴嵐、小
泉の夜雨、乙船の歸帆、稱名寺の晚鐘、平瀨の落雁、野島の夕照、内川の暮雪、の
中央に位し境内山あり飛石山と云ひ、絶頂は四方展望に宜しく八景に勿論能見堂を

ゆ さ ん

も見る事を得ると云ふので九覽亭と云ふのである、宿屋としては東屋千代本の二軒名あり、能見堂の筆捨山の下に稱名寺あり、北條顯時の建立にして運慶作の佛像二體の外寺寶願多し、金澤文庫跡今は田となり石柱に金澤文庫舊蹟と記されたるが立つばかり心細き事限なし、九覽亭より遠からず泥龜に牡丹の名所、東京横濱邊からは態々是をのみ見物に来る人もある、牡丹の名所であるから、否か、金澤は故伊藤公と關係淺からざる土地、茲に書くよりは同地の旗亭に公の醉餘に成れる額面の下でゆるくと聞いて見玉へ、何にさそんな洒落所が大日本帝國憲法は實に此地で編まれた日本憲法の出生地である、日本帝國を忘れない限り何人も此の地を忘れてはならない。

金澤能見堂

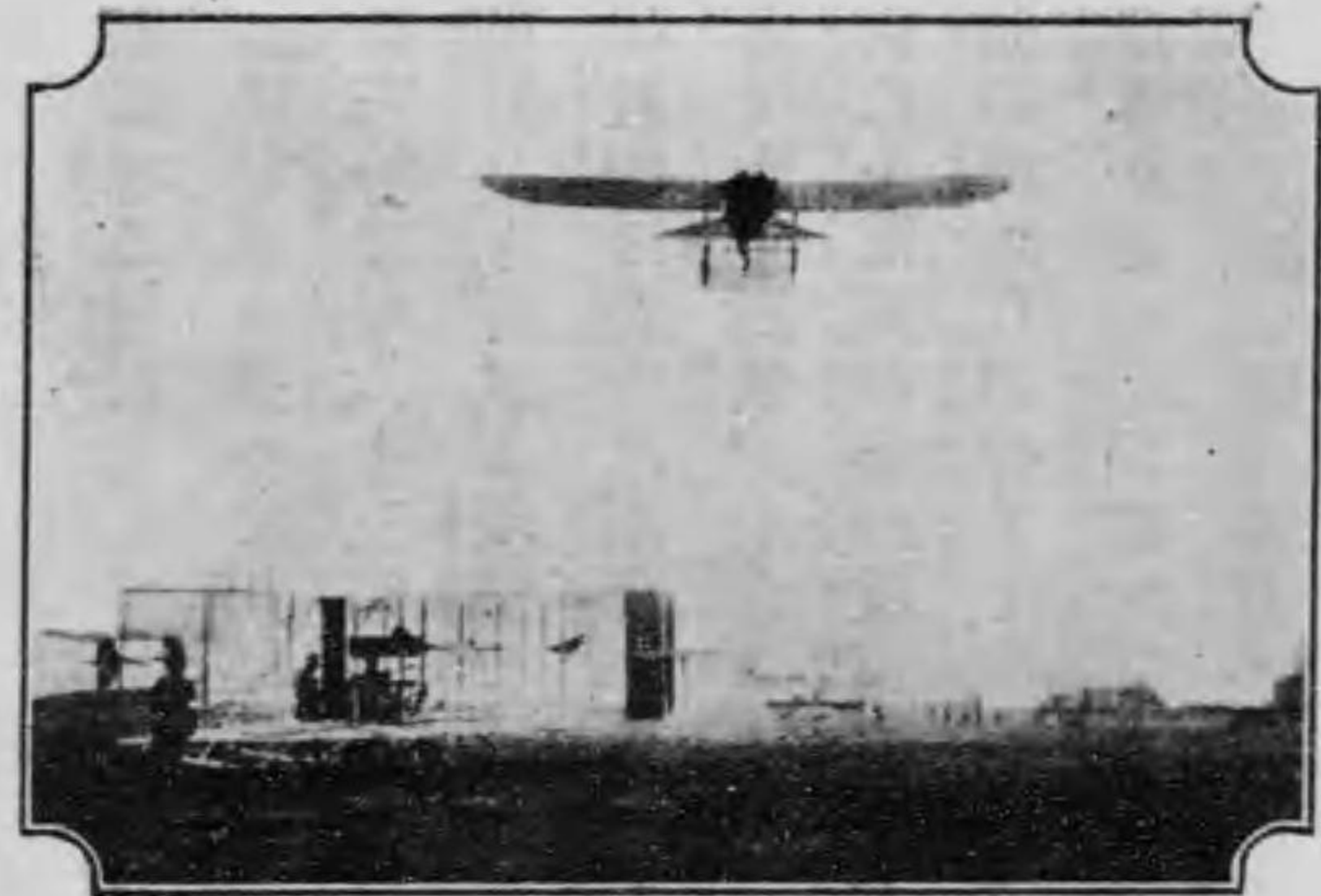
能見堂 夢つく僧を景色かな
八景のうち二つ三つ時雨けり

其角
也 有

おまゐり

喜多院

(道灌の城跡と二芳野神社)
飛行機の飛び廻る所澤



機行飛の澤所

喜多院は川越町の大字小仙波にあり、上野寛永寺と同じく天台宗で、開祖天海上人の入寂の地で慈覺大師の創建に掛るものである、で幕府時代にも寺格も高し待遇も非常に好く寺領は七百石、寺の境内の廣さ四萬坪と云つた大したもの寺の内に東照宮を祀つて壯麗な社殿を設けてある程の處である、近年盛に参詣者あり、序に川越町の太田持資入道の築きし城跡を見物し、城の北隅にある三芳野神社にも参詣す可し、神社は持資が築城の際守護神として勸請せしものなりと傳へられ素盞鳴尊稲田姫を祀りたるもの、本社拜殿、神樂殿等頗る

おまゐり

おまゐり

壯嚴の建物であつて、境内に櫻多し、喜多院の境内にも櫻多ければ先づ花見かたがたに來るを好しとす、道順は飯田町より甲武線汽車に乗り國分寺にて川越鐵道と云ふのに乗換へて川越まで行く、哩數は凡そ三十五哩にて、時間は二時間半、賃金は三等にて六十三錢、二等は九十八錢、尚ほ上野より大宮に行きそれより川越迄電車でも行ける所澤には吾が陸軍の飛行場あり毎日飛行機の飛んでゐる様誠に天下の壯觀である。所澤は飯田町から二十三哩時間は二時間、賃金は三等で四十一錢二等で六十四錢、尚ほ上記川越の仙波沼から客を乗せる荷船が出る、出發が日暮れて一夜櫓の音と船頭の得意な追分節でも聞いてゆる／＼、早朝淺草の花川戸に着く、此れも中々古い趣味があつて面白い。

(116)

おまゐり

東京の八十八ヶ所

(東京市郡に亘る名所と靈地)

弘法大師が開ける四國の八十八ヶ所は靈場巡拜の志はありても容易には行かれぬ所なり、是を悲しみ關東の人否、東京の人にも八十八ヶ所詣させ度しとて、牛込辨天町の多聞院の僧正等と云ふ人今より百五十年前、四國の四百五十幾里あるを廿餘里に縮め御詠歌も其儘に是を各寺に割り付けて拵へたるものなり、されども番號は順にはよらず、飛々に道順を量つて詣るより仕方なし、辨天町、多聞院は第三十一番、茲には八十八ヶ所草別の正等の墓あり、夫より二三町の千手院は第廿九番なり茲には大師堂並に大師の石像八十八體を

おまゐり



音羽護國寺

(117)

置き是に四國八十八ヶ所の寺號と地名及び其距離を記し順次に禮拜して八十八に及べば東京は更なり四國の八十八ヶ所に廻はるも同然、夫と同じ利益を受く可しとは手つ取り早き好き工風もしてあるものなり次は牛込筆筒町の南藏院は第廿二番、千手院より南へ市ヶ谷柳町に光徳院は第五十八番津の守阪を上り四谷の通りに出天王横町の右側に第廿一番東福院、左側に第十八番愛染院あり、愛染院には塙保己一の墓あり、愛染院の隣四谷寺町に第八十三番蓮乘院、第三十九番眞成院、南へ南寺町に第四十四番の顯性寺あり赤坂區には一木町に威徳寺あり第七十五番の札所とある深川公園永代寺は第六十六番、同じく高橋を過ぎ彌勤寺橋を渡れば第四十六番の彌勤寺あり、兩國橋の東回院の南に大徳院は第五十番

市兵衛町に第六番の不動院、愛宕山の下に第六十七番の眞福寺と第二番の鏡照院とあり、飛で東橋は越前堀の圓覺寺は第十三番、深川へ渡り福住町に第三十七番萬徳寺、龜住町に第七十四番の法乘院、此寺には大師堂の外に閻魔堂あり、も一つ曾我の五郎の足跡石と云ふものあり深川區猿江町に第七十三番覺王寺、序に浦里時次郎の墓ある慈眼寺、龜井戸停車場側に第四十番普門院、境内に將軍鷹狩の際腰を掛けられしと云ふ松あり、是より兩國は薬研堀にも第廿三番の不動堂、是にて三廻はり、早稲田大學に近き下戸塚の觀音寺第五十二番、音羽より小石川茗荷谷へ下りる所に第七十九番の専教院、本郷仲町に第八十六番の常泉院、本郷元町二丁目に第卅四番の三念寺、第卅二番圓満寺は本郷の通り、新花町に第廿八番の靈雲寺、下谷南稻荷町の第七十八番成願院、淺草には松葉町の法光院が第十九番、永住町の吉祥院が第六十番同密藏院が第四十一番、觀藏院、龍福院、延命院が第四十五、第八十二、第五十一番なり、南松山町に第六十一番の正福院、第四十三番の成就院、第六十二番の威光院と第七十二番の不動院は榮久町にあり、戻つて上野より谷中に出で多

寶院は第四十九番、自性院は第五十三番、第五十五番長久院、第六十三番觀智院、



新井の薬師

武線中野に近き新井の薬師と云ふ梅松院が第七十一番、茲より北八十町には下池袋

第四十八番の禪言院、更に七八町にして第二番の東福寺、東福寺より西へ十三四町にて第十五番の南藏院、夫より南へ十町餘にして第十四番は下鷺宮の福藏院、夫より谷原の長命寺は第十七番、下石神井禪定院は第七十番、同じ三室寺は第十六番、是にて八十八ヶ所全部おしまいなり、此廻はり方は遊行記の著者が廻りたる道なれども、同じ所を二度廻はりたる所もあり、試みに地圖を開きて、八十八ヶ所に朱點を置き道順を研究し、放れたる所は乗り物の便利を考へて巡拜せば急げば二日、三日ならばゆるくと巡禮する事を得可し、區別すれば郡部に三十一ヶ所、市内に五十七ヶ所、うまく廻れば八十八ヶ所のみならず、東京の名所は悉く序に見物する事が出来るなり。

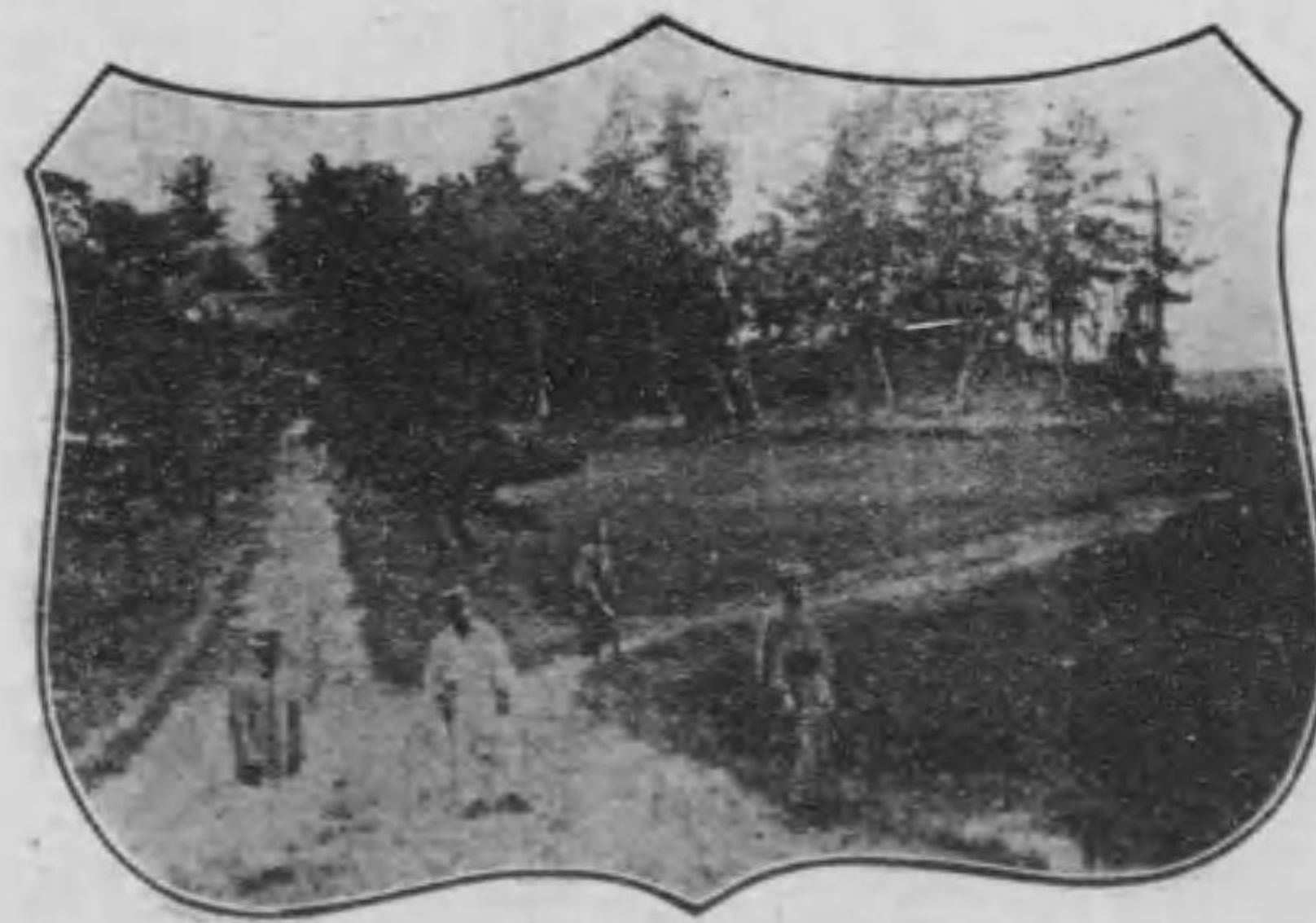
おまゐり

おまゐり

布施と子の神

(手賀沼の漁船と利根の白帆)

布施の辨天 は手賀沼にあり、手賀沼へ行かんには上野より海岸線の汽車に乗る我孫子に下車、(時間一時間と十分、三等にて三十五錢)下車すれば直に、手賀沼なり、沼は長さ四里幅半里、鰻を産し冬は鳥類の着くもの多ければ漁獵ともによるし、東へ八町許芋畑と豆畑の間を行つて小高い松林の丘がある、その丘にあるのは 子神薬師で男女とも腰すり下の病に妙があるとて信仰の老若四時絶へずかつ眺望がい、眼の下には眞菰一杯の手賀沼が繪のやうで、湖上の漁舟點々指呼すべく西へ三十町行けば布施の辨天に達す此の祠は



布 施 財 天

不忍、江の島と共に關東の三辨財天と云はる、名祠で口碑の傳ふる所に依ると同地はもと沼地で大同年間紅い龍が土魂を手に捧げ持つて顯はれ其土を投げ付けたるに忽ちこの島地となつたとか、島の上には一體の辨財天ありて之がために祠を立て堂は山の上になり、境内に大師堂ありて相馬八十八ヶ所の一となり居れり、山より利根川へは僅に十町樹間より白帆の去來を眺めて見晴よく、右は駱駝の背の如き筑波の峰を望み得山より南は櫻山と稱し櫻樹多く又楓樹もあり、春も好く秋も好き處

おまゐり

えんそく

飯能

(能仁寺の十六羅漢子の権現の深山幽谷)

飯田町驛より汽車に乗り國分寺にと乗換へ入間川に下車す、(時間二時間、賃金三等五十二錢)入間川より飯能まで鐵道馬車一時間にて着す、飯能の能仁寺と云ふは上野寛永寺に關係深かりし故か上野戰爭に幕兵敗れて走れるもの逃れて此寺に籠りし爲め、官兵襲撃し、飯能の町は焼かれ、能仁寺も公辨親王の筆に成る扁額を殘して皆焼拂はれたれば、今は凡べて新らしきものなり、寺の山上石の十六羅漢あるを以て、羅漢山の名ありしが、先年主上の行幸ありてより天覽山と名を更む、寺は山の中腹にあり、山は秩父の連山を脊に脚下に飯能の町を眺め風光好し、能仁寺の谷後に穴あり、立つて歩む可し、穴は向ひの山に達するものにして幕兵の茲より逃れし跡と傳へらる、飯能の町より名栗川の岩根橋を左に、子の権現に向ふ、途中樞の古木の古碑を挾めるものあり、飯能より約二里、名栗川に次ひで中藤上郷に至れば、茲より子の権現まで六十六町と記さる、溪流に沿て七町目まで達すれば龍ヶ谷瀧あり

り右に阿字の峰絶頂に大日如來像を安置し、左方が即ち子の権現の祠なり、祠の右手は經ヶ峰と云ひ奥の院あり、天狗岩、籠石、坐禪石などあり、規模大ならざれども深山幽溪の姿を備へ、御嶽高雄に優る事數等、安政年間の火災に堂塔寶什悉く烏有に歸したるも亦一名刹として遠足の目的地たるに過ぎたり。

入間川は鮎の名所である、多摩川の如く都人士が大勢入込まぬ故に漁また多く鮎また美、且つまた秩父の諸山手に取る可く風色また美し。

えんそく

荒幡

(狭山の茶園と人造宮
土井に元弘戦死碑)

新宿驛より汽車に乗り國分寺にて川越行きに乗り換へ東村山驛まで行く、(汽車の時
間一時半ばかり、賃金は三等で二十八錢)東村山村は例の癩療養所のある處なれど其
様なものを見る要はなし、北へ十町ばかり行くと徳藏寺と云ふに到る、堂の前に元
弘戦死碑あり、是は元弘三年新田義貞に従つて相州に戦死せし土地の豪族飽間三郎
と同孫七孫三郎の三人の爲に建てられたものにして凡そ五百年も経べく東京附近
には珍らしき古碑なりといふ。(筆者は扁阿彌陀佛)西北一帯は有名なる狭山の茶園
丘上に小高き原あるは元弘三年義貞が此地に屯して兵を集めし處、今將軍塚といふ
塚は狭山の東隅にあり、是より西へ一二町、北に狭山を下り、西北に又山を攀づれ
ば佛眼寺、水天宮、八幡宮等あり、山上を西南に向つて行く事凡そ半里にして、人
造の富士に達す、所謂荒幡の新富士なるものにしてその名を八國山と云ふは頂上
の眼界八ヶ國に及ぶが故なり、頂上は疊三疊敷ばかり、狭山の連山を眼下に武藏野

狭山

不二一つ遙に黒し後の月

一

兆

の起伏は眼中に集まる、若し夫れ空晴れて雲の遮ぎり無くんば富士は固より筑波も
赤城も淺間も歴々指摘し得可し、山を下つて附近を探ぐれば山口の觀音、北野天神
などの靈地あり。

おまゐり

小岩不動

(星下り松と影向松
而して琴弾の松)

兩國停車場より汽車にて小岩まで時間約三十分二等賃金十五錢小岩より南へ十五町江戸川に近く善養寺と云ふが小岩不動なり、小岩不動は星下りの松あるが爲めに聞えしもの、山門を入れば右手に見上ぐる許丈高き枝垂れ松あり、松の傍に不動堂あり、山門より左手に鐘樓ありて、其前には横に擴がる事十間四方にも及び影向松あり高きと廣きと松では東京附近を置いて他にはある可からず、星下り松とは今より二百年前、善養寺の住村の高徳を慕ひて星、天上より下り來りて此松に下がる事數夜遂に落ちて石となりし故に名づくる所にして、其石は今に寺の寶物となり居れりと、境内は幽邃にして泉石のたゞづまい面白く、半日を暮すに惜しからず、夫より江戸川に出で、行徳に菖蒲を見るも悪くはなし、松の序に川を下り今井村に勝興寺の琴弾松を見るも好かる可し、此松は今折れ朽ちて無く唯其空間より生せし二代目の松あるのみ、北條氏康の武藏野遊行の序茲に宿りしが『松風の吹く音聞け

ば夜もすがら、しらべことなる音こそ變らね』と咏みしより名付けたるものなりといふ

すゝみ

桐ヶ谷の瀧

(大圓寺の五百羅漢
安樂寺の連理の塚)

目黒停車場より行人坂に至り坂の中途、大圓寺に詣で、五百羅漢を見る可し、明和九年の江戸大火に死せし人の供養にとて作りしもの、本所とは、比す可くあらねど石に刻めるものだけ珍らしき心地す、坂を下り目黒川を渡り、甘諸先生の墓、新田義興の妻が衣を掛けたりと云ふ衣掛の松を遠に眺め、不動堂を過ぎ十町ばかりにして桐ヶ谷に達す、安樂寺と云ふ寺の境内に池あり、池畔に連理の塚と云ふがあり、小紫が夫を慕ふて自刃せしは眞は行人坂の上にて其處にありし印の石を此の安樂寺へ移せしものなりと、左すれば目黒不動にある比翼塚は偽せ物ともなる譚なり、寺の北に當り氷川神社あり、山の中腹より瀧落つ、桐ヶ谷の瀧とは是なれども、繪に描いた瀧ほどにあらず、唯樹木鬱蒼として晝も暑さを知られざる處なれば綠蔭に讀書三昧の樂みには適せる所なり、茲より五町、大崎か五反田の停車場へ出で、山の手線電車にて歸る可し。

しやうぶ

堀切

(隅田川の青葉
綾瀨の風景)



堀切菖蒲園

何れより行くとしても吾妻橋までは電車が好かる可し、吾妻橋より一錢蒸氣に乗り鍾ヶ淵まで一人前金三錢五厘、向島の青葉の色を眺めながら行き、鍾ヶ淵から十五六町道々菖蒲園の道しるべを當に行けば少しも迷ふ事なく堀切に出づ可し、押上から京成電車で曳舟まで一人前三錢それから歩いても知れたもの也、堀切には菖蒲園の名あるもの二つあり、小高園に武藏屋、小高園には小丘あり松の根本に立つて眺むれば、池より田へ續き見晴よし、紫、白、絞、美しき事云はん方なし、武藏屋は池の周圍に小亭幾つか拵へあり思ひく

に陣取つて酒を叫び肴を呼べる客少からず、春夏秋冬花より團子の譬は持つて廻はるものなる可し、歸りには綾瀬の景色を見る河岸つたひゆる／＼と流るゝ水に従つての散歩も風流の極みなる可きか、菖蒲に傘はつきものゝ如し雨少し降らば、花の色も艶一しほまして眺めば一段の事なる可し。

すゞみ

等々力の瀧

(玉川の鮎を漁し細井廣澤の墓を訪ふ)

等々力の瀧、といろきと讀む、目黒停車場まで山手線の電車に乗る、市内よりは青山線に乗り澁谷より乗換ゆるもよし、飯田町より乗りて代々木にて乗換へるか、上野又は吳服橋より乗り乗換の世話なきを取るか、いづれにしても片道十數錢にて済む可し、停車場を下りて路を西南に取り、名物の竹藪幾つかを通り過ぎ大鳥神社に賽し碑文谷村を過ぎ、約一里半ばかりにして等々力に達す可し、然し玉川電車の便を借れば終點からも駒澤停車場からでも廿町ばかり行けば行ける不動堂あり、堂より右へ石段を下りれば清泉の淙々たる耳にす可く、瀧は崖と崖との間にあり、樹生ひ茂り幽邃の境をなす所に大きからねど等々力の瀧、他の瀧の様に溜めた水でなく本物の清冽な清水が二丈許りの高さから落ちるのだから水は飽までも冷に風は樹の間を漏れて涼しき事云ふばかりなし、瀧の傍に旗亭あり、茲からは程遠からぬ玉川へ歸り又は網に行くもよし、さらすば人の漁つた鮎で一酌、一室を借りてゴロリと

すゞみ
横になれば、蟬の聲の五月蠅きものかわ忽ちに夢は華胥の國に遊ぶ可し、一睡了つて瀧より數丁を隔て、北なる満願寺に細井廣澤父子の墓を訪ふ可し、墓は本堂の背後に相並んであり、寺門の額致航山とあるは廣澤、本堂に満願寺とある子の九阜の筆なりといふ。

(134)

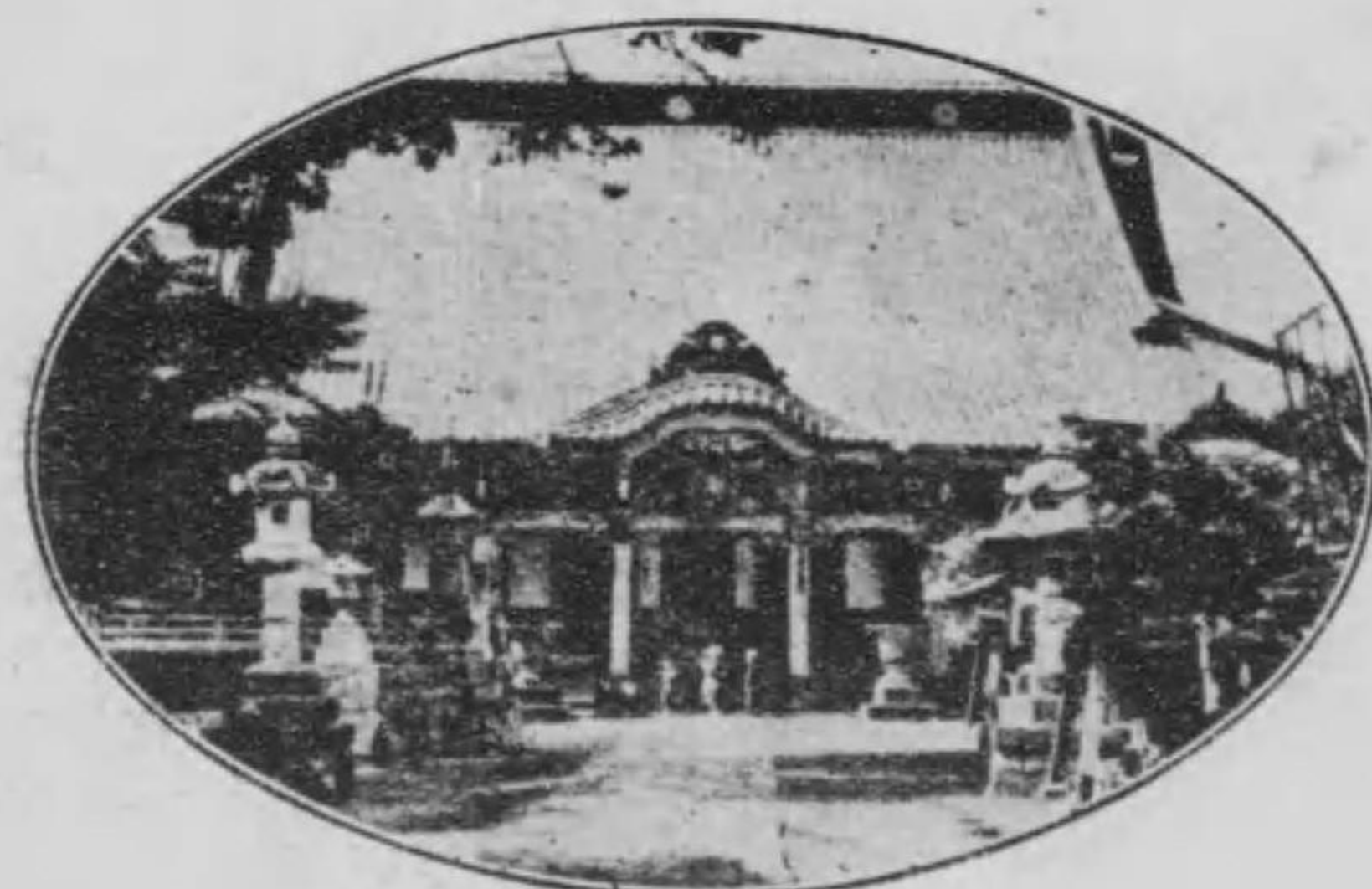
おまゐり

西新井大師

(春は櫻か
秋は紅葉か)

一日がけて遠足しながら、おまゐりに行くによい所は西新井の大師もよい、歩いて行く積りなら北千住から、西新井大師道とある横町を行くと一里位ひ、百姓家がばら／＼とあるその中に、こんもりと老る樹が一杯にあつて、別に一境をなしてゐるのが此の大師さまである、汽車に乗つて行く人は淺草停車場から十一錢上野からなら十二錢で西新井驛で下りて七町行けばいゝ此の大師さまは信心の難有連が非常に多いから、その御縁日の毎月廿一日には素敵な騒ぎである、就中一、三、四、九月の廿一日には參詣者が蟻のようにあるので停

おまゐり



西新井大師

車場より大師さままでの両側は露店が出て種々なものを賣つてゐる、かつ此等の日は臨時汽車が五六回出て、参詣者の便を計ることになつてゐる伽藍は中々立派で五智山總持寺と云ふて、弘法大師自刻の像を安置してある、だから俗に關東の高野山とも云ふてゐる、境内廣くして梅あり櫻あり、秋は紅葉もある、割烹店に常盤亭と云ふのもある、名物は輕焼でその味また實に捨て難い所がある、門を出て五色櫻の荒川堤へは十二三町、田園の雅致實に掬すべきものがある、人力車の便があるが、春などは麥が青々菜の花が黄いろいその中を雲雀をきつゝ歩るゝ愉快正に詩中のものである。

荒川堤へ出て、渡しを渡つて王子から上野へ上野で牛肉でも食ふて歸るがよい。

おみやげ 輕焼

あゆがり

思川と鬼怒川

(日光諸山を望み風景畫の如し)

餘り東京の人が荒らさないで、然も大きな鮎を澤山とつて一日の清遊を楽しむ人には是非とも思川と鬼怒川とを勧めた。

思川と云ふのは、上野より四十七哩、二時間半で行ける賃錢三等七十九錢、二等一圓十七錢、川は驛から八町しかない、河原の向ふが數里連なる大平野でその上に栃木町の太平山が聳へたのを初めとして、そこから一面に日光諸山や上州諸山が聳へてゐる、沿岸の景色また美しく、鮎特に大きくして、數多く、夏時舟遊びと兼ねて瀬に舟を浮べれば鮎が飛んで、河原に撫子が咲いて、清流特に俗腹を洗ふに足る、停車場前の角屋旅館が鮎獵一切の事をやる。

鬼怒川は汽車で氏家へ、上野から七十六哩、四時間で、三等賃錢一圓十八錢、鬼怒川の鮎と云へばまた有名なもので、粹様先刻より御承知の筈である、夏時日光へ行くならば、旅館は盛んに大谷川の鮎ですと、潑刺たる鮎を膳に乗せる、食ふも

あゆがり
のも成る程日光大谷川の鮎かと好んで食ふ、然し何ぞ知らん、其の鮎はみんな鬼怒川の鮎なんだから驚いて仕舞ふじやないか、鬼怒川の風色は説く迄もなく、よい所である鮎獵案内所は停車場前の田島商店前記小山の角屋此處も秋季茸狩の案内もする。

すゞみ

清水の瀧

(手長海老や鮎が歸りのお土産)

一日のんびり瀧にも打たれ、川でも泳ぎ、そして魚も釣つて清遊を檀まゝにしよ
うとするのには、**清水の瀧**へ行くがよい、順路は田端から西へ十町餘小臺の渡
場から少し手前、尾久村の彦根氏の地内にあるのである、いろんな岩や石を三丈も
高く積み上げて、其處に熊笹や楓やらを植へてこんもり茂つたその中から二條の瀧
が落ちて居る、水源を調べてみると堀抜井戸ではあるが、水も十分に冷たさも十分、
王子の瀧の雑喧を嫌ふ人は此處へ來るがよい。此處は多の瀧と違ふて瀧以外の樂み
が多い。瀧壺を向ふへ行くと一寸高い所がある、そこからは荒川の流れの白帆や櫓
の音を聞く事が出来、かつ瀧ももう十分だとなれば川へ行つて釣りをすれば、手長
海老や鮎なども釣れる、朝から十分に瀧を賞して後、夕風に吹かれつゝ釣つた海老
や鮎を土産にして歸る、此れが清水瀧の他に全く優れた大特色である。然し足弱の
婦人等は三の輪から王子電車で小臺まで往復十三錢

すゞみ

すゝみ

王子の七瀧

(正に此れ理想的
銷夏の小天地)



瀧の川の瀧

東京の近郊には瀧は幾くつもあつて敢て不足はないと云ふものゝ、それがほんとに申し譯のような瀧が多いのは聊か面を喰らはざるを得ない、瀧の案内としては既に目黒も桐ヶ谷も、十二社も盡したから、ものゝ順序として王子の七瀧はのがすことの出来ないものである、そして近郊で一番人の行くのは、何處かと云ふと此の王子である、王子は前記の各所から見れば便利であると云ふ點が、あの通り有名になつた原因でもあらう、王子は上野から汽車に乗つて眼をつぶつて居ると、もう着いて仕舞ふ、二等で十一錢三等で七錢である。

俗に王子の七瀧とは云ふものゝ、事實は十はある、即ちその名を挙げれば、不動の瀧、辨天の瀧、権現の瀧、稻荷の瀧、名主の瀧、見晴の瀧、大工の瀧、清水の瀧、巖の瀧等である、今その中の先づものになつて居るもの丈けを記すすと、

不動の瀧 は停車場を出て、交番の所からその街道を飛鳥山の方へ登つて登り切つてから少し行つて右に曲がる、それから五町程行くと、たきふどうと云ふ碑がある、その碑について右へ曲つて正受院、不動尊がある、此の寺の本堂の裏にある樹が鬱蒼と茂つて、前に瀧の川が流れてゐる、たきふどうの名に反かす高さ四間二條の瀧が落ちてゐる、そしてあたりが幽寂の境地にあるものだから深山へでも行つて居る氣になれる、眺めもよく趣みもあり、瀧もよく、王子の七瀧の筆頭のもは、此れであらう、瀧は一寸強いから婦人には向くまいが男子にはいゝ、かつ瀧へ下る阪路に茶店があるから萬事に都合がいゝ、**辨天の瀧** は金剛寺と云ふ寺の境内にあると云ふたのは、解るまいが、瀧の川の橋の所さと云へば、あゝあそこかと大低合點が行く、不動瀧に比すべきものでもないが女や子供には反つて、その箱

庭的の趣に富んで居るので賞されてゐる。

権現の瀧

王子の権現の下で、川に臨

んである、場所が如何にも狭くつてどうにも仕様がな

稻荷の瀧

王子稻荷の

境内にある、神杉や鉾杉が神々しいように繁つてゐる蔭にあつて、晝尚ほ暗い所で

名主の瀧

東京近郊の

幽邃な所にある。茶屋が近所に多いから至つて便利である。

瀧で一番大きくつて、一番綺麗な瀧はと云へば、此の名主の瀧であらう、前記稻荷

の瀧の前を四五町行つた山腹王子園の中にある、土地の人は新瀧とも云ふて居る

瀧もかなりの瀧で、清水の瀧が五本と電気仕掛の高さ二丈幅三間の大瀧が一本ある、

園中六千坪の廣さで、その中には甲斐根澤の名巖奇石を移して細流曲折架するに日

暮しの橋を初めとして五橋その間十二の雅致に富む新旗亭が散點して風景のよいの

も近郊の瀧の筆頭である、辨當でも何んでも取れる。

以上の外の瀧は一々説明する程でもない、王子の七瀧とは云ふものゝ、此處に説明し

たのさへ浴びればそれで十分王子の瀧博士だ。

古河

(熊澤蕃山の墓に詣で、
靜御前の跡を吊ふべし)

少し離れた所に桃を見ながら春色を探ろうとす

るならば古河は差當り適當の場所であらう、古河

と云へば變な所で、茨城と千葉と栃木の三縣が、

ぶつかつて居る所である、それに利根川と云ふ大

鐵橋を渡るからそれ丈けでもう何となく遠くへ來

たような感じのする町である、上野から三十八哩、

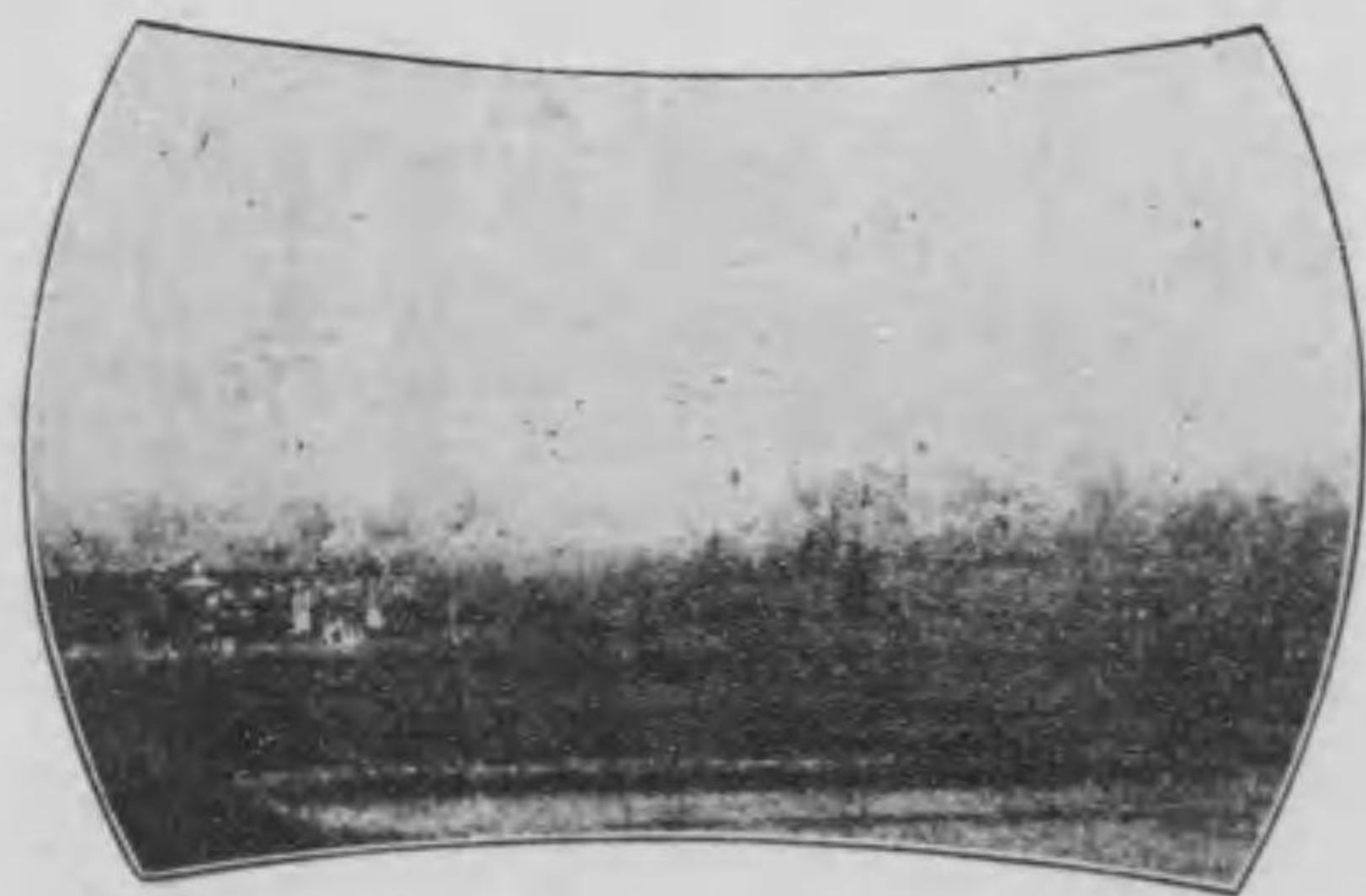
一時間五十六分三等往復一圓廿八錢、桃林は驛の

南方約十町の處で一里位ひ艶を競ふて薄紅に咲

き、樹の下は麥の畑が青々と滴たる様で、兩々相

映じたる様は何とも云ふ様がないように美しく、

花時の雅客が年々殖へて來る。彼の有名なる熊澤



古河の桃林

の稱がる、鐵道院は大低二月十八日頃から三月十一日頃迄、青梅、日向和田に至る、昌平橋新宿間各驛より通用二日間の二三等二割引の往復乗車券を發賣してゐる、青梅から行くものは青梅町の南から多摩川に架けてある萬年橋を渡りつゝ、川中の水車の奇景を賞して一里も行けばよい、日向和田からするものは白玉橋か或は神代萬年橋跡渡船で行くもよい（御嶽の項參照）

おみやげ 梅羊羹、梅干、梅びしゆ、青梅雛

う め

江東の梅

（龜井戸から始まつて百花園で終る）

梅見の時は季候が少しは寒い、然し寒いなど、野暮を云はずに、その寒い田甫路をてくく歩くか江戸ツ子の江戸ツ子たる所以であらうと思ふ、就中一日てくく歩く梅の名所は、矢張り昔しから江戸名所として名高い、龜井戸天神境内の梅が振出してゐる、それから臥龍梅江東梅園、次郎兵衛梅、木下川、百花園と一日の郊外散歩にこんなよい道順はまたとあるまい、

う め

龜井戸天神の梅

大水の時には殆んどやられて

仕舞ふて、有名な梅も哀れ見る影もないのは誠に残念であるが、然し残つてゐる老木の間に若木を



花梅の戸井龜

取交せて約五百株、さすがに昔しの面影を残して、捨て難い所がある。臥龍梅

は、天神の裏門を出て左へ行くと右側に奥深くある庭園で、入場料金五錢を取るの
は聊か風流心を殺ぐ傾きはあがるがそれも浮世と勘忍して這入つて行く、その外古木
が多いから見たことのない人は見るがよい。江東梅園 臥龍梅から出て右へ行く

と、人がどん／＼行く、皆な梅見の人たちだから、黙つて居てもこゝへ来て仕舞ふ
然し聞いてみなければ合點が行かない人は臥龍梅から橋を渡つて少し行つて右へ曲
つて左側、木は總體若いが多い。次郎兵衛の梅 江東梅園を出て、左へ半里程

行くと中川へ出る橋を渡らうとする左側の農家にある梅が此れである、此の梅も古
木が多く庭園はさしたる奇はないが持主の家が藁家で大きな建物で何となく田舎じ
みて昔し／＼に呼び戻されそうなきがして何とも云はれない。木下川 中川の土

手を半里程、秩父連山の残りの雪を見ながら行くところ、こゝは随分古くから江戸
の騒客を引いた所であるが、先年勝海舟伯が此れを買ふてから以來同家の有になつ
て居たが今は徳川公爵家の別邸である、庭園の趣閑雅でかつ廣く、少しも俗じみて

居ないのと成金奴等のくには餘り遠いので、客の種がいゝから、氣持ちがいゝ、
梅問虻が飛んだり、鶯のなく様仙境と云ふてもよい、然し例の野暮な人達が河川改
修の爲めだと云ふてその大半を取つて仕舞ふたのは横暴だ庭を出て、前の中川に幾
多の太公望が糸をたれておるのも春らしく長閑でいゝ。百花園 木下川から田浦
みちを半里もくると、向島へ出て此所の梅を賞する、梅干とも又候その清趣は此所
に限る、(七福神向島の項参照) 吉野園 木下川歸りに行くもよいが、此處は押上
の京成電車で片道六錢で四ツ木で下りる、廣大な園内に數百の梅樹がある、名物の
奈良漬、梅漬で澁茶を飲むのもまた一興。

さくら

三里塚

(陸下の牧場たる三里塚の
櫻は正に關東第一なり)

櫻と云へば、東京に乏しくはない、最も手近かに上野の花は、松などの常盤木が相交はつて居るので、景趣に於て賞すべきものではあるが、その數に於て乏しい。荒川の八重は濃艶餘りてその威を振ひすぎて寧ろ卑俗である、小金井と向島とは花の道が長くはあるが、單調であると云へば云へる、三里塚の櫻はその量に於てもその域に於ても實に冠たるものである、その種類から云ふても山櫻あり吉野あり八重あり一重あり多々別々である。

三里塚の景は長い繪巻物のようである、その長さ花道を過ると、すぐに森の影滴る松林に出たり、まがり／＼て小丘に登る行くに従つて變化し行く様、大陸的の趣きがある日比谷公園は狭くして小さいが、三里塚の牧場は南北五里の宏大な公園である、牧場の櫻は正に三萬五千株あつて、松柏の下に肥馬がゐたり、羊がゐたりもしそれゴシツクの放牧場には櫻が咲き亂れて、その下に親馬と犢馬と戯れてゐ

る様、どうしても繪巻物と云ふより外はない、若草が燃ゆる春の頃に三里塚の牧場に行つて見給ひ、夕陽が森の蔭に落ちた頃、馬が幾千相走つて歸つてくる様、得も云はれない、實に詩中のものである、どうしても此れを見ないで大きな顔をする人様の笑ひものになる。三里塚は上野からでも、兩國橋からでも行ける、成田から五十八分汽車に乗れば行ける、だから上野から行くと成田直行があるから、三時間で行けるし兩國橋から行くと三時間半程かゝる、櫻の頃には双方から三等往復一圓四十四錢と云ふ割引券が出る。

おまゐり

浦安辨財天

(夏は海水浴に適し行徳へ廻つて行々子を聞しよ)

此の頃開けて、非常に景氣が出たのは浦安の辨財天である、大蛇を祀つてあるとか
 でお土産の筭も羊羹も蛇が付いて居るので氣の弱いものは、見たばかりで、ひやり
 とするだらうが、それは兎に角御利益が非常だと云ふので毎月の巳の日には東
 京の有難連が出るは、押すな、の大景氣である此處へ行くには、汽船とか和
 船で行くのだが、その路が第一面白い、そしてそれが高が川を行くのであるから池
 を走ると同じで、かつ船で行くから賃錢が安くつて春や秋の日和のよい頃は遠足が
 からの好適地である。此處へ行くには電車で兩國橋を渡つて龜澤町で黒江町行きに
 乗換へて、高橋停留場を下りる、下りるとすぐ橋の左に汽船發着場がある。汽船は
 浦安へ日に十回往復して一時間半で行く切符は二日通用往復十五錢で行ける、和船
 で行きたい人は汽船發着場の裏から二時間で片道六錢で行ける、行く川筋を中
 川へ出て江戸川を過ぎて向ふの側が浦安である、浦安へ下りて右へ繁華な町を通り

抜けて田圃へ出て十町程でその有名な辨財天祠がある大蛇を祀つてあるのである。
 そこから五六町で海水浴場へ行ける一體を海の袖が浦と云ふ海は遠淺で浪靜かに婦
 女子の海水浴に最も適してゐる旅館はさ々なみ一軒しかない奇麗で安いのを特色と
 してゐる、前に房總の山々が低く、或は箱根の山から富士山も見へ近く東京灣を往
 來する白帆は繪の如く絶景で此の邊一帶中川尻江戸川尻かけて一面の蘆花の雪であ
 る、初夏の頃は行々子をさくべく、初冷到れば五位鷺鳴きくべく鱒鱈海老魚を釣る
 もよい。

う め

久地と用賀と下作延

(玉川の春の遊び
真に一幅の畫也)

澁谷の踏切から走り出す玉川電氣鐵道の梅の名所は先づ玉川の手前で用賀停留場前の梅園玉川の終點二子の渡し向ふの久地梅であらう。用賀の梅園は開園日が早いか中々いゝ樹が多い、梅園の名を鈴木園、庭廣からず眺望と云ふても平地のことであるから、取り立て、云ふ程でもないが、此の邊り一帯麥が青々として居て何となく景氣がよく老梅數百その外盆栽花卉を陳列してゐる。久地の梅は二子の渡し向ふ岸料理店龜屋の手前の土手に添ふて右へ八町程も行く、豪家川邊氏の有で樹の姿が龜井戸の臥龍梅に似て古閑、老幹幾百株あつて見事なものである徳川時代には將軍が時々御出があつたと云ふ由緒のあつたものである。久地から十町程先の「下作延」の梅は新月ヶ瀬と云ふ名前程あつて農家とその裏山かけて數十本の梅が如何にも野育のそのまゝ、田園の景趣自かち掬すべく都人の清涼劑である。玉川電車は玉川終點まで往復金三十一錢。

う め

津久根

(荒川の上流に沿ふて
新月ヶ瀬の稱あり)



荒川の流上

少し遠いが埼玉縣川越から五里越生を通つて梅園村字津久根と云ふ處は梅の名所で、新月ヶ瀬と云ふ名を冠して年々梅の頃は客が増す一方である、此の地は地勢がいかに善く出て來てゐる右に里山を控へて下に荒川の上流越扁川を瞰下して、白布のように清流に沿ふた梅を賞するのである。

る、全く俗界を離れて、その眺め大和の月ヶ瀬にも劣りはしない。川越へ行くには上野から汽車で行つて大宮で三等二十八錢。電車で乗換へて川越へ行く三等十八錢か、それとも飯田町發の汽車で國分寺乗換へて川越へ行くかである三

等六十三錢、川越から越生までは馬車が毎日八回づゝ往復し越生から津久根までは
 人力車が十錢で行く。
 川越には天海僧正再興の巨刹喜多院や武藏野を一眸の下に集むる天覽山能仁寺五百
 羅漢がある。

海水浴

助川と河原子

水戸の向ふを、ならして一般に海岸線と云ふてゐる、海岸線はその名の通り、海岸であるから夏向の處である。海岸線で海水浴によい所は、まあ、久慈濱と河原子と助川であらう。

久慈濱は大甕驛（上野から二等一圓九十七錢三等一圓卅一錢）を下りて約半里許りで行ける、漁師町の事であるから少々生臭いが、安い事は無類飛切である旅館に銀波樓、一泊僅かに七十錢、海は遠浅でよく、客も餘りにないからごく呑氣なもんだ。附近に「みかの原湧きて流る、泉川」の泉ヶ森がある、絲滴る林間の地に水が清く湧き出で、

海水浴



助川の海岸

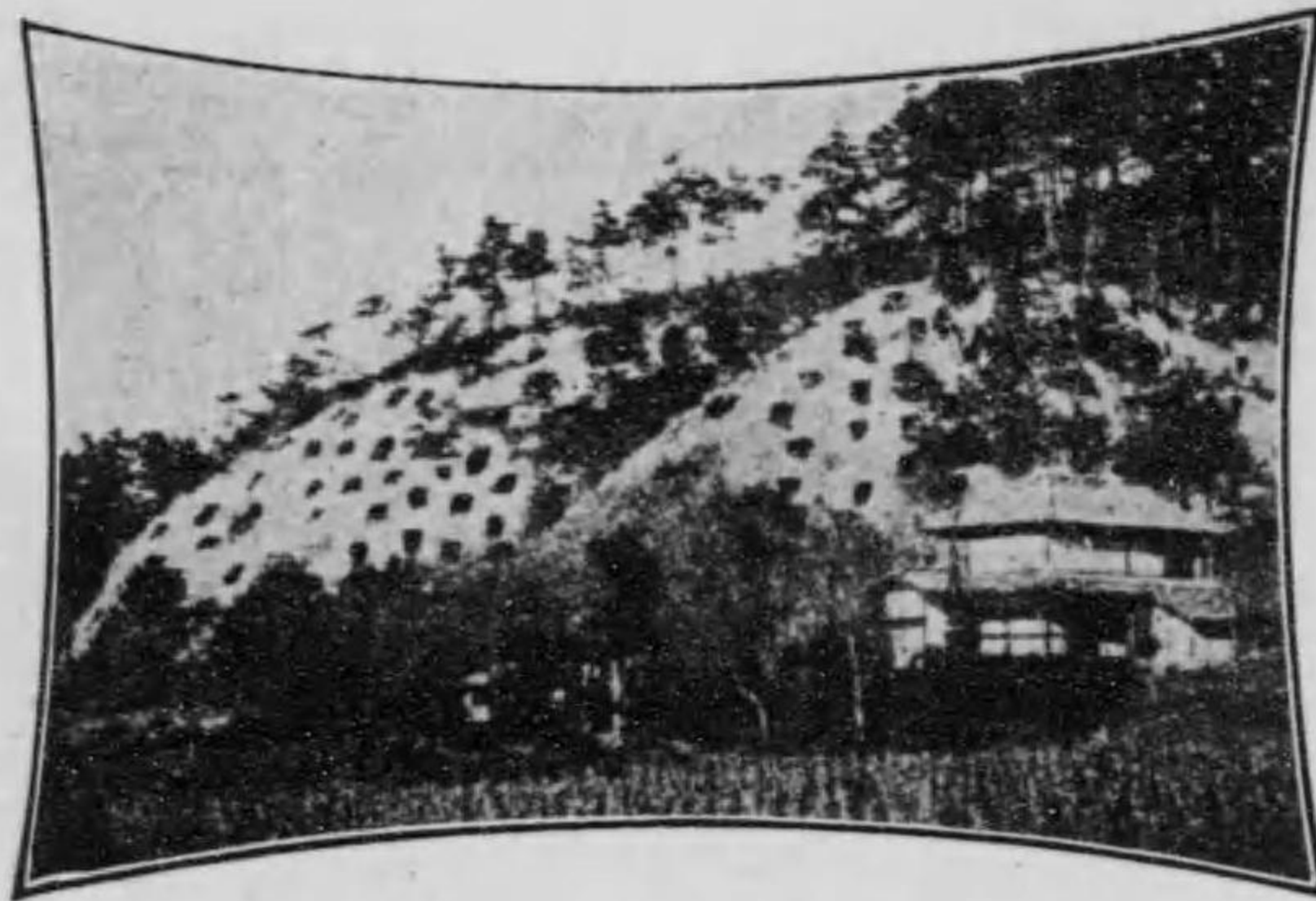
痛快である。

河原子 は久慈から一里、汽車など下澤驛から十町足らずである、川の清い事は此の邊第一で河原子館外五六軒の旅館がある何づれも一圓以下、土地の人は親切で質朴 助川 は助川驛にある、上野から二等二圓七錢、三等一圓八十錢の旅館に東曉館、天地閣等がある就中東曉館の邊り岩角に青い松が行列をなして突出し、颯々たる涼風琴を奏してゐる世に第二の大磯と云ふて居る。

ゑんそく

百穴

(吾々の先祖の住んで居た穴を見て來給へ)



ゑんそく

百穴の跡

電話でチリン／＼「もし／＼御早う、大阪は天氣ですか」「おーきに天氣だすせ」なんて云たり、自動車でプープー濟まして乗り廻はす當世だかもしその時に氣を持ち正して、一體吾々の祖先はどうして居たろう、猿の上等の部だつてほんとにそうかと疑ふ人は三千年の古、吾人の祖先が穴居していた、穴居時代の遺跡、百穴の跡を尋ねるのも穴勝無駄な事ではあるまい。百穴は鴻巣驛から二里半、松山城址なる石山一帯の半腹にある、人力車の便もあるが、穴居の跡を尋ねようとする心掛けのものは歩いて行くが、

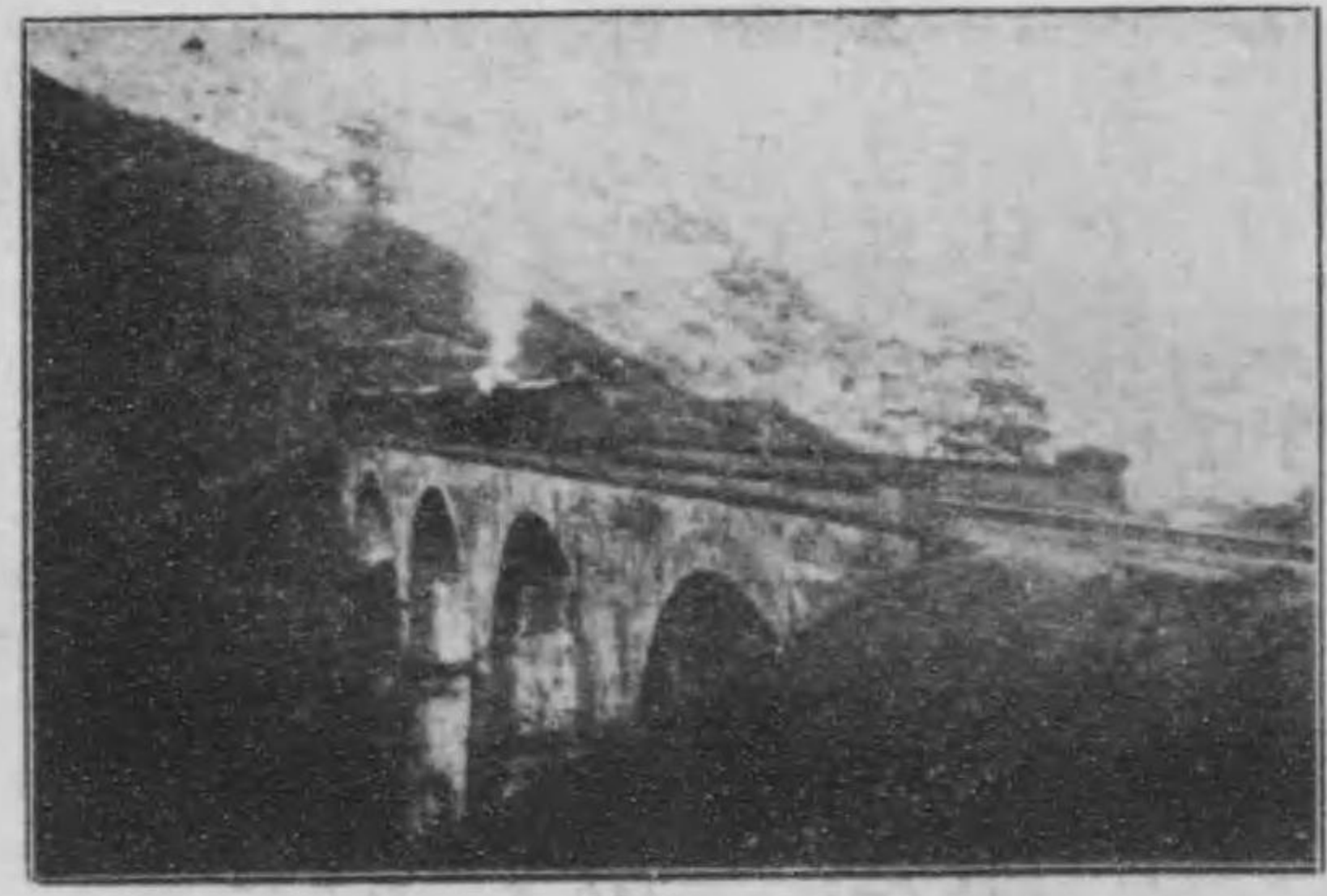
祖先そせんに對たいする禮れいであらう、百穴ひやくあなは遠望えんぼう殆ほとんど蜂はちの巢すに似にて居ゐる、なんぼ三千年さんせんねん前ぜんだ
 とてよくこんな所ところに住すめたもんだと、考古學こうこくがくの一端たんを知しるは國民こくみんとして正まさに一日いちにちを
 費つひす價値かちは十分ぶんにある。
 上野うえのから鴻こうの巢すま迄まで一時間半じかんはん三等とうで四十八錢せん、

もみぢ

碓氷峠

(碓氷川の清流と霧積の温泉)

碓氷うすひの紅葉もみぢは神寂かみさびて、浮うきくして居ゐない、更さら
 紗さのような滋味しじみがあつて落おちつて居ゐる、碓氷うすひへ行ゆ
 くには日歸ひがへりでは一寸無ちよつと理りだ、どうしてもその前ぜん
 夜やから出でるに限かぎる、上野うえのを終列車しゅうれつしゃの新潟直行にいがたちよくかうに乗の
 ると、四時間じかんかゝつて輕井澤かみいざはらに着つく、三等とうで一圓えん
 三十三錢せん、二等とうで二圓えん、輕井澤かみいざはらに着つく時間じかんが朝あさの
 三時四時じじは紅葉もみぢの頃ころはその時間じかんではまだ眞しんの暗やみ
 であるから、日ひが出でる迄まで停車場ていしやばの待合まちあひで待まつかそ
 れとも停車場ていしやば前の油屋旅館あぶらやりやうわんで朝食あさしゆくを濟すまして發たつ
 がよい、道順ちぢゆんは本輕井澤ほんかみいざはらへ行いつてそれから峠町たふげまちへ
 行ゆく、峠町たふげまちへ行ゆく中途ちゆうとの茶屋ちやから本輕井澤ほんかみいざはらを眼がん下か



碓氷峠

に見る、淺間山が景氣よく烟を出して、その下に本輕井澤町の滋味のある紅葉が常盤樹の中にそこら一面に神寂びて居る、峠町へ入ろうとする右手に遠く妙義山が見えて奇景手に取る様である。峠町には熊野權現を祀つた峠の社がある。權現の下に茶屋があつて力餅を賣つて居る、力餅を賣る家が二軒あつて一軒が長野縣で一軒が群馬縣になつて居る、道は此處で新道と舊道とに岐かれる新道と云ふのは熊の平に出るので舊道は新道より道は悪いが面白い、兎に角遊山だ面白い方がいゝ。舊道を少し行くと日本武尊の「吾妻はや」の古蹟がある、こゝから山は益々紅葉がよく道が羊腸を曲り曲つて三里も行けば阪本宿へ下る、下る一寸前に近頃開けた電氣汽罐のサアドレールがよく見へる。



輕井澤

阪本宿へ行く一里程手前に霧積温泉への近道がある、阪本は山の町で水が兩側に流れて居て如何にも山の里らしい油畫にでもありそうな町だ、路は此れから碓氷川を流れて下る、横川を通り抜けて、松井田まで歩いて、まだ日が高かければ此處から妙義山を見れば遠くへは行けないがまあ行けるには行ける、そして終列車で松井田發すれば十二時頃正に上野着此の旅行は眞から一度は行き給ひとおすゝめ申す

碓氷峠

見あぐれば信濃につゞく若葉哉
山々は萌黄淺黄や時鳥
有明や淺間の霧が膳を這ふ

子規
同
茶

越ヶ谷

(鳩がなげは田に一杯松に)

桃の花と云へば、越ヶ谷ですと云はないものはない、その時にうつかりさうかねと返事をしようもんなら早速「草加は千住の先きだよ」と揚げ足を取られる桃の越ヶ谷は千住の先きの草加のそのまた先きにある町である、歩いて行つたつて幾くらない、春の長閑の日和でもあり、草加過ぐれば野にれんげは盛り、街道の並木には鳩もないて居るから、血氣な少年は歩いて行くがよい、然し汽車となれば東武線、浅草驛から越ヶ谷まで汽車賃二等二十九銭、三等二十六銭、哩數十五哩餘時間は一時間で來られる。桃林は停車場から五町、小山があつたりその間に麥畑があつて二ヶ所に分かれて居る、何つれも四五町も廣がつてゐる。樹は古るく加ふるに荒川や古利根の碧流がそれに流れて、盛花の頃には紅霞帯の如く、胡蝶舞ふの景實に越ヶ谷の桃は關東第一の名のある譯けである、三十町隔て、西方不動にも桃がある、尙十三町にして、

久伊豆神社 と云ふがある境内老樹多くして、晝尙は暗く、神

苑に藤の老木があつて高く水上に紫雲がたなびき花の房の長さ五尺に及び、水に躍に老鯉と相映じて此れ實に畫中のものたり、粕壁の藤をみたる人は必ずまた此の藤を見ざる可からず。越ヶ谷から三里行くと野田に行ける、(野田の項参照) かつ越ヶ谷の地は桃を以つて天下に知れて居るが梅の清香もまた夙に織者に知られて居た、全村到る處に老梅はあるが殊に **淨光寺** 境内のものは近地稀に見る好樹である。梅の頃にも割引切符を發賣する。尙ほ越ヶ谷の東一里許の處に **松伏** と云ふ水郷がある、途中は桑畑の砂利道で餘まりよくないが、やがて左に田甫右が川柳岸と云ふ沼がみゆる様になるとよくなる、程なく松伏に著く此度は中川が流れ出す沼で側の茶亭から釣れば誰れでも鮒の五六十はすぐ釣れる四ツ手網に貸すれば鯰や鯉もとれる蓋し仙境なり。

も

野田

(醤油で名高い龜甲萬や
木白なども見られる)

醤油と云へば銚子と野田と云ふことは誰れでも、
 知つてゐる、銚子なら上山にヒゲタで、野田なら
 龜甲萬、木白、上十、櫛形、水十を始めとして醬
 油の醸造地として有名であるが、此の地もまた附
 近一帯、桃咲いて妖艶を極むるのである
 上野から二十七哩、賃錢は三等で五十錢、柏驛で
 乗換へ、二時間で野田に達する。桃の盛りの頃に
 は、醤油の各醸造家も、ふだん秘密にして見せな
 い醸造場を開放して一般の人に見せる、毎日朝晩
 用ふる醤油の製造を見たことのない人は、話の種
 だ少し見て来て話の種を殖やすもよからう野田は



野田沙王湖

どうしても一日の清遊に費する價値のある所である。町から五町にして、野田公園
 がある、公園は沙王湖と云ふ南北一里半の沿に臨み、蘆や真菰が生い茂つて
 子切になく風光實に一幅の畫を見る様である、田舟に揖して釣るもまた妙絶
 行々